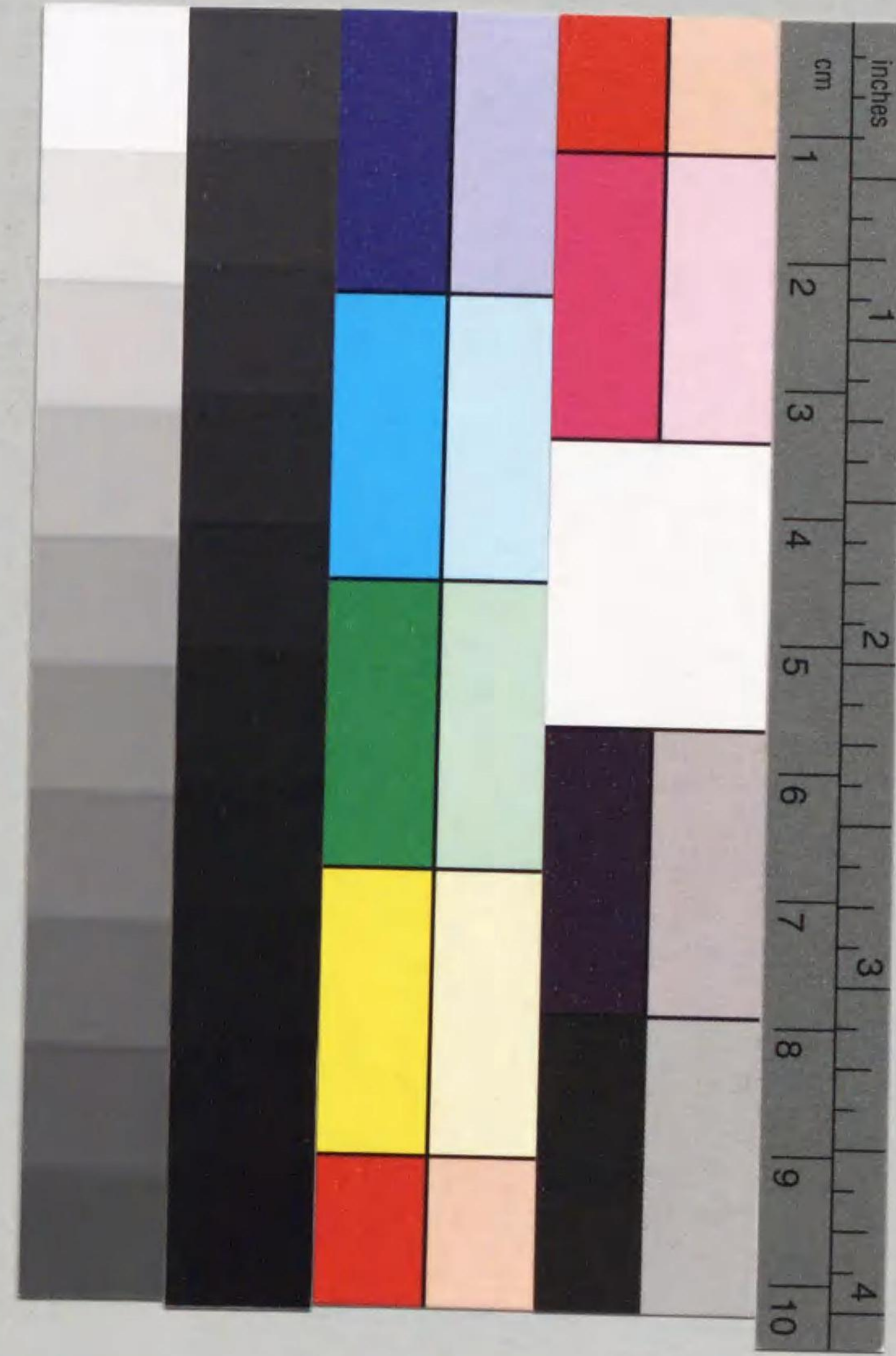


912.6
0475k



00229948



157

日本
中央
圖書

680

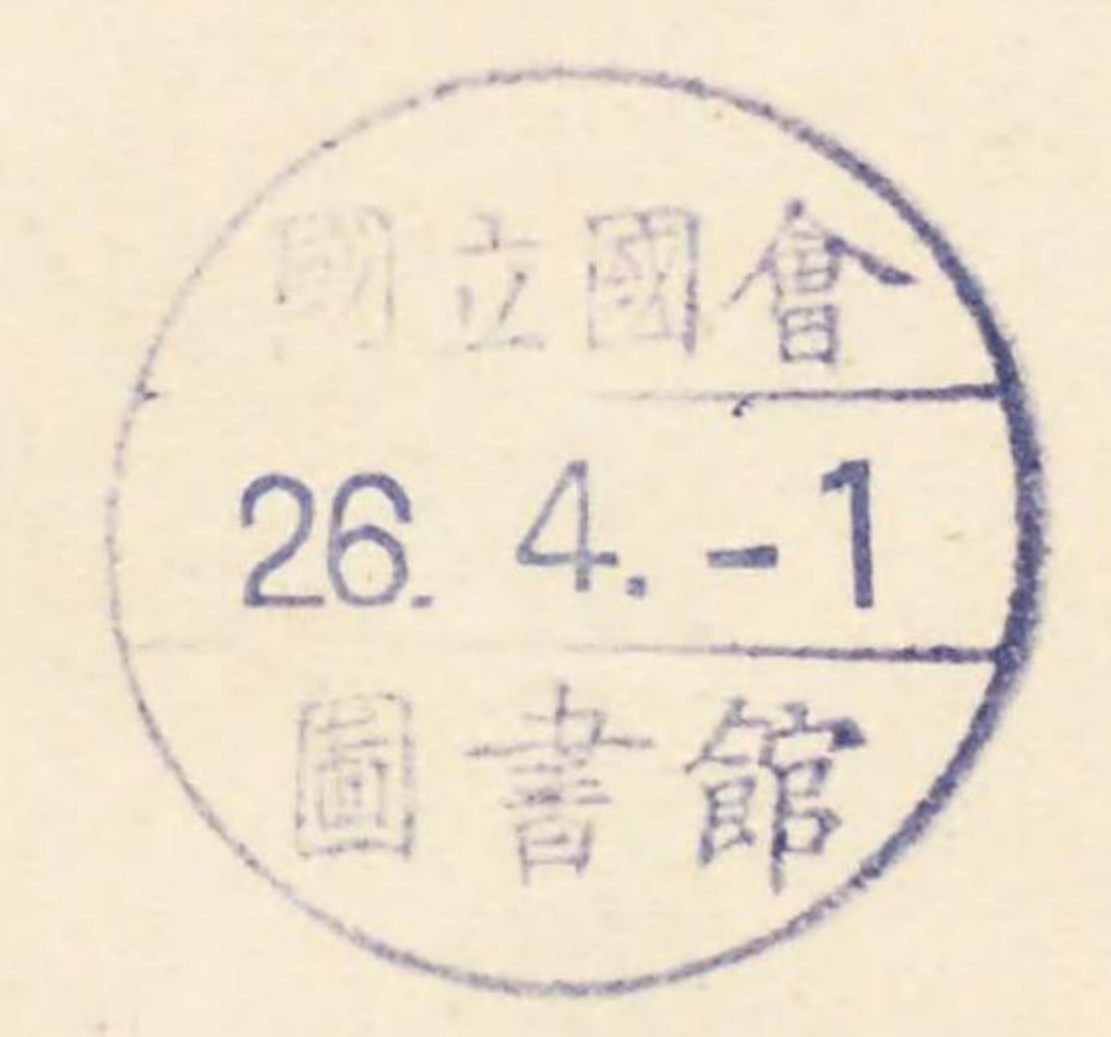
岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第五卷

東京春陽堂版

912.6
Q415k



229948

第五卷 目次

大坂城	一
蒙古襲來	四
籠釣瓶	八
楠切草	一五
弟切草	三九
佐々木高綱	六二
御影堂心中	六九
曾我物語	七五
仁和寺の僧	七三

大坂城

大正十年八月作。
大正十年十月。歌舞伎座初演。

初演當時の役割——速水甲斐守（片岡市藏）眞田大助（市村龜藏）伊集院半兵衛（市川左團次）池邊權五郎（市川左升）阿茶の局（市川中車）小笹（坂東秀調）お菊（中村芝鶴）淀の方（中村歌右衛門）など。



登場人物——速水甲斐守。眞田大助。穴山小平太。村上彌六。伊集院半兵衛。池邊權五郎。茶坊主休林。阿茶の局。奥女中小笹。侍女お菊。淀の方。ほかに侍女。女の童軍兵など。

第一幕

大坂城の京橋口。平舞臺の正面は堤のこゝろにて、向うには淀川みゆ。所々に松の立木あり。
（元和元年五月七日の夜半）城の大手口及び玉造口にては合戦の最中とおぼしく、陣鐘の音なきゆゑ。上のかたより眞田大助はうしろ鉢巻、陣羽織、籠手腰當の若武者。穴山小平太は松明を持ち、村上彌六は槍を持ちて附添ひ出づ。）
大助。
（空み仰ぐ。）暗い夜ぢや。大戦の後には雨ありといへば、やがて雨にならうも知れまいぞ。

小平太。

大戦の後……。(これも空を仰ぐ。)このいくさがまだ幾日つゞくでござりませう。

彌六。

所詮は二日か三日……。いや、もう一日かどうかも知れませぬな。

大助。

いかにもそち達のいふ通り、大坂城の運命も所詮長くは保つまい。父上は討死、われくもやがて冥土のおん供ぢや。とは云ふものゝ、かうして籠城してゐるあひだは、口々の固めが肝要、正面の敵にのみ氣をとられて、川口の固めを怠つてはならぬぞ。

二人。

はあ。

(上のかたより薄衣をかつぎたる侍女風の女が小さき包みを持ち、女の童の手をひきて忍び出づ。)

小平太。

(見とがめる。)待て、待て。

彌六。

おのれは何者で、いづれへまゐる。

(小平太は松明をさしつける。女の童もそこにうづくまる。)

大助。

衣を取れ。

(女はかつぎし衣を取る。)

大助。

よい、よい。ゆけ、行け。

(女は會釋して、女の童と共に早々に下のかたに立去る。)

小平太。

(あとを見送る。)落城も近いうちと見かぎつて、ぬけくりに落ちてゆく者が多いやうぢや。所詮落城ときはまるからは、女子供老人、さては手負の者どもなど、思ひくりに退散するがよい。まさかのときに逃げ惑うて、火に焼かれ、馬の蹄に踏みにじらるゝは餘りに無

慚ぢや。

(上の方よりやはり薄衣をかつぎたる大坊主一人忍び出づ。小平太は進みよりて松明を差付ける。)

坊主はうづくまる。)

小平太。

何者ぢや。おもてを見せい。

坊主。

はい。(躊躇してゐる。)

彌六。

え、早くその衣を取つて見せぬか。

坊主。

はい。

小平太。

え、胡亂な奴。それ。

(小平太は彌六に眼くばせすれば、彌六は衝と寄つて、坊主のかつぎし衣を剥ぐ。)

彌六。

そちは茶坊主の休林でないか。

小平太。

御運を見限つておのれも落つるか。

大坂城

坊主。

恐れ入りましてござります。

大助。

今更となつて詮議は無益ぢや。落ちたくば落してやれ。

坊主。

ありがたうござります。

彌六。

命が惜くば勝手にゆけ。

(彌六は槍の柄にて突き遣る。突かれて茶坊主は倒れたるが、また這ひ起きて薄衣をかぶり、早々に下のかたへ逃げてゆく。)

大助。

唯今も申す通り、女わらべ茶坊主のたぐひ、落ちたくば勝手に落してやれ。たゞし然るべき侍が命を惜み、恥をわすれ、覆面などして落つるものあらば、味方とて容赦なく斬り捨てい。

二人。

はあ。

(水の音。大助は先に立ち、小平太と彌六は上のかたに立去る。水の音、うすく陣鐘の音。下のかたより薩摩の家來伊集院半兵衛、三十餘歳、帷子の下に籠手をつけ、蓑笠にて忍び出づ。ついで池邊權五郎、おなじこしらへにて權を持ち出て出づ。)

權五郎。

幸ひの雨もやひ、闇にまぎれてこれまで漕ぎ寄せ申した。さすがの關東方もこの川口まで

半兵衛。

は手がまはらぬと見えまするな。

(笠をぬぐ。)さりとして油断はならぬ。ぬけ目のない大御所の軍配、城方の逃口を塞ぐためにひそかに人数を配つてあらうも知れぬ。(あたりを見まはす。)いづれにしても城は眼の前、お身はこれより引返されい。

權五郎。

ではござれども、お手前おひとりでは……。

半兵衛。

(氣ぜはしく。)いや、いや。ふたりが連立つては却つて人目に立つ。これからはそれがし一人の役目、お身は舟へ引返して、かねての合圖を相待たれい。

權五郎。

(躊躇しながら。)それでもせめて城際まで……。

半兵衛。

さりとしては情の剛い。早く、早く……。

權五郎。

では、くれぐれも御油断なく……。

半兵衛。

なん時にも舟出の用意、ぬかりめさるな。

權五郎。

心得申した。(ゆきかゝる。)

半兵衛。

あゝ、これ。

(半兵衛は權五郎を呼びとめて囁く。薄く陣鐘の音。をりくりに小銃の音もきこゆ。上のかたより

真田大助うかいひ出づ。

大助。

(透しみる。作者ぢや。)

二人。

え。(半兵衛と権五郎は躊躇する。)

大助。

何者ぢや。早く名乗れ。

半兵衛。

さういふお手前こそ關東方か、但しはお城の衆か。

大助。

(これも少しく躊躇する。それ聞いてなんとする。尋ねられたるお身達より先づその身分を明かされい。)

権五郎。

(半兵衛を庇ふやうに進み出づ。い、むざとは云ふまい。城方か關東方か、先づお身から名乗られい。)

大助。

え、いつまでも同じことを……。咎められたら名乗るが法ぢや。おのれどうでも名乗らぬか。

権五郎。

お身の身分を聞かぬうちには、われもめつたには名乗るまい。

大助。

はて、面倒な。敵にもせよ、味方にもせよ、夜陰にこゝらを徘徊するは胡亂な奴、兎もかくも引立てまゐるぞ。さあ、あゆめ。

甲斐。

(家來を見かへりて。それつ。)

半兵衛。

(大助は先づ権五郎の蓑をつかむ。権五郎は持つたる權にて突き退けんとしてたがひに争ふ。半兵衛はひと足退りて、身がまへしながら窺ひある。上のかたより速見甲斐守は籠手壓當、陣羽織、家來數人を率ゐて出づ。家來のふたりは松明を持つ。)

甲斐。

(蓑をぬぎて進み出づ。あいや、しばらく。其許は速水甲斐どものではござらぬか。)

半兵衛。

いかにもそれがしは速水甲斐。して、お手前は……。定めてお見おぼえもござらう。それがしは……。(云ひかけて、他の家來どもの手前を憚る。)

甲斐。

な、伊集院半兵衛……。

半兵衛。

(聲をひくめる。國訛りでも大方は御推量のなる筈。われは薩摩のものでござる。)

大助。

む。さてはお身達は島津殿の……。

甲斐。

叱つ。(あたりを見かへりながら、これも小聲になる。)

半兵衛。

憚りながらあたりのお人を……。

甲斐。

む。 (大助等に。) 薩摩の衆がなにか密談があるといふ。お身達はこゝを遠慮せられい。

大助。

(不安らしく。) お身様ひとりをごゝに残して……。

甲斐。

仔細ごさらぬ。早う行かれい。

大助。

はあ。

(大助は先に立ち、甲斐の家來もついて上のかたに立去る。薄く水の音、家來の一人は松明をかざして甲斐のそばに残る。)

半兵衛。

(権五郎を見かへる。) 甲斐殿に逢うたれば最早懸念はない。お身も舟へ引取られい。

権五郎。

(権五郎は甲斐に一禮して下のかたに立去る。甲斐も家來を見かへる。)

甲斐。

密談は暗いがよい。そちもゆけ。

家來。

はあ。(松明を持ちて去る。)

甲斐。

(立つたるまゝにて。) 薩摩の衆、近うお進みなされ。

半兵衛。

はあ。(進み出て、ひざまづく。)

甲斐。

早速ながらお身達はなんとしてこれへはまゐられた。島津殿お使かな。

半兵衛。

御推量のごとく、島津薩摩守の使として、ひそかに當大坂表へまかり出でましたが、いく

甲斐。

さの模様は如何でござりまするな。

半兵衛。

残念ながら一日か二日の御運ぢや。

甲斐。

(いそがしく。) む、一日か二日……。

半兵衛。

先達てよりの戦ひに、真田左衛門佐、木村長門守、後藤又兵衛、薄田隼人、たのみ切つた

る人々はあとや先に討死して、口々の固めもみな破られ、難攻不落と世に誇りし大坂城も

一日か二日の命、われくの無念お察しくだされ。

半兵衛。

(嘆息する。) いかにもお察し申上げます。恐れながら當城の御運の末も斯くあらんかと懸

甲斐。

念のあまりに、主人薩摩守がわれく共をひそかに差遣はされてござりまする。

當城の御運を見きはめて、島津どのより竊に御使者を遣はさるゝとは、いつもながらの御

半兵衛。

芳志、かたじけなう存じ申す。して、その仰せ越されたる御趣意は……。

甲斐。

さあ、その趣意は……。(少しくかんがへる。) なにぶんにも大事の機密でござれば……。

い。しからばすぐに城内へ……。

半兵衛。御案内くださるか。

甲斐。いざ、お越しなされ。

(半兵衛は蓑をかへて起ち上り、下のかたを見かへる。)

甲斐。連の衆はいづこへまゐられた。

半兵衛。連の者はあの川口に……。

甲斐。川口に……。舟をつないで居らるか。

半兵衛。それがしの合圖を待つて居ります。

甲斐。お身の合圖を……。して、その舟は一艘でござるか。

半兵衛。川口には一艘、沖の方には……。

甲斐。沖の方には……。

(甲斐は心にうなづく。半兵衛はあたりに心をくばる。陣鐘の音又はげしく、小銃の音つゞけて聞

(ゆ。)

半兵衛。(上のかたを見る。)お、陣鐘の音、鐵砲の音……。あわたししく。寄手は勝に乗つて今夜の

うちにも埒を明けようとするのではござるまいか。いや、敵は大軍、夜いくさは却つて人数を損ずるばかりぢや。唯をりくに鐘を鳴らし、貝をふき、関を作り、鐵砲をうち出し、今にも寄せかくるやうに見せかけて、味方を疲らす手だてと見ゆる。おそらくまことの總攻めは、あすの明方からでござらうよ。とは云へ、この頃のみじか夜、やがて二時で東も白みます。夜のあけぬ間に御案内くだされ。

甲斐。

半兵衛。

甲斐。

半兵衛。

甲斐。

半兵衛。

甲斐。

半兵衛。

甲斐。

半兵衛。

甲斐。

半兵衛。

(半兵衛は忙はしく上のかたに行きかゝる。)

お心せきは御もつとも、すぐに御案内申すでござらう。

(甲斐は呼子の笛をふく。そのあひだも半兵衛は背々してゐる。)

御案内に暇取るならば、失禮ながらそれがしはお先へまゐるぞ。

それほどにお急ぎか。

(じれる。薩摩のさむらひの氣風を御存じないか。いま一時半時が大事の鏑際、一生に二度とあるまいこの役目を仕損じたら、この腹幾つ切つても足りませぬわ。

(上のかたより眞田大助は穴山小平太、村上彌六をつれて出づ。小平太は松明を持つ。)

大助。唯今の笛は……。
 甲斐。松明に路を照らして、この御仁を案内せられい。
 大助。はあ。(半兵衛に。)いざお越し下され。
 半兵衛。御苦勞でござる。

(半兵衛は心の急ぐまゝに、甲斐をあとにして大助等と共に上のかたへ立去る。この時、上の方の奥にて陣鐘をはげしく打ち立つるに、甲斐は思はず屹と耳をかたむけしが、やがて半兵衛等のあとを追うて上の方へあゆみ去る。陣鐘の音。)

幕

第二幕

大坂城内、淀の方の居間。一面の平舞臺にて、舞臺の端に白木の高欄あり。上の方へすこし寄せて上段の間。うしろは襖、下のかたは次の間のこゝろにて、正面は翠簾をまきあげ、翠簾のそとは高欄附の廊下、その外には奥庭みゆ。舞臺の上のかたにも襖あり。前の幕とおなじ夜にて、よきとこ

ろに燈臺を置く。この燈臺は仕掛にて、あるひは明るくなり、あるひは暗くなると知るべし。

(上段の間にては、淀の方が鏡にむかひて化粧してゐる。そのそばには奥女中小笹が控へ、ほかに侍女四人が盥その他をさし控へてゐる。うすく雨の音きこゆ。)

淀の方。(化粧の手をやめる。)雨の音が聞えるやうぢやの。

小笹。(耳をかたむける。)ほんに雨の音がきこえます。この頃の習、また降り出したと見えます

る。

淀の方。更けてもなにやら蒸暑いことぢや。小笹、かき上げてたもれ。

小笹。はあ。

(小笹は櫛を持ちて淀の方のうしろに廻り、その髪をかき上げる。下のかたの廊下傳ひに侍女お菊出て、次の間にて手をつく。)

お菊。申上げます。

小笹。何事でござりまする。

お菊。茶白山の御陣よりお使者にござりまする。

小笹。茶白山よりのお使者とは……。いづれにしても、こゝへ取次ぎには及ばぬこと。大野殿、

大坂城

速水殿、それらの人々にお傳へなされ。

お菊、いえ、お使は阿茶の局、御母公様に是非ともお目通りを願ふとのことでござりまする。

小笹、お、阿茶殿……（淀の方の氣色をうかがふ。）いかゞ取計らひませうか。

淀の方、なに、阿茶の局がまるつたとか。逢ひませう。これへ案内しや。

小笹、それ、御案内……。

お菊、かしこまりました。

（お菊は會釋して立去る。）

小笹、お使者に御対面とござりますれば、お召換へ遊ばされまするか。

淀の方、

勿論のことぢや。籠城の苦勞に屈託して、とりみだしたる姿を見せたりなどと、後日の沙汰も口惜しい。阿茶は甲州の田舎ざむらひの娘、今川が家來の妻なれど、今は京都から二位の位をゆるされて、局と名乗る身の上であれば、敵ながらも相當の會釋がなうてはならぬ。衣服をあらためて面會するほどに、兎も角もこれへ通して置きやれ。

小笹、

（淀のかたは起つて奥に入る。侍女どもはそちらを片附けて、おなじく奥に入る。小笹も衣紋をつ

くるひて下の方にゆき、局の來るを迎へる。廊下づたひに侍女二人が雪洞を持ちて先に立ち、ついでにお菊が阿茶の局を案内して出づ。局は六十歳、男まさりの老女、緋の袴。そのあとにも侍女二人附添うて出づ。）

お菊、すぐにあれへお通りくださりませ。

阿茶、御めん下され。

（局は案内されて平舞臺の上座に直る。）

小笹、夜中のお使者、御苦勞に存じます。御母公様たゞいまお逢ひなされまするほどに、しばらくこれにお控へくださりませ。

阿茶、して、御母公様には御機嫌よろしうござりまするか。

小笹、（すこし躊躇して。）はい。

阿茶、（微笑む。）いつもの御痾性やらお癪氣で、おむづかりではござりませぬかな。

小笹、いえ、そのやうな儀は……。

阿茶、なければ重疊。おそばの衆の御苦勞も嘸かしとお察し申しますぞ。

小笹、恐れ入つてござりまする。それ、お腰元衆、お使者にお茶の御支度を……。

侍女。かしこまりました。

(侍女四人は會釋して下のかたに立去る。雨の音うすく聞ゆ。)

阿茶。そちらの若いお女中は、たしかお菊殿と申されましたな。

小笹。左様でござりまする。よう覚えておいでなされまするな。

阿茶。おぼえて居りまする。これ、お菊どの。

お菊。はい。

阿茶。(うち解けて。)去年の冬御陣の時、この婆と歌物語したこと覚えてござらう。お、やはり

このお座敷ぢや。御母公様のお逢ひを待つあひだ、こなたがわたしの相手をして、面白い歌の話など聞かしてくだされた。(小笹に。)なう、それでわたしはよう覚えて居りまするのぢや。

お菊。その時にはまことに失禮をいたしましたしてござりまする。

阿茶。いや、いや、弓や鐵砲のいくさ最中に風流な歌ものがたり、面白いことでござつたよ。こ

なたは年の若いにも似合はず、歌も上手、文も上手ぢやと聞いてゐる、かうした籠城の忙しいあひだにも、なにか書かれて居られまするか。

お菊。なにや彼やに取りまぎれて、その日その日の日記すらも思ふやうには書かれませぬ。

阿茶。(うなづく。)勿論お忙しいことであらう。したが、その忙しいあひだに一筆でも書きとめて置くと、我ばかりかは、人のためにもなる。過ぐる關ヶ原の軍の折に、大垣の城内にゐ

たおあんといふ女子が、自分の見たこと聞いたことを物語のやうに書きつけて置いたを、誰が云ふともなしにおあん物語といひ傳へて、このごろ世間で持て囃してをりまする。これ、お菊どの。こなたも去年と今年と二度の籠城、そのあひだのことを偽りなく書きつけて、お菊ものがたりとでも名を付けてはどうぢやな。きつと面白いものが出来ませうぞ。ほんにさう云へば、お菊どのはこのあひだから何か忙がしさうに書いてゐる様子ぢやが、それがお局の仰しやるやうな、お菊物語とやらでござりまするかえ。

お菊。(恥かしさうに。)いえ、そのやうなものではござりませぬ。

阿茶。(いよく笑ましげに。)お、それではもう何か書いてござるのか。今度の軍がめでたう納

まつたら、どうぞわたしにも見せてくださいな。よいかな。

お菊。どう致しまして……。おまへ様方のお目にかけるやうなものではござりませぬ。

阿茶。はて、遠慮には及ばぬ。そのお菊ものがたりが出来たらば、屹とわたしにも見せてくださ

お菊。

(迷惑さうに。)はう。

阿茶。

(笑ひながら。)今から約束しましたぞ。

お菊。

はい。

小笹。

(この時、奥の襖をあげさせて、淀の方は衣服を着かへて出づ。侍女どもはそのうしろに控へる。) お使者を御案内申しました。

淀の方。

おう、局。ようぞ見えられました。去年の冬陣の砌りには、こなたに色々苦勞をかけたが、いつも堅固でめでたいの。

阿茶。

おまへ様にも御機嫌うるはしう、こんなめでたいことはござりませぬ。

淀の方。

男まさりの局とは云ひながら、去年といひ、今年といひ、老體の身で幾たびか矢玉のあひだを往來するは、妬ましいほどに健かなことぢや。して、早速ながら今夜の使は……。

阿茶。

かやうな夜陰に不意の参入ははなはだ恐れ入りますれど、一刻をあらそふ大事でござりませぬば……。

淀の方。

その大事とは……。

阿茶。

去年と同様、和睦のお使にまわりました。

淀の方。

和睦の使……。(あざ笑ふ。)いや、和睦であるまい。降参であらうが……。

阿茶。

え。

淀の方。

秀頼親子に降参せいと勧めにまゐつたのであらうが……。はて、隠しやんな。この期に及んでなんの和睦……。家康の肚のうちは隅から隅まで疾うに見ぬいてゐるぞよ。

阿茶。

はゞかりながら此期に及んで、和睦の降参のと、名儀をあらそふべき御時節ではござりませぬまい。去年は格別、今度の軍は御運つたなく、諸方の口々もみな敗れて、よせ手は明朝の寅の刻を合圖に、いよ／＼總攻めの用意をと／＼のへて居ります。所詮落城はもう半日か一日の後と、お覺悟遊ばさねばなりません。

淀の方。

(齒噛みをして。)むむ。

阿茶。

さればこそ大御所にも御心を痛めさせられ、右大臣家御親子一刻も早く當城をお開きあつて、茶臼山の御陣へまゐられなば、一先づ高野へ移しまゐらせて、お袋様御隠居料として、一萬石をたまはるべしとの御沙汰にござりまする。

淀の方。

(嘲るやうに。)われ／＼親子を高野へ追ひこめて、捨扶持の一萬石……。ありがた涙がこぼ

れるほどにお慈悲深いことぢやの。

阿茶。(押返して。)もとよりお慈悲でござりまする。それも畢竟は太閤殿下に對する御好みと、また二つには……。

淀の方。その太閤のよしみを忘れずば、なんでこの大坂城に矢玉を向けられたのぢや。

阿茶。それを今更論じてゐる場合ではござりませぬ。差當りてはおとなしく御出城あつて、御

親子の御安泰をはからせたまふが、かしい御分別かと存じまする。

淀の方。ほう、なにが賢い。古狸の家康にたぶらかされて、おめくこの城をあけ渡し、山流し

同様に高野の奥へ追ひやらるゝ。それを賢いと申すのか。まこと家康に和睦の心あらば、

このまゝに城の圍みをといて、早々に關東へ引揚げよと、立歸つて申傳へられい。

阿茶。

(諭すやうに。)先づお鎮まりくださりませ。昨年和睦のみぎりにも、わたくしがお使に立ちまして、仰せの通りに圍みをとき、早々に關東へ引揚げましたが、その時と唯今とは逆も一つにはなりませぬ。意地も我慢も時によりまする。くどくも申す通り、明日はいよく總攻め、その貝の音のきこえぬうちに御思案遊ばさねば相成りますまい。おまへ様は兎もかくも、右大臣家おいとしいとは思召されませぬか。

淀の方。その秀頼がいとしいと思へばこそ……。(ほろりとする。)それも今は仇となつた。

阿茶。さあ、それを仇にすると爲ぬとは、おまへ様のお心次第。な、御合點がまゐりましたか。

淀の方。いや、その愛しい秀頼に降参の恥はみせられぬ。ならぬ、ならぬ。ならぬことぢや。(屹として。)

小笹。では、どうでも和睦の儀を……。

お菊。お肯入れはござりませぬか。

淀の方。え、そち達の知らぬことぢや。控へてゐやれ。

阿茶。この上は是非もござらぬ。大事のお使を仕損じて、この婆はおめく辰らねばなりません

い。では、残念ながらこれでお暇申しまする。

(淀の方は顔をそむけてゐる。)

阿茶。(起ち上る。)去年の折にはこれほどでもござらなんだが、いよく募る御癪性。(嘆息しながら)

小笹とお菊を見かへる。)御母公様の御介抱、くれぐれもおたのみ申しまするぞ。

二人。はあ。

(局は下の方へゆきかゝる。小笹とお菊も見送らうとして起ちかゝる。局は立停まりて二人を見か

へる。)

阿茶。右大臣家の御座所はいづれでござりまするな。

お菊。上様には千疊敷に御座遊ばされます。

阿茶。千疊敷に……。はゞかりながら御案内くださらぬか。

お菊。え。(すこし躊躇する。)

(これを聞くと、淀の方は俄にむき直る。)

淀の方。なに、千疊敷へ……。これ、局。

阿茶。はあ。(見かへる。)

淀の方。秀頼に逢うてなんとするのぢや。

阿茶。去年このかたお目通りをいたしませねば、よそながらのお暇乞ひとも存じまして……。

淀の方。ならぬ、ならぬ。秀頼に逢はすことはなりませんぞ。

阿茶。なりませぬか。

(淀の方は懐剣を把り出して、つか／＼と上段の間を降りる。お菊はおどろいて淀の方を遮り、小笹は局を圍ふ。)

淀の方。

暇乞ひなどは當座の間にあはせ、又もや秀頼をたぶらかして、無理強ひに降参させうとするのか。いや、さうぢや。屹とさうぢや。古狸の家康が手先になつて、われ／＼親子にこの上の恥辱を見せようとする古貉のお局どの、一刻も早うこゝを立去ればよし、いつまでもこゝらにうろ／＼してゐたら、この淀が最期の道連れに化の皮をひき剥いてくれろぞ。(懐剣に手をかける。)

お菊。さりとは御短慮、先づ／＼お鎮まり遊ばしませ。

淀の方。(いよく脚奮して。)いや、いや、邪魔するな、さあ、古貉、古だぬき、尻尾をまいて早う立去れ。え、立去らぬか。

阿茶。(しづかに。)貉でも狸でも仔細ござらぬ。獵夫の良にかゝつた親ぎつねと子狐、あまりに哀れに思へばこそ、かうしてわざ／＼出て來ましたのも、古狸や古貉のなさけとは知られぬか。

淀の方。さういふおのれこそ鼠を餌にして、親狐や子狐を釣り出さうとするのぢや。その手に乗つてよいものか。さあ、ゆけ。え、まだ行かぬか。

(淀の方つめよるをお菊は支へる。)

小 笹。

(局に)なにを申すも今の場合、云へばいふほど御機嫌を損ずるばかり。兎もかくもこのま

淀の方。

まだ行かぬか。

阿 茶。

なぜそのやうに狂はるか。家國のほろぶる時は是非ないもの、人の心がみな狂ふ。とはいへ、寅の刻までにはまだ二時のひまもある。それまでに今一度、心をしづめて勘考なされ。(行きかゝる。)

小 笹。

それ、お腰元衆。(呼ぶ。)

侍 女。

はあ。

(以前の侍女どもは雪洞を持ちて下のかたより出づ。)

小 笹。

それ、お見送りを……。

侍 女。

はあ。

お 菊。

かうお出でなされませ。

(お菊は先に立ち、侍女どもは局を案内して下のかたに立去る。)

淀の方。

(憎さげに見送る。)ほんに憎い奴、去年も散々にみづからをたぶらかして、濠を埋めさせ、

小 笹。

はい。

堤をくづさせ、この城の壽命をちどめて置いて、又しても欺しに來居つたか。これ、小笹。

淀の方。

古狸の使めはよもや千疊敷へまゐりはすまいな。

小 笹。

すぐにお引取りなされたでござりませう。

淀の方。

ござりませうでは覺束ない。早う行つて見とゞけて來や。あの使を秀頼に逢はせてはならぬ。達て逢はうと云ひ張るなら、容赦せず引き摺り出しや。

小 笹。

はあ。

淀の方。

早う行きや。

小 笹。

はあ。(早々に下のかたへ立去る。)

(淀の方は氣疲れがしたやうにより、となりて上段の間にあがり、框に腰を落して、はつと息をつ

淀の方。

く。うしろに控へたる侍女どもは立寄つて介抱す。)

侍 女。

お、夜がふけても蒸暑いやうな。(ふところ紙を出して額の汗をふく。)

侍 女。

はあ。

この汗は……。たつた今の化粧もみな頹れてしまふた。これ、盥に水を持つて來や。

淀の方。化粧道具も取揃へて来や。

侍女。はあ。

(侍女ごもは奥に入る。うすく雨の音、陣鐘の音遠くきこゆ。淀の方は框に腰を落したまゝにて、息をついてゐる。燈臺の灯がうす暗くなる。)

淀の方。

(耳をかたむける。)や、誰ぢや。おゝ、秀次か。なに、この大坂を立退いて高野へまゐれと……。高野の青巖寺……そこでお身は腹を切つたと……。 (屹となつて。) 忌ぢや、忌ぢや。なんでそのやうなところへ行くものぞ。おのれはその恨で秀頼親子を高野へ引き寄せようといふか。えゝ、寄るな、寄るな。(懐劍に手をかけて透しみる。) や、お身は太閤……。 おゝ、太閤殿下……。 (懐劍をすて、坐る。) なに、なんと仰せらるゝ。一旦の恥を忍んで家康のなさけにすがり、高野へ立退いて時節を待て……。豊臣の家を断すな……。 えゝ、さりとはお恨めしい。(涙をはらりと流す。) なるほど豊臣の家も大切でもござりませうが、こゝを立退いて高野へ引き移る——そのやうなことがなるかならぬか、よう積つても御覽なされませ。

(淀の方は泣き伏す。下のかたの廊下づつたひに、伊集院半兵衛忍び出で、次の間に小膝をつきて窺

淀の方。

たとひお前さまのお諭しでも、淀はこゝを動きませぬ。この大坂を人手には渡させぬ。おめく〜とこゝを立退くほどならば、唯今もあの使を追ひ返しは致しませぬ。……あゝもし、殿下。顔の色を變へていづれへお出でなされます。あゝもし……。

淀の方。

(すかし視る。) あ、そこにゐるは誰ぢや。(再び懐劍を拾ひとる。) そちは誰ぢや、何者ぢや。え、返事をせぬか、名乗らぬか。

淀の方。

(燈臺は再び明るくなる。半兵衛はそこに平伏す。) や、見馴れぬ奴。なんとしてこゝへ踏み込んでまゐつたぞ。扱はおのれ、關東の忍びの者か。(懐劍に手をかけて詰めよる。)

半兵衛。

(手をあげて制す。) 恐れながらそれは思召違ひ、それがしは決して左様なものではござりませぬ。島津薩摩守の家來伊集院半兵衛、密々にお目通りをねがひたさに、これまで推参いたしてござりまする。

淀の方。

(なほ油断せず。) して、その薩摩の家來が誰に許されて、案内もなしにこれへ参つたぞ。

大坂城

半兵衛。

無禮はいくへにもおわび申上げます。京橋口に小舟をこぎ寄せ、御城内へ忍び入らんとするところへ、折好く速水甲斐どのがまわり合はせて、その御案内にて安々と入城いたしてござりまする。それよりすぐに千疊敷へまかり出で、大野修理殿、毛利豊前殿、そのほかの人々列座の前にて、使の口上逐一申上げましたる處、おのくの意見容易に一致せず、上様にもたゞ打案じておはすのみ、その議論いつ果つべしとも覺えませねば、あまり心の焦燥ちまするまゝに……。

淀の方。

誰の許しも待たずして、つか／＼この奥までまゐつたか。それにしても、途中の案内がなうてはならぬ筈。誰に教へられてみづからの居間のありかを知つたるぞ。

半兵衛。

はあ。(すこし躊躇してゐる。)

(下のかたよりお菊出づ。)

お菊。

恐れながら申上げます。その御案内はわたくしが……。

淀の方。

菊が連れてまゐつたか。

半兵衛。

かへす／＼も無禮の段々、眞平御めん下されませう。(平伏す。)

淀の方。

(すこしく色解けて。)それで先づ仔細はわかつたが、薩摩守が使の口上、あらためてみづかに

らに申聞かせい。

(淀の方はお菊に扶けられて、上段の間に戻る。)

淀の方。

半兵衛とやら、近う。

半兵衛。

はあ。

(半兵衛はお菊に眼で知らせて、入口に氣をつけてくれといふ。お菊は心得て下のかたの廊下口へゆき、うしろ向きになりて外をうかがひゐる。)

半兵衛。

(すゝみ出づ。)心せきでござりますれば、先づ搔摘まんで口上の大意を申上げます。主人薩摩守がこのたび我々を差越しましたるは餘の儀でもござりませぬ。上様御親子には早々に當城をお開きあつて、薩摩の國へお越し遊ばされよとのことにござりまする。

淀の方。

秀頼親子に薩摩へ落ちよといふ、その使にまゐつたか。

半兵衛。

おそれながら當城の御運も所詮長くは保つまじと、薩摩守にも懸念のあまり、おん迎へとして竊かにわれ／＼を遣はし、上様、淀様お二方を恙なくお伴ひ申せと、固く申付けられてござりまする。

淀の方。

さりとて關東の大軍に圍まれたる城内から、どこをどう抜け出して西國まで案内しやるぞ。

半兵衛。

その御懸念は御無用。仰せのごとく、大手その他の口々には關東勢充滿して居りますれど、京橋口にはたゞ川向ひに見張りの人数が配つてあるばかりで、格別嚴重な固めもござりませぬ。お迎への役は池邊權五郎とそれがしの兩人、小舟を川口につないでござりますれば、被衣まぶかにお姿をかくし、闇にまぎれてお忍び下さりませれば、すぐに沖まで漕ぎ出して、そこにかゝりし元船に御案内。それから先は海の上、安々と御立退きも相成りまする。

淀の方。

むゝ。(考へてゐる。)

半兵衛。

うけたまはれば、敵も明早朝より總攻めにかゝるべき氣勢を示してゐると申す。もはや御猶豫は相成りませぬ。夜のあけぬうちに御立退きの程ひとへに願はしう存じまする。

淀の方。

して、秀頼はなんと云ひました。

半兵衛。

唯今も申上ぐる通り、上様にはたゞ打案じておはすのみで、確としたる仰せ出でもござりませぬが、御母公様よりお勧めくださりませうならば、もとより御孝心ふかき上様、おそらく御違背はござるまいかと存じまする。

淀の方。

むゝ。(まだ考へてゐる。)

半兵衛。

(急いで。)くどくも申上ぐるやうなれど、一時半時をあらそふ今の場合、もはや御猶豫は相成りませぬ。些とも早う御思案なされて……。

淀の方。

はて、騒がしく。

半兵衛。

(膝をすゝめる。)ではござれども、どうしても今宵を過されぬ大事、すぐにお支度をねがひます。京橋口には小舟をつないでござりますれば、それに召されて沖合まで……。

淀の方。

もう判つた。くどう云やるな。

半兵衛。

(いよく急いで。)お判りになりましたれば、すぐにお立ちを……。

お菊。

(淀の方は黙つてゐる。陣鐘にまじりて螺の音きこゆ。お菊は引返して來る。)

お菊。

あれ、お聞きなされましたか。陣鐘にまじる貝の音が次第に近いてまゐりまする。

半兵衛。

(淀の方)も半兵衛も耳をかたむける。)

半兵衛。

むゝ。さては東の白むを待ちかねて、敵はおひくくに繰出すと見えまする。(淀の方に。)お聞きの通りでござりますれば、猶豫して御後悔あそばしまするな。

淀の方。

はて、なんの後悔……。あまりにがやくと騒ぐので氣が逆上せる。これ、菊。いつもの養胃湯を煎じて來や。

お菊。はあ。(下のかたに立去る。)

淀の方。まだ五月の初めといふに、なぜこのやうに蒸暑いぞ。(ふところ紙にて顔をふく。)お、氣味の悪いほどに汗が滲んだ。腰元どもは何をしてゐることやら。

(淀の方はそこにある小さい鈴を把りてふる。螺の音又きこゆ。半兵衛は不安らしくたちあがりて下のかたより庭の方をのぞく。上の方の襖をあけて、以前の侍女どもは盥その他の化粧道具をさげて出づ。)

淀の方。(胸をおさへる。)氣が逆上せるばかりでなく、なにやら胸も痛んで來た。菊に早う藥を持つて來いと云やれ。

侍女。はあ。

(侍女二人は下のかたに立去る。)

淀の方。(鏡にむかひて。)はて、なぜか鏡が曇つてならぬ。燈火を近う持つて來や。

侍女。はあ。(燈臺を淀の方のそばへ持つてゆく。)

淀の方。お、髪もみだれた。化粧もくづれた。小笹は居らぬか。髪をあげるのは小笹でなうては氣に入らぬ。どこにゐるか、すぐにさがして呼んで來や。

淀の方。

はて、なぜ曇るか。

(侍女二人は上のかたに入る。半兵衛は矢はり立つたるまゝにて下の方をながめてゐる。侍女はみな立去りて、淀の方はたゞひとりにて鏡に向ふ。うすく雨の音。)

(淀の方はひとり言を云ひながら、ふところ紙にて幾たびか鏡の面を拭きぬたが、どうも氣に入らぬといふ心にて、更に燈臺をひきよせ、盥の水に自分の顔をうつして見る。やはり雨の音、陣鐘の音うすく聞ゆ。淀の方はしばらく無言にて、盥に映る顔をぢつと見つめてゐる。燈臺の灯はだんだんに薄くなる。半兵衛は立戻りて、これもぢつと淀の方の様子をうかがひゐる。)

(顔をあげて半兵衛に眼をつける。)お、薩摩の使……。まだそこにゐやつたか。

半兵衛。

はあ。(坐る。)

淀の方。

なぜいつまでもそこにゐる。

半兵衛。

御返事をお待ち申して居ります。

淀の方。

(下の方よりお菊は藥湯を持ちて出で、次の間にてうかゞふ。)

半兵衛。

返事とはなんの返事ぢや。

半兵衛。

西國へ御立退きの……。

淀の方。 (云ひながら淀の方の顔を見あげて、半兵衛はぞつとして俄に怖ろしくなる。) まだそれを云うてゐるのか。折角の使ぢや、秀頼に代つてみづからが返事する。

半兵衛。

はあ。

淀の方。

薩摩はおろか、五里か十里の隣國へもわれ／＼親子は行くまいぞ。

半兵衛。

え。

淀の方。

(うは枯れたる聲。) お、行かぬ、ゆかぬ。この大坂城はひと足も動くまいぞ。

半兵衛。

(恐る恐る。) でも、落城が眼のまへに……。

淀の方。

落城したら母も子も一緒にこゝで亡ぶるまでぢや。さつきは關東方から阿茶の局が来て、

淀の方。

おとなしくこの城を出るならば、秀頼親子の命をたすけて、高野へ送つて遣らうといふ。

淀の方。

今は又薩摩から使が来て、西國にかくまつて遣らうといふ。敵に附いても、味方に附いて

淀の方。

も、われ／＼親子の命は助かる。それを知りつゝこゝを動かぬは、この城に……この大坂

淀の方。

の城に……根強い執心があるからぢや。

半兵衛。

その御執心はさることながら、見す／＼開くる御運をすて、この城と俱にほろぶるとは、

半兵衛。

餘りにかたくな、御心かと憚りながら存じまする。

淀の方。

(冷にか笑ふ。) ほ、かたくなとも云へ、おろかとも云へ、みづからにはみづからの心があ

半兵衛。

はあ。 陪臣者のそち達が要らぬ諫言は無用であらうぞ。

淀の方。

はあ。

半兵衛。

とは云ふものゝ、大事の便をうけたまはつて、わざ／＼この城内まで入込んで来たそちの

半兵衛。

奉公、第一には薩摩守の志、それに對してこの淀が云ひ残すことがある。(再び盃に映る

半兵衛。

顔をちつと見る。) 女子の誇りは髪形、太閤御在世の砌りはいふに及ばず、太閤この世を去ら

半兵衛。

せてより十七年のけふが日まで、あけくれの身だしなみ、いつまでも變らぬ春を誇りし我

半兵衛。

がおもかげも、今この水にうつるを見れば、世におそろしき悪鬼羅刹の相好……ほんに

半兵衛。

我ながらも怖ろしい。

半兵衛。

え。

淀の方。

淀は生きながら鬼になつたと見ゆる。

半兵衛。

(半兵衛は思はず小膝を立て、覗き込まうとする。うしろにかゞひゐたるお菊も思はず進み入り

半兵衛。

て覗かうとする。この途端に淀の方は顔をあげて見かへる。その物すこし顔を見て、お菊ははつと

半兵衛。

おどろき、持つたる薬湯の椀を取り落す。燈臺の灯はだん／＼に明るくなる。)

淀の方。

お、菊か。

お菊。

飛んだ粗相をいたしましたして、なんとも申譯がござりませぬ。(ひれ伏す。)

淀の方。

みづからの顔がそれほどに怖ろしう見えたか。

お菊。

え。

淀の方。

さだめて怖ろしう見えたであらう。半兵衛、よう聞いておけ。たとひこの大坂は一日か二日のうちに落城して、何者が代つてこの城に住まうとも、淀は決してこゝを動かぬぞ。この身は劍に伏すとも、火にやかるゝとも、人間の執念、みづからの魂はこゝに留まつて、いつまでも此城の主ぢや。二十年三十年、五十年百年の後までも、このまゝにぢつと控へてゐるぞよ。もし疑ふならば、何時でもたづねてまわれ。淀はこの姿でそち達に逢はうぞ。豊臣一家がほろびて後、大坂城内に不入の間があらば、そこをみづからの住家と思へ。

(燈臺の火はいよゝく暗くなる。半兵衛もお菊も物のおそろしさに沈黙してゐる。俄にきこゆる陣鐘の音。下のかたより小笹は鉢巻して籠手をつけ、かひなく扮装して長刀を持ち、おなじく装したる侍女四人に雪洞を持たせて出づ。)

小笹。

申上げまする。

淀の方。

なんぢや。

小笹。

敵は夜の白むを待ちかねて、三方の口々より一度に押寄せてまゐりまする。

淀の方。

それはもとより覺悟の上、今更あわつるには及ばぬことぢや。

小笹。

なれども、正面の敵ばかりでなく、御城内にも裏切りの者あるとやら。

半兵衛。

なに、裏切……。して、して、それは何者でござるな。

小笹。

何者ともたしかには判りませぬが、誰いふとなく左様な噂がそれからそれへと傳はりまして、いづれも疑心暗鬼のたとへ、誰が敵やら味方やら、たがひに疑うて居りまする。兎にも角にもこの時節、御母公様にもかならず御油斷遊ばしまするな。

淀の方。

よい、よい。味方とて頼まれぬはみづからも豫て知つてゐる。ましてこの時節ぢや、まことに油斷はならぬ。小笹は入口を確とかためて、一人たりとも妄りに入るゝな。

小笹。

はあ。

(小笹は侍女を連れて下のかたに去る。)

お菊。

では、今一度お薬を……。(起ちかゝる。)

淀の方。

あ、待ちや。もう薬にはおよばぬ。煎じてゐる間を待つも悶かしい。その器をこれへ。

お菊。

はあ。

(お菊は不審さうに椀をさしぐれば、淀の方はその椀にて盥の水をすくひて飲む。)

お菊。

(おどろく。)あれ、お化粧の水を……。

淀の方。

飲んでは悪いか。かうなれば化粧の水はおるか、溝の水でも飲まうも知れぬ。つたへ聞く天狗道の苦みも斯くやとばかりに、總身が燃えて、もえて、ほのく吐息……。熱や、あつや、骨も肉も焼けたゞれるやうぢや。

(淀の方は肩で息をしてゐる。下のかたより速水甲斐守、兜をもち出て出づ。)

甲斐。

薩摩のお使、これに居られたか。

半兵衛。

(待兼ねたやうに。)して、御前の御評議はいかやうに御決着相成りましたな。

甲斐。

評議はまちくで徒らに時刻を移すばかり。この上は御母公さまの御意見をうかゞふよりほかはござらぬ。(淀の方のまへに手をつく。)薩摩の使がこれにあるからは、委細の口上もはやお聞き取りに相成りましたか。

淀の方。

お、聞いた。みな聴きました。

甲斐。

御承知とあればくどうは申上げませぬ。われくは蹈みとゞまつてお城を枕に討死、上様

淀の方。

御母公様のお二方には、これなる薩摩の使をお供におつれ遊ばして、夜のあけぬ間にお聞きを……。

え、そちまでが同じ事を……。みづからは何うでもこゝを動かぬ。(半兵衛を見かへる。)

半兵衛。

おのれ、まだそこにゐるか。くどい奴、早う歸りや。大事のお使を仕損じたる半兵衛、このまゝおめくとは歸られませぬ。方々の御先途をお見とゞけ申して、それがしも追腹つかまつる。

甲斐。

では、お身も城を去らぬといふか。

お菊。

さうして一緒に追腹を……。

半兵衛。

御念におよばぬ。薩摩の侍は左様に教へられてござる。

淀の方。

(物すこく打笑む。)お、そちも死ぬるか。この上は誰も彼もみな死ぬるがよい。秀頼も死ぬ、甲斐も死ぬ、半兵衛も死ぬ、菊も死ぬ、小笹も死ぬ、腰元共も侍も……。犬も猫も馬も鼠も……。この大坂城にあるほどの者はみな死ぬるがよいぞ。ほ、死ぬる者はわれわればかりでない。あの家康も今から一年とは生きさせぬ。來年……お、來年の今頃までには……屹とあの世へまねき寄せて見せうぞ。

(淀の方よどのかたはすつく、と起つて、向うむかひを睨にらみつめながら、柵かまちより降りかゝる。お菊きくはその相好さうがうの物ものすこきに恐おそれて、小聲ここゑにあつと叫さけびなむら顔かほをかくす。半兵衛はんべゑは思おもはず起つて、淀の方よどのかたのゆくゆくてを遮さへらうとする。甲斐かひはぢつとうつむきて嘆息たんそくす。雨あめの音おと、陣鐘ぢんかねの音おと)

幕

蒙古襲來

大正三年一月作。
大正三年九月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割——宮司彦磨(市川左團次)平内左衛門景房(市川八百藏、後の中車)和平次(市川壽美藏)六右衛門(市川左升)八藏(市川荒次郎)又作(中村又五郎)お島(坂東秀調)おそよ(市川松蔭)など。

登場人物——八幡の宮司彦磨。平内左衛門景房。京の商人和平次。漁師八藏。その女房お島。その娘お秋。漁師六右衛門。漁師の娘おそよ。漁師の娘お石。その弟松太郎。漁師又作。蒙古の兵卒など。

文永十一年(今より六百四十餘年前のこと)十月、陰りし日の午後。
壹岐の島の南端、緋の浦のほとりにある小さき丘の上。上のかたより中央の正面にわたりて、すこしく斜めに古き社あり。規模も大ならず、建物もすこぶる古けれど、由緒あるとおぼしく、軒には注連を張りまはして、正八幡宮の額をかけたなり。社殿の正面には翠簾をなかげ捲きて、奥には神鏡眞榊なごほのかに窺はる。建物はすべて白木作りにて、正面には階段あり。左右には奥まで折りまはして高欄つきの初縁あり。社殿の左右には松杉の大樹しげり合ひて、そのあひだには切株または大いなる石などもあり。うしろは崖なり。正面より下のかたに夕りて海黒く、漁村の人家まば

らにみゆ。

(社殿の上には伴彦鷹、老いたる宮司にて白衣をつけ、幣束を持ち、うしろ向きになりて神前に祈る。社殿の前にはあら筵を敷きて平内左衛門景房は二十四五歳、手負ひの武者、腹巻して直垂の袖をくくり、右の手と左の足とを白布にてまき、弦のきれたる弓を持ちて坐す。六右衛門は盲目の老たる漁師。おそよは十七八歳、漁師の娘。八藏は三十前後、びつこの漁師。お島は廿五六歳、八藏の女房。おあきは七八歳、八藏のむすめ。お石は十五六歳、漁師の娘。松太郎は十二三歳、お石の弟。いづれも一つ所にあつまりて坐す。かれ枝の焚火は力なく燃ゆ。京の商人和平次は旅すがたにて廿一二歳、優しげなる男、この群をすこしく離れて、たゞ一人さびしげに、うしろの海をながめてゐる。沖のかたには異様な軍樂の音遠くきこゆ。暮あきて少時の沈黙。お島は無言にて、たき火に枯枝をくべる。)

六右衛門。

(耳をかたむける。)沖の方では夷の音樂がまだ止まぬやうぢや。

八藏。

だん／＼にこつちへ近寄つて来るやうぢや。

お島。

四方八方をかう取巻かれては、どこにも逃げ路はあるまいな。

お秋。

母さん、家へ歸らうよう。

お島。

母さんも歸りたいのは山々ぢやが、どうしてうか／＼とこゝを出られるものか。

お石。

ほんにさうぢや。あの蒙古のおそろしい夷に見つかつたら、どのやうな酷い目に逢はうも

知れまい。

松太郎。

わしの兄様は松の木へ逆さまに吊るされて、矛といふもので突き殺された。(泣く。)

お石。

わたし等もあやふく捉まるところを、この弟の手をひいて、一生懸命に逃げて來ました。

(泣く／＼語る。)

お島。

聞いても悚然とするやうな。それでもまあお前達は運がよいぢや。とりわけてお石どの、

おまへのやうな若い女子が若しあの蒙古の奴等につかまつたら、どのやうな口惜しい悲しい

いおそろしい目に逢うたかも知れぬ、ほんに夷とはよう云うた。あいつ等は人間ではない、

獸ぢや、虎ぢや、狼ぢや。(罵る。)

八藏。

現に私のとなりの十兵衛老爺は、兩の手足をくゞられてぐら／＼と湧きかへる熱湯の大釜のなかへ投げ込まれた。それからお濱といふ十八になる娘は五六人の夷どもに引つ擔いでゆかれて、どんな目に逢つたことやら……。あくる日になつてみると、その死骸が素つ裸にされて、死んだ魚のやうに白い腹を出して、海邊の砂のうへに投げ出してあつた。

お石。六右衛。

怖いことごとざりますなう。(身をふるはせる。)
(嘆息す。)なんぼ異國の人間ぢやと云うて、罪もない百姓漁師や女子供を、そのやうな目に逢はして……。獸とも鬼ともたとへやうのない奴等ぢや。わしなどは子はなし、みより縁者は無し、年は老つてゐる、眼はみえぬ。何時死んでも惜うはない命ぢやが、そのやうな奴らの手にかゝつては死にたうないと、かうしてこゝに隠れてゐるのぢやが、なにをいふにも四方は海で取巻かれてゐる離れ島ぢや。その海の上には幾千艘といふ夷の軍船が浮んでゐるといへば、とても逃げて出る路はあるまいよ。

(人々の顔には絶望の色あらはる。今まで黙して海のかたを望みたる和平次は、この時にはかに叫ぶ。)

和平次。

あれ、見さつしやれ。東の濱の方に火の手があがつた。

八藏。

なに、火の手があがつた。

和平次。

濱邊には風があるときみえて、あれ、あれ、黒烟がうづ巻いてあがりまするわ。

八藏。

(景房と六右衛門とを殘して、他の男女はあわたとしく起ちあがり、和平次の指さす方へ走りゆく。)
お、濱邊の漁師町へ火をかけたのぢや。

お秋。

母さん、あすこはわたしの家ぢや。(泣聲になりて叫ぶ。)

お島。

ほんにあすこは私等の家ぢや。町中にたくはへてある米でも酒でも錢でも、あるだけ掠め取つた上で、焼き拂つてしまふ積りであらう。

松太郎。

姉さま。わし等は歸る家がないなう。

お石。

家どころの沙汰ではない。命のあるのがせめてもの仕合せといふものぢや。(泣く。)

八藏。

憎い奴等ぢやなう。(齒がみをする。)

景房。

あらん限りの分捕をはたらいて、まだその上に人家を焼くとは、飽までも執念き夷どもぢや。(弓を杖にして起ち上り、これも人々と共に火のあがる海手のかたを望み視る。)

(今まで黙してゐたりしおそよは、和平次の手をとりて社前に来る。)

おそよ。

もし、和平次どの。お前はさぞわたしが憎いであらうな。わたしといふ者さへなければ、お前はここのやうな難儀に逢はずとも濟んだであらうものを……。

和平次。

それもこれも逃れぬ運ぢやと諦めてゐれば、ひと恨まぬ、自分も恨まぬ。はて、なぜと云やれ。知つての通り、わしは京の商人で、毎年博多まで来るついでに、今年はこの壹岐の島々をめぐるつて、名産の乾魚を仕入れて行かうと思ひたち、便船をたのんでこゝへ着い

たのは先月のはじめぢや。いや、日もたしかにおぼえてゐる。九月の三日の夕方であつた、そのとき丁度わたしが濱に立つてゐて、おまへに路を問はれたのが縁の初めぢや。みやこのお人といふものは、よろづが優しうてしとやかで、女子のなづむ容形……。今更のやうに男の顔をつくく、視る。さあ、それから夢のやうで……。わたしは大かた氣が違つたのでござんせうなう。

和平次。

島の女子はなさけが深いと、人の話にも聽いてはゐたが、思ふにましたる深切に、京の男がたましひを打込んで、三日の逗留が五日となり、五日が十日と延びるうちに、歸りの船には乗りおくれ、島の人には憎まれて、ほとく途方にくれてしまつた。

おそよ。

島の女子を他國の男にわたしては、氏神様の御罰がおそろしいと、島中の人がおまへを眼のかたきにして、已に命もあやふいところを、この宮司どのに救はれたが、晴れて添はれる仲ではなし、いつそ島をぬけ出して京へ一緒に歸らうと……。空をみる。お、この五日の夜ぢや。月もなし、星もない闇の夜に、そつと小舟をこぎ出して、一里ばかりも沖へ出ると……。

和平次。

さうぢや。にはかに風が變つて來て、いくらあせつても舟は進まず、あとへあとへと吹き

戻されて、再びもとの岸へ歸つた。が、今夜にかぎることでも無し、又あすの夜を待つうちに思ひもよらぬ蒙古の船が、春先の鯉をみるやうに、海一ぱいに群がつて來たのぢや。もうかうなつては袋に這入つたも同様で、島を出るなどは及びも付かぬ。いつそあの時に船がこはれて、ふたりが一緒に海の底へ沈んでしまつたら、こんな思ひもあるまいものを……。これもやつぱり氏神様の御罰であらうか。

(黙して聽きぬたりし六右衛門は初めて口をひらく。)

六右衛門。さういふのはおそよ……。相手は京のお人ぢやな。島の女子は島の男と連れ添ふがむかしからの習ぢや。その掟をやぶつて他國の男と戀したからは、末の遂げられぬは知れてある。もうく愚癡は云はぬがよい。

おそよ。

お、六右衛門どの。聞いてござつたのか。

六右衛門。

は、眼はみえいでも耳はきこえる。時もあらう、場所もあらうに、氏神様の御社のまへで、今更そのやうな浮いた話はせぬものぢや。京のお人も聞かつしやれ。わしはこのやうな年寄りの身で若い者の邪魔をするではさらくはないが、神の御罰がおそろしい。なう、それが判つたら二人とも離れてゐや。めつたに口を利くまいぞ。

おそよ。

あい。(和平次と顔をみあはせる。)

六右衛。

焚火が消えかゝつたやうぢや。枝をくべては下さらぬか。

おそよ。

あい、あい。

(和平次は手傳ひてたき火に枯枝を炙べる。宮司彦麿はこの時はじめて起ち上り、縁傳ひにて下方へゆき、無言にて火のあがる方を遠くみる。)

お島。

あれ、あれ、火の手は次第に強くなつた。漁師町はみんな煙につままれてしまつた。

お石。

折悪しく風がまた吹き出したやうな。

八藏。

海の方から吹き付けて來るので、それからそれへと燃え擴がるばかりぢや。

お秋。

怖いよう。(泣く。)

景房。

いかに燃え擴がつても、あの火を消すものは一人も居るまい。(云ひつゝ見かへりて彦麿と顔をみあはせる。)

彦麿。

見られい。濱の人家はあの通りでござるわ。

彦麿。

さながら地獄のありさまぢや。あはれを知らぬ蒙古のあら夷共、やがては神罰を蒙つて、

一人も生きては還るまいぞ。

(この聲を聞きて人々は見かへる。)

八藏。

お、宮司どの。蒙古の奴儂があつたやうに亂暴をはたらいて居ります。

お島。

どうか仕様はござるまいか。

お石。

口惜しいこととござります。

彦麿。

(斯く云ひつゝ人々はもとの所にかへる。彦麿も正面に來りて坐す。)

異國の兵者にはかに襲ひ來つて、先づ對馬の國をさわがし、つゞいてこの壹岐の島へ押寄せて、みだりに人を屠り、女を辱しめ、家をやき、財を奪ふこと、言語道斷とは申せども、なにぶんにも不意のことなれば防ぐに術もござらぬ。かゝるときに頼むは神ぢや。われ等も一心をぬきんで一七日のあひだ、當所の氏神正八幡大菩薩は申すにおよばず、日本國中の天神地神をおろがみ奉りて、怨敵退治の祈禱を凝らして居る。その奇特によつて、かれらも遠からず水火刀刃の難をかうむり、船は海の底に葬られ、しかばねは野の末に晒さるゝでござらう。しばらく忍んで時節を待たれい。(景房に)平内左衛門どの、勝本の模様はその後なんとも相判りませぬかな。

景房。

知らるゝ通り、勝本の城が敵にかこまれたは七日以前のこと。守護代の平判官どのの城の四方を嚴重にかためて、必死にふせぎ戦ふとは申せども、敵は十倍百倍の大軍といひ、し

かも石火矢といふ日本には見馴れぬ武器を有つて居れば、木戸も石垣もまたく間に打ちくづされ、籠城はなはだ難儀に相見え申す。(彦磨うなづく。) ついてはこの趣きを太宰府へ注進せんと、それがし一人が城をぬけ出で、むらがる敵のなかを駆け通つて、やうくこままでは参つたが……。あれ、見られい。海には敵の兵船あまた屯して、向う地へは渡海もかなはず、引返さんにもこの深手ぢや。お察しくだされい。(苦しき息をつく。)

彦磨

(かんがへる。)では、勝本も遠からず落城かなう。

八藏

え、お城が落ちますか。

彦磨

(嘆息する。)こゝろは矢竹に燥つても、敵は大軍、しかも石火矢とかいふ飛び道具を有つて居るからは、いかに堅固に守つても、所詮長うは保つまい。勝本の城もやがて没落して、守護代をはじめ、城中擧つて討死であらうよ。

お島

情ないことでござりますなう。わたしが男であつたならば、蒙古の奴等の喉笛へなりとも噛み付いて、恨みを晴して遣らうものを……。

八藏

さうぢや。たとひ敵ひとりでも撲ち殺せば、上へ御奉公の道も立ち、自分の胸も晴れようものを……。なにをいふにもこの通りの不具者ではなう。(残念さうに我が足を見る。)

六右衛門

こゝにゐるものは満足の者はひとりもない。八藏殿とわしとは不具者で、お武士様は手負ぢやといふ、そのほかは女子供と……生ぬるさうな京のお人。揃ひも揃つて弱いものばかりぢや。

お島

ほんに弱い者ばかりあつまつてゐる處へ、蒙古の奴等が今にも押寄せて來たら、わたし等はなんとなることであらう。

和平次

(人々は顔を見あはせて、いよく不安の念に堪へず。しばしの沈黙。)
(ひとり言のやうに。)云ひ合はさねど、このあひだから皆なこゝにあつまつて、危い難を逃れてはゐるものゝ、禍は一足づつに近いてくる。漁師町まで焼かるゝやうでは、追つ付けこゝへも敵が來るかも知れぬ。

おそよ

たとひ何のやうなことがあつても、かならず一緒にゐてくだされ。(和平次に摺寄る。)

景房

それがしは武士ぢや。まさかのときには潔く腹も切らうが、唯あはれなるは餘の人々ぢや。(彦磨に。)なんとか救ふ手だてはござるまいか。

彦磨

さればそのことぢや。およそこの島に住む男のうちでも、すこやかな者はことごとく城内に馳せ付けて、兵糧方となり、人夫となり、あるひは武士と共に敵とたゝかひ、力をあは

せて防いで居る。あとに残りし弱きものは、逃げおくれで敵に捕はれ……。 (悲痛の色) 耳を切られ、鼻をそがるゝは愚のこと。あるものは生きながらに火に焼かれた。あるものは熱湯の釜になげ込まれた。あるものは手掌に繩を通して、高き梢に吊るされた。わけて無慚の辱かしめを受けたは女子供どもぢや。

お石 お島。 おゝ。(泣く)

彦鷹 (歌をとづ) いや、もう云ふまい。今更云うたとてなんとならう。そのむかし刀伊の賊が筑紫へ襲うて来た時、お身たちの先祖はどのやうな怖ろしい目に逢うたか、祖父や祖母の夜話にも聞いて居らう。今度の蒙古もそれにまさるとも劣らぬ、鬼のやうな徒ぢやと思へばよいのぢや。

お島 聞けば聞くほどおそろしい、いつそ今のうちに早く死んだが優しであらうか。

お秋 母さん、死んでくださるな。(縋りて泣く)

お石 獣のやうな夷にとらはれて、口惜い恥を見るよりも、早う死にたうござります。

松太郎 姉さまが死ぬときには、わしも一緒に殺してください。

彦鷹 はて、案じるには及ばぬ。今も云うた通り、弱きものはさまぐの難儀に逢ふなかで、こ

れにあつまつて居る人々は幸ひに敵の眼にも觸れず、けふまで無事にかくれ負せたは、よくく運が強いのぢや。正八幡大菩薩の加護ぢやとありがたく思はれい。

一同 はあ。(頭をさげる)

彦鷹 ぢやによつて、われくは最期の際までも、神のおん手に縋らねばならぬ。大いなる神の力は測り知られぬものぢや。假ひ九死一生の場になつても、思ひもよらぬ救ひがないとも限らぬ。いや、かならずその救ひが来るにうたがひない。現に今もいうた刀伊の賊も、あらんかぎりの亂暴狼藉をはたらいて、筑紫の國々をさわがしたが、太宰の權帥隆家卿がひとたび馬をすゝめると、かれらは嵐の前の木の葉のやうに皆ちりくぢや。こゝに討たれ、かしこに追ひつめられて、殆ど鏖殺しにされてしまふた。は、聞くだに勇ましい、小氣味のよいことなう。今度とても恐らくその通りであらう。今にみよ、勝ち誇つたる蒙古の大敵も、わが旗風の前には木葉微塵ぢや。(みづから首肯) おゝ、最後の勝利はかならず我にある。

景房 いはるゝ通り、われくがかやうな不覺を取つたも、畢竟は不意の大敵に襲はれたからのことぢや。今にも太宰府から加勢の人数が到着して、かれとわれくとが對等の軍になつ

八藏。

たなら、なんの、蒙古が……。 (あざ笑ふ) 一人も残さず蹄の塵ぢやわ。
なにさま聞けば心強い。……が、その加勢といふのはいつ頃來るでござりませうなう。

彦鷹。

(海を指す) 向う地は肥前の國、呼子浦までは海上わづかに七里、常のときなら一响か二响の間にも乗付けらるゝのぢやが、海の上にも敵は充ち満ちてをる。これを突きやぶつて進むには、二日か三日のひまはあらう。わづかに二日か三日……。それまでが我々にとつて大事の時ぢや。

六右衛。

さあ、その加勢の來ぬうちに、こゝまで敵が押して來ようも知れぬ。その時にはみなも覺悟せねばなるまいぞ。

八藏。

いつそ一思ひに殺してくれゝばよいが、敵は鬼のやうな蒙古の奴儕ぢや。われゝが魚を料理するやうに、膽をえぐり出したり、眼球をくり抜いたり、擧句の果には膾のやうに斬り刻んで、なぶり殺しにするであらう。

お島。

ましてわたしらは女子のことぢや。(狂氣のやうに身をふるはせる) おゝ、かんがへても怖ろしい。

お石。

どうしたらよからうかなう。

彦鷹。

(お島とお石は身をすり寄せて、顛へる) さればこそ皆も一心に神を念じられいといふのぢや。今この場合には神の救ひをたのむよりほかは無いぞ。

一同。

はあ。(再び頭をさげる)

おそよ。

(和平常は少しく下のかたへ退りて、切株へ腰をかける。おそよはその傍へ忍びゆく) (小聲で) くどくも云ふやうぢやが、わたしは神様よりも何よりも、たゞ一筋にお前に縋つてゐるのぢや。生きるも死ぬもかならず一緒にござるぞや。よいかえ。(和平常の手をしかと握る)

和平常。

いふまでもないことぢや。わしにしつかりと縋つてゐやれ。

おそよ。

あい。

(異様の樂の音また起る)

六右衛。

夷の樂が又きこゆる。(耳をかたむける) どうやら近寄つて來たやうではないか。
(人々も耳をかたむける。お島は起つて下のかたへ行く)

お島。

ほんにだんゝと近よつて來たやうぢや。

景房。海上にうかべる兵船がこなたの岸へ乗付けて、追々に上陸するのではあるまいか。

お石。では、だん／＼に敵があがつて来るのでござりますか。

景房。(口惜げに。) せめてこゝに四五百人、いや、百人でもよい。すぐつた兵者があるならば、かれらが陸地へ漕寄するところを正面より追ひ落して、片端から海へ打ち沈めてくれうものを……せめて一矢射たいが……。(弓をみる。) 弦も切れた。矢種も盡きた。

八藏。敵が次第にまして来れば、どうでもこゝへも寄せて来よう。この御社の杉木立が、海の方からは第一の目じるしぢや。

(お島はかけ戻りてお石の手をひく。)

お島。あれ、見やしやれ。さつきよりもますます／＼燃えひろがつて、町中がみんな火になつてしま

うた。

お石。(叫ぶ。) おゝ、おゝ、燃える、燃える。空も海も一面に眞赤になつた。

(お秋と松太郎も行きてみる。)

松太郎。(のび上る。) あれ、あれ、海の方から鯨のやうな大きな船が、こつちへだん／＼に動いて来る。

お石。ほんに敵の船が動き出したやうぢや。

お島。敵の船がこつちへ来る。(うろ／＼する。) おゝ、こつちへ来る、こつちへ来る。(矢庭にお秋を引つかへる。)

お秋。あれ、母さん。

お島。なんの、蒙古の奴等が……。何千人でも何萬人でもかゝつて来い。こつちには石火矢よりも、強い、強い、このやうな飛道具があるのぢや。(お秋を投げ出さんとする。)

お石。(おごるきて遮る。) これ、これ、どうしなさるのぢや。

お島。(狂はしく笑ふ。) はゝゝゝゝ。これを一度なげ付けたら、敵の船はこなん／＼になるであらう。はゝゝゝゝ。

お秋。あれ、堪忍して……。

(お島は泣き入るお秋を引つかへて、うしろの崖より投げ落さんとす。お石と松太郎はあわてゝ遮る。おそよも見かれて走り寄る。)

おそよ。もし、お島どの。どうしなされたのぢや。おまへは氣でも狂うたのか。

お島。はゝゝゝゝ。

八藏。これ、どうしたものぢや。氣を確かにせい。
(八藏は走り寄りてお島をおさへ、無理に社前に連れ来る。おそよ等もついて来る。)

お島。八藏どの。(地に坐る。)

八藏。おゝ。

お島。お前はわたしを捨て、どこへゆくのだぢや。

八藏。どこへも行きはせぬ。おれはちやんとこゝにゐるではないか。

お島。いや、うそぢや。お前はわたしをふり捨て、蒙古に降参する氣であらう。

八藏。えゝ、馬鹿なことを……。

お島。鬼め、悪魔め、畜生め。さあ、ひと思ひにわたしを殺してください。殺せ、殺せ。(身をつき付ける。八藏も持餘してゐる。)

おそよ。こりやどうしたのでござらうなう。

景房。あまりの悲しさに取詰めて、女は氣が狂うたとみゆるぞ。(宮司に。)あはれな者ではござらぬか。

(彦磨は無言にて嘆息す。)

お島。おゝ、ここにも蒙古の大將がゐる。

彦磨。(八藏をつき退けて社の階段を駆けあがるを、彦磨は持つたる幣束にて支へる。)はて、鎮まるがよい。心を鎮めておとなしうして居れ。蒙古の大將はな、きつと神様が退治してください。おゝ、わしが請合うた。

お島。おまへでは的にならぬ。證人に神様をこゝへ呼んでください。

彦磨。神様はちやんとこゝに来てござるが、お前たちの眼にはみえぬのだぢや。おまへ達の願ふことも、神様はみな聽いて居らるゝ。ぢやに因つて、心配は無用。太宰府の加勢ももうやがて来るであらうぞ。(しづかに云ひ聞かせる。)

お島。あい。(泣く。)

彦磨。判つたかな。神をうたがうてはならぬぞ。

お島。あい。(さめんと泣き入る。)

八藏。宮司殿のお諭しで、女房もやうく鎮まつたとみえます。

お石。ほんに一時はびつくりしました。

おそよ。それでもおちついてようござつた。

六右衛。いや、いつそ氣違ひになつてしまつた方が仕合せであつたかも知れぬ。なまじひ正氣でゐるものは、まさかの時に餘計な辛い目や苦しい目をみねばならぬのぢや。

八藏。ぢやと云うて、今こゝで氣ちがひになられては大變ぢや。(お島に。) さあ、さあ、こゝへ來や。

彦鷹。(お島に。) それ、そこには夫もゐる、子供もゐる。早う行きやれ。
(お島は泣くく階段を降りる。八藏は手とりて元のところへ連れ來る。お島はやはり無言にて泣き伏す。)

お秋。母さん、氣合でもわるいのかえ。

お石。あ、これ。今はなんにも云はぬがよい。

おそよ。唯そのまゝにして置くうちには、自然に正氣に戻るであらう。

お石。(おそよと顔をみあはせる。) ほんに人事ではござらぬなう。(泣く。暫時の沈黙。)

(下の方より漁師又作、廿二三の若者、勢ひ込んで走り出づ。)

又作。おゝ、みなも無事でござつたか。

八藏。や、又作か。どうして來た。(喜んで起つ。)

お石。おまへは今までどこに隠れてゐたのぢや。
(誇るが如く) なんの、隠れてゐるものか。あぶない所をくだりながら、そこら中を駆けまはつて、いくさの様子を見とゞけて來たのぢや。

景房。おゝ。して、軍の様子はどうかであつた。勝本の城はまだ落ちぬか。

又作。さあ、敵の大軍が八方を取り圍んで、蟻の這ひ出る隙間もないので、内の様子は委しくわかりませぬが、近所の山へのぼつて見ますと、お城はまだく落ちぬやうでござりました。おゝ。(よろこぶ。)

又作。敵の石火矢とかいふものが、かみなりのやうな凄まじい音をして、絶え間無しに天から落ちてくるので、木戸も櫓も一面の煙につままれて居りますが、お城のなかでも鬨の聲のきこえるのを見ますと、今が軍の最中かと思はれます。

景房。それをうけたまはつて安堵いたしました。このまゝで今しばらく堪へて居つたら、太宰府の加勢も到着するであらう。

八藏。早くその加勢が來ればよいなう。

又作。その加勢が今着いた。それを宮司殿へ知らせに來たのぢや。

一同。

え。(おごろき喜ぶ。)
(起つて縁さきに進み出づ。)
又作どの、よろぞ知らしてくだされた。加勢が来たとは偽りな
いか。

又作。

なんの嘘を申しませう。日本の旗を押立てた二三艘の軍船が、向う地から矢を射るやうに
漕いで來ましたが、この濱邊には敵の船が澤山にひかへてゐるので、大廻りをして東の浦
から……。

景房。

上陸いたすに相違ないか。

又作。

へい。途中にも敵が大勢陣取つて居りますれば、どうで一と軍あるでござりませうが、な
にしろ加勢の船がみえたからは、もう心配することはござりますまい。(八藏等に。)まあ、
皆も安心さつしやれ、安心さつしやれ。

八藏。

ありがたい、ありがたい。やれ、やれ、これで安心した。

お石。

ほんにわたし達も生き返つたやうぢや。

(一同の顔にもよろこびの色漲る。)

松太郎。

あねさま、もう怖いことはないかえ。

お石。

もう怖いことも何にもない。こゝにゐる者はみんな助かつたのぢや。

松太郎。

嬉しいなあ。

彦鷹。

(笑ましげに。)これほど嬉しいことはあるまい。これ、又作どの。お身は神の使も同様ぢ
やぞ。

又作。

はい。

彦鷹。

この人々がこゝに隠れてから、けふでもう七日になる。もとより火急の變事なれば、食物
の用意のあらう筈はなし、當社にたくはへの米麥とても知れたものぢや。もしこのまゝで
猶五日十日を送らうならば、たとひ敵には見附けられいでも、これだけのものが朝夕の糧
に不足して、飢死するは眼のあたりぢや。

一同。

え。

彦鷹。

そのやうなことを云うたら、皆がいよゝゝ氣を落すであらうと、實は今まで包んでゐたが、
たくはへの米も麥もあすの朝がかりで、その後はどうして人々を養はうかと、ひそかに
心を痛めて居つた。

八藏。

では、米も麥も食ひ盡して、飢死する所でござりましたか。

彦鷹。おもへば危いことであつたよ。敵に殺さるゝか、飢死するか、ふたつに一つで、死は一刻ごとに迫つてくる。その折柄に加勢があたかも到着するとは、これがまことに神の助……。(よろこび勇む。) なる、神のお救ひではあるまいか。

一同。はあ。

お石。思へばくありがたいことでござりました。

六右衛。わしは初めからどうも助からぬやうな気がしたが、敵に殺されるか、飢死するか。どつちにして望みのない命であつたのか。(嘆息する。)

景房。いや、それも最早變ふるには及ばぬ。お城ははまだ落ちぬうちに、太宰府からは加勢が来る。お、弓矢八幡……。(つゝしんで神殿のまへに禮拜す。)

彦鷹。われ等もととりあへず神前におん禮申さう。

(彦鷹は刀をあらためて翠簾の前に坐し、うしろ向きになりて拜す。)

お石。かうして皆なが安心したも、又作どの、おまへのお庇ぢや。あつくお禮を云ひますぞ。

おそよ。今の今までは何うなることかと、こゝろは半分死んでゐました。

又作。(不興けにおそよを睨む。) いつそ死んでしまへばよいに……。お前のやうな猥な女子があれば

ばこそ、氏神様の御罰を蒙つて、島中のものが難儀をするのぢや。(更に和平次を睨む) 遠い都から碌でもない奴が渡つて来て、島の掟を破つたばかりに、こんな大變が起つたとは知らぬか。

(おそよと和平次は顔をみあはせて、黙つてゐる。)

六右衛。(宥めるやうに。) それは私もさつき叱つて置いた。もうなんにも云はぬがよい。かういふ時には誰彼の差別はない。一つ船に乗りあはせて風雨に出逢うたやうなものぢや。おたがひに心を一致して扶け合はねばなるまいぞ。これ、京のお人。お前もなんにも云はずに堪へてゐさつしやれ。よいか。

和平次。おまへのお詞にしたがつて、わしはさつきから此方にひとり離れてゐまする。

又作。離れてゐるならば、もつと遠いところへ行け。こゝはわし等が氏神様のお社ぢや。他國者のあるところではないわ。(いひ捨て、あちらを向く。)

和平次。なるほど私は他國者、こゝにゐては悪いかも知れませぬが、なにをいふにも今の場合、こ

よりほかに行くところは無し、どうぞもう少し置いてくださりませ。

おそよ。どうぞ料簡して、些とのあひだ……。

(おそよの聲を聞きて、又作は再びむき直る。)

又作。いや、ならぬのぢや。

おそよ。でも、あの人がかく／＼とこゝを出たら、四方八方は敵のなか、どのやうなおそろしい目に逢はうも知れまい。そのやうな酷いことを云はずに、せめて今夜だけはこゝへ置いて遣つてくだされ。

又作。

(怒鳴る。) え、ならぬと云ふに……。あいつが煮て食はれうと、焼いて食はれうと、それはおのれが心柄ぢや。(和平次に。) やい、京の奴。早くゆかぬか。え、行かぬか。行かぬとおのれ料簡せぬぞ。

(又作は支ふるおそよを突きつけて、和平次の胸ぐらを掴む。)

和平次。

これは無體な、どうさつしやるのぢや。

又作。

どう仕様とおれの勝手ぢや。(和平次の胸倉を取つて捻ぢ倒さんとし、たがひに争ふ。)

おそよ。

(うろ／＼して。) もし、どなたか止めてくださりませ。

八藏。

又そつちで騒ぎ出したか。困つたものぢや。まあ、待て、待て。

(又作は和平次を捻ぢ倒して撲つ。八藏は寄つて支へる。)

彦磨。

(見かれて叱る。) はて、騒がしい、静まらぬか。

八藏。

それ、見さつしやれ。わしが云はぬことか。

(ひき分けられて、又作は鎮まる。おそよは和平次を介抱して着物の泥など拂ふ。彦磨は再び神前にむかつて拜す。)

景房。

これ、これ。又作とやら。

又作。

はい。

景房。

太宰府の加勢の船は東の浦にみえたと申すに、矢叫びもきこえず、関の聲も起らず、いく

さの始まつた様子もないは……。 (眉をひそめる。)

又作。

いや、たしかに見えたと相違ござりませぬが……。 (考へる。)

では、もう一度見届けてまゐりませう。

(又作起ちかゝる。和平次もすゝみ出づ。)

和平次。

もし、今度はわしが行きます。

又作。

(あざ笑ふ。) お前がゆくか。

おそよ。

もし、お前……。 (氣づかはしげに和平次の袂をひく。)

和平次。いや、案じるには及ばぬ。いまも聞く通り、わしは他國の旅の者、皆さんの情でこのあひだからこゝに隠まはれてゐるのぢや。たゞ安閑としてゐては、どうもわしの義理が立たぬ。第一には氏神様へ對しても相濟まぬ道理ぢや。(人々に。)もし、今度のお使ひはどうぞわしを遣つてくださりませ。

八藏。なるほど、それももつともぢや。では、氣をつけて行つて來さつしやれ。

景房。大儀ぢやなう。

和平次。では、行つて來ます。(行きかゝる。)

おそよ。(秋にすぎる。)もし、お前……。たとひ何のやうなことがあつても、そばを離れぬといふ約束ではござらぬかえ。

和平次。(躊躇する。)さあ、その約束を忘れはせぬが……。わしも一働きせねば義理が濟まぬ。直に戻つて來るほどに、まあ、待つてゐやれ。(振切つて行かうとする。)

おそよ。(また取り付きて顔をみる。和平次も思はず立止まる。)

又作。はて、埒のあかぬ。おのれ等は口先ばかりで、よう行くまい。やつぱりおれが行つて來るわ。(起ちあがる。)

和平次。いや、なに……。 (おそよをつき退ける。) すぐに行きます。

(和平次は下のかたへ足早に走り去る。おそよも二足三足追ひ行きて、おぼつかない後を見送る。)

お石。(空を仰ぐ。) お、いつの間にか暮れかゝつた。

八藏。おまけにどうやら雨催ひになつて來たやうぢや。

お石。もうそろ／＼とお夜食の支度をせねばなりません。

松太郎。姉さま、わしも飢うなつた。

六右衛門。もう夜食の支度をする時刻か。人間も生きてゐるあひだは食はねばなるまい。わしは眼が不自由でなんの役にもたゝぬが、手探りながら湯を沸すぐらゐることは出来る。さあ、一緒に臺所へゆかうではないか。

又作。わしも駈けあるいたので腹が減つた。では、手傳つて支度をしようか。米を洗ふのは女達をたのまねばなるまい。

お石。あい、あい。さあ、おそよどのも早う來てくだされ。これ、おそよ殿……。

おそよ。あい。(餘儀なく戻つてくる。)

お石。いつもの通り、お夜食の支度をするのぢや。
おそよ。あい、あい。

六右衛。お石、おそよは木の桶がぐれに社殿のうら手へゆく。松太郎は六右衛門の手をひいて起ち上る。
これ、鳩はまた戻つて來ぬか。

松太郎。けふもまだ一羽も戻つて來ませぬ。

六右衛。はてなう。(かんがへる。)宮司どのは米も麥もあすの朝までであると云はれたが、わしはどうも今夜が食ひ納めのやうに思はれてならぬ。わし等はたしかに助かつたのであらうか。

又作。もう大丈夫ぢや、心配はござらぬ。

六右衛。さうかなう、くどくも訊くやうぢやが、鳩はまだ戻つて來ぬか。

松太郎。あい。

(六右衛門はかんがへながら松太郎に手をひかれてゆく。又作もおなじく社殿の裏手へゆく。八藏はお鳥をたすけ起す。)

お鳥。お、蒙古の奴が……。あれ、あれ。地獄の使が……。(狂ひ叫ぶ)あれ、赤鬼や青鬼がみんなを殺しに來居つた。

八藏。はて、なにをいふのぢや。もう大丈夫、安心せい。誰もわし等を殺しに來はせぬ。さあ、おとなしく來やれ、來やれ。

(八藏とお秋はお鳥を介抱しつゝ、これも社殿の裏手へゆく。海の音きこゆ。)

景房。加勢の人数が到着したからは、どうでも一と軍なうてはならぬに、鎮まり返つて音も聞えぬは……。合點のゆかぬことぢやなう。京の男はまだ戻らぬか。

(景房は不安の體にて起ち上り、籠のかたを望むこゝろにて下の方へ歩みゆく。白き鳩一羽飛び來りて社前に落つ。)

景房。お、鳩が落ちた。翅を傷けたとみえて飛び得ぬやうぢや。や、なにやら脚にむすんであるは……。

(鳩をとらへて、その脚に結びたる文を取り、よみ終りておごろき倒る。)

景房。八幡、大事ぢや。宮司どの……。 (あわたししく呼ぶ。)

彦鷹。(見かへる。)何事でござるな。

景房。これを見られい。
(彦鷹は縁を降りて景房のほとりに進み寄り、文をうけとりて讀む。)

彦 鷹。

蒙古の大軍に圍まれて、十月廿日落城し終んぬ。城中の男女一人も逃るゝこと能はず、この文を拾ひしものは即刻に太宰府へ注進におよぶべく候ふこと。壹岐の守護代平判官景隆……む、さては勝本の城も遂に落ちたか。(驚く。)

景 房。

たのみの綱ももう切れた。(太息をつく) 残念至極でござるなう。

彦 鷹。

蒙古が襲ひきたりし朝より、當社の飼鳩は皆いづこへか飛び去つて一羽も姿をみせざるは不審のことと思ひしに、勝本の城内へ飛びゆきて大事の使を勤めしか。見られい、使を果たして鳩は死んだ。(鳩の死體をちつと見る。)

(下のかたより和平次は手負の體、髪をみだして走り出づ。)

和平次。

もし、大變でござりまするぞ。加勢の人数はまゐりませぬ。(云ひつゝ倒る。)

景 房。

なに、加勢がまゐらぬ……。(思はず叫ぶ。)

彦 鷹。

叱つ。(ふたりを制してあたりを窺ふ) 見れば數ヶ所の疵を負うてゐるやうぢや。これへ來てしづかに語るがよい。

(和平次をたすけて階段のまへに連れ來る。和平次は弱りて倒る。)

彦 鷹。

加勢が着いたとは偽りか。

和平次。

いや……。 (頭をふる。) 一旦は岸まで漕ぎ寄せましたが、なにぶんにも敵の大軍が控へてゐるので……。とても小勢では上陸おもひも寄らず、再び船を沖へ戻して……。

景 房。

後陣のつゞくを相待ち居るか。そのありさまでは容易に上陸の見込みもあるまい。我々の運も早やこれまでぢや。

和平次。

まだそればかりではござりませぬ。敵は次第に……。これへ押寄せてまゐりまする。わたくしも、途中で敵に出逢ひまして……。

彦 鷹。

お、そのやうに手を負うたか。

和平次。

やうくこゝまで逃げて來ましたが……。とてもこの深手では……。もし、おそよは……。おそよは……。どこに居りまする。(云ひかけて弱る。)

景 房。

そのおそよとやらは奥に居るぞ。呼んで來て……。 (起ちあがる。)

彦 鷹。

あ、これ……。 (景房の袖を強くつかんで、ゆくなと眼で制す。景房は不審ながら立止まる。)

和平次。

おそよ……。 おそよは……。 (空をさぐりつゝ又倒る。)

彦 鷹。

(悼ましげにみる。) 不憫ながら是非もござらぬ。もう息も絶えましたかな。

景房 (呼吸をうかがふ。) 張りつめた気が俄に弛んだと見えます。

彦鷹 さらに暫しのあひだ、人の目に觸れぬところへ……。

彦鷹 (彦鷹は死骸をひき起せば、景房も手傳ひて、下のかたの木かげに横へる。海の音次第に高くなる。) 空は陰つた。たゞならぬ海の音や。こよひは風雨にならうも知れぬ。(空を仰いで獨言し、ばしの沈黙。) 平内左衛門どの、われくも最早覺悟せねばなりませぬぞ。

景房 (うなづく。) それがしも左様に存じてをる。勝本はすでに落城し、加勢の人数は到着せず、今にもこゝへ敵勢が寄るといふ。もはや救ひの望みも絶えた。ついで先刻も申した通り、それがし一人の覺悟は己にさだめてござるが、餘の人々は……。(眉をひそめて彦鷹の顔をみる。)

(彦鷹無言にて神殿に上がり、神前にそなへたる神酒と土器とを三方に乘せてさげ出づ。)

彦鷹 何事も神の御こゝろぢや。異國の夷にとらはれて生恥死恥を晒さうよりも、こゝにある者いづれも枕をならべ、神の御前に死ぬるより外はあるまいが、見られぬ。奥にある男三人、女三人、童二人、なんにも知らずに夜食の支度を急いでをる。彼の人々は今にも加勢が來ると思つて、さだめて喜んでゐるであらうに、それをおどろかすは餘りに無慚ぢや。勝本

の落城も……彼の男の注進も……。(和平次の死骸かゆびさす。) 知つてゐるのはお身とわれ

との唯ふたりぢや。餘の人々には飽までもつゝみ隠して、何事もしらぬ間に安々と……。

うしなふ手段がござらうか。

彦鷹 萬事はわれらにお任せあれ。

景房 たのみ申すぞ。

彦鷹 心得申した。

(二人は顔をみあはせて、たがひに決する所あるが如く、彦鷹は三方をさげ、しづかに社殿の裏手に入る。海の音いよゝ高く、電光ひらめく。)

景房 せめて手足のはたらきが自由ならば、われより敵に駆け向うて、花々しく切死もせうものを……。(起たんとしてよろめく。) なまじひのこととして敵の手に捕はれんよりも、この神前にてさうぢや。

(弓を杖にして社前の上の方にあゆみ來り、腹巻をとく。下の方の木かげより蒙古の兵一人は矛を持ち出て、景房を見て突いてかゝる。景房は太刀をぬきて闘ひ、遂に蒙古の兵を切倒す。)

景房 (打笑む。) おゝ、よい道道れがひとり出來たわ。

彦磨。(敵の死骸に踏んまたがりて太刀を腹に突き立て、引きまはして倒る。電光はげしく閃く。社殿のうしろより彦磨出づ。その顔色は蒼ざめたり。)

(昇房の死骸をみる。) 平内左衛門はもはや自害せられたか。さすがは武士ぢや。おゝ、こゝに敵の死骸が……。 (下のかたを見かへる。) いや〜敵もこゝへ近いたとみゆるな。

(云ひつゝ、更に引返して、社殿のうしろを窺ふ。社殿のうしろよりおそよは髪をふりみだして走り出づ。)

おそよ。宮司様……。 (彦磨はしづかに見かへる。) 唯今の御神酒を頂戴いたすと、俄にみんなの様子が變つて……。

彦磨。おゝ、なんとした。

おそよ。先づ最初にはお秋どのと松太郎……。

彦磨。おゝ。(指折りかぞへる。)

おそよ。つゞいてお石どの、お鳥殿……。八藏どの、又作殿……。 (彦磨は無言に指折り数へる。) ど

彦磨。れもこれも顔の色が土のやうになつて……。

おゝ。(少しよろめく。)

おそよ。口からおびたどしい血を吐いて……。

彦磨。みな倒れてしまつたか。(小聲に力を籠める。)

おそよ。あい。こりやまあ、どうしたことでもござりませうな。

彦磨。(しづかに。) 騒ぐまい、騒ぐまい。して、残るひとりの六右衛門は……。

おそよ。あの盲のお人は……。おほかた斯うなるであらうと思つてゐたと云ひながら……。これも

おなじ枕に倒れて……。

彦磨。(うなづく。) これで先づわしの役目も済んだ。

おそよ。え、では、もしやお前が……。

彦磨。あの神酒のなかには、おそろしい毒が入れてあつたのぢや。

(そのうちにおそよも胸をかへて苦しむ。)

おそよ。え、あの御神酒に毒を入れて……。おまへは神様のやうなお人ぢやと。ふだんから思つてゐたに……。毒を盛つて大勢のひとを殺すとは……。蒙古の夷よりもおそろしい。(苦しむ) なんだそのやうな酷いことをしたのぢや。さあ、何でわたしを殺すのぢや。

(おそよは口より血を吐きつゝ、恨めしげに這ひ寄つて、彦磨の裾につかみ付く。電光ひらめく。)

彦磨。

いや、殺しはせぬ、助けたのぢや。加勢が来るといふは空頼みで、いま半响生きてゐたら、こゝにゐる者はみな敵の手にとらはれて、なぶり殺しに逢はねばならぬ。

おそよ。

そんならさうと打明けて、得心さしてはなぜ殺さぬ。だまして殺すはあんまりぢや。

彦磨。

だまして殺したは私のなさけぢや。なんにも知らぬ間に安々と……。

おそよ。

ほかの人は兎も角も、わたしはひとりで死なれうか。(苦む)たとひどのやうな場になつても……一緒に……一緒に死ぬる人がある。

彦磨。

一緒に死にたい人といふは、おほかた京の男であらう。あれを見やれ。(和平次の死骸を指さす)男は疾うに先へ行つて、そなたの来るのを待つてゐるわ。

おそよ。

え、そんなら和平次どのも……。お、あすこに倒れてゐるのは……。

彦磨。

あれは私が殺したのでない。敵のために殺されたのぢや。

おそよ。

え。(死骸の傍へ這ひ寄りんとすれど自由ならず)和平次どの……。もし、わたしもお前のあとを追うて……。冥土へふたりが手がひいて……。もし必ずはぐれて下さるな。

(電光ひらめく。おそよは和平次の死骸のかたに合掌しつゝ倒る。)

彦磨。

毒が早く廻らぬために、苦んで、悶いて、悲しんで、恨んで……そなたが一番の不仕合せ

者であつたよなう。

(おそよの死骸をちつと視る。電光閃めく。異國の軍樂きこゆ。)

彦磨。

(空を仰ぐ)お、あらしも近いた。敵も近いた。

(一羽の白鳩とび来る。彦磨は手をたゞげ、鳩は馴れてその足もとに来る。彦磨は以前の鳩が送り來りし文を取り出して、更にこの鳩の脚にむすび付ける。)

八幡宮のお使ぢや。ゆけ。太宰府へ……。

彦磨。

(鳩は羽ばたきして飛び去る。)

彦磨。

これでよい。(うなづく)こゝにあるもの九人はみな死んだ。最後の一人は斯うして死ぬ

彦磨。

のぢや。

(彦磨は社殿にのぼりて、神前にそなへたる白羽の征矢をさし上げて出づ。雷鳴とどろきて、電光しきりに飛ぶ。彦磨は階段に腰うち掛け、彼の征矢をわが咽喉に突き立て、倒る。)

幕

籠

釣

瓶

大正六年六月作。
大正六年八月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——次郎左衛門（市川左團次）寶生榮之丞（市川壽美藏）
下男治六（實川延若）佐野屋甚兵衛（市川段四郎）刀屋勘七（市川猿之助）按摩
長悦（市川左升）兵庫屋の八橋（澤村源之助）榮之丞の妹おすみ（市村龜藏）立
花屋のお藤（吾妻市之丞）など。

登場人物——佐野次郎左衛門。寶生榮之丞。下男治六。佐野屋の亭主甚兵衛。刀屋の
番頭勘七。按摩長悦。薦の者銀次。兵庫屋の八橋。新造掛橋。浮橋。禿八千代。榮之丞
の妹おすみ。立花屋の女房お藤。兵庫屋の若い者五助。ほかに茶屋の女。宿屋の女。下
男。近所のむすめ。妓夫。職人。町人。旅人。すゝき賣。駕籠屋。廓のわかい者。薦の
者など。

第一幕

(一)

よし原の廓に近き大音寺前。寶生榮之丞の家。古びたる二重屋體にて、正面の上のかたに鼠壁あり。ついでに破れたる障子を閉てたり。家の上のかたには竹藪あり。下の方には破れし四つ目垣に沿うて低き木戸あり。垣のそとには榎の大樹ありて、そのうしろは田圃をへだて、吉原の廓を

みる。享保の末年、七月下旬のゆふぐれ。
（榮之丞の妹おすみ、縫ひものを片寄せて、近所の娘ふたりと語る。娘等は縁に腰をかけてゐる。蛙の聲きこゆ。）

娘 甲。おまへはよし原の燈籠を見物に行きましたかえ。

おすみ。つい眼と鼻のあひだに住んでゐながら、今年はまだ一度も見物に行きませぬ。

娘 乙。わたしも十五日過ぎの替り目をまだ見物に行きませぬが、うかくしてゐると、今月も

う過ぎてしまひます。

娘 甲。八朔前に誘ひあはせて、一緒に行かうではござんせぬか。

娘 乙。その時には屹と誘ひに來ます。

（下のかたより兵庫屋の若い者五助出て來りて門に立つ。）

五 助。ごめん下さいまし。

おすみ。はい。どなたでござります。

五 助。へい。兵庫屋からまゐりました。

おすみ。お、ほんにお前は兵庫屋の五助さん。どうぞこつちへ……。

五 助。では、御めんを蒙ります。（内に入る。）

娘 甲。そんならわたし達はもう歸りませうか。

おすみ。あした又遊びに來てくださりませ。

娘 乙。いつまでもお邪魔をしました。

（娘ふたりは挨拶して下のかたに去る。五助は縁に腰をかける。）

五 助。こちらもなか／＼蚊がひどうございますね。（腰の扇を取りて足のあたりを拂ふ。）

おすみ。ひるまでも蚊蚊の多いには困ります。（團扇を出してやる。）

五 助。時に御兄様は……お留守でございますか。

おすみ。堀田原まで謠の出稽古にまゐりましたが、もうやがて戻るでござりませう。

五 助。そろ／＼店が忙がしくなる時分ですから、お待ち申してゐるわけにもまゐりませんが、お歸りになりましたら、どうぞこれを差しあげて下さいまし。（懐中から文を出しておすみにわたす。）

おすみ。はい、はい。毎度御苦勞でござります。して、八橋さんはいつも全盛でござりますかえ。

五 助。すこし氣分が悪いとかいふので、二三日は店を引いておいででしたが、けふはもう出て居

ります。それと云ふのも御兄様がこのごろ些とも顔をお見せなさらないので、花魁もじれ切つてゐる様子で……。その御手紙も大方いつものお呼出しでございませう。どうかまあ宜しくねがひます。(起ちあがる。)

おすみ。

もうお歸りでござりますか。お茶もあげないでお氣の毒でござりました。

五助。

どう致しまして……。くだいやうではございますが、御兄様にも御都合なすつて、近いうち一度お出で下さいませうやうに……。

おすみ。

よく申しますでござりませう。

五助。

では、なにぶんお願い申します。
(五助は下のかたに去る。時の鐘きこゆ。おすみは空を仰ぐ。)

おすみ。

お、もう日が暮れる。あかりでもつけませうか。(縫ひものを片附けて奥に入る。)

榮之丞。

(實生榮之丞、廿二三歳、浪人したる能役者、出稽古より戻りし體にて下のかたより出づ。)

日中はなか／＼残暑が強いが、朝晩はよほど涼風が立つて來た。曆はさすがに争はれないものだな。(縁に上る。)

(おすみは行燈を點して奥より出づ。)

おすみ。

お歸りでござりましたか。たつた今。兵庫屋の若い衆が……。

榮之丞。

五助にはそこで逢つたが、見付けられないやうに顔をそむけて行き違つて來た。(羽織をぬぐ。)

おすみ。

お前がこのごろ些とも見えないので、八橋さんが煩つてゐたとやら。この手紙も大方そのことでもござりませう。

(手紙をわたせば、榮之丞はうけ取りて傍へ置く。)

榮之丞。

急いで讀むにも及ぶまい。用は大抵わかつてゐる。(さびしく笑ふ。)

おすみ。

(羽織をたゝみながら。)お前この頃はなぜ廓へ足踏みをなされませぬ。八橋さんもさぞ待ち焦れてゐませうに……。

榮之丞。

わしは思ふ仔細があつて、當分八橋のところへは立寄りぬことにした。あのやうな女に係り合つてゐると、身の行末がおそろしい。

おすみ。

でも、八橋さんとは起請までも取りかはして……。なるほど、起請もとりかはした。夫婦約束もした。しかし八橋には佐野の大盡次郎左衛門といふ深い馴染がある。いや、それは今更云ふまでもないが、忘れもせぬこの三月の櫻の

ころであつた。兵庫屋の二階で丁度その次郎左衛門と落合つたら、八橋は無理にわしを自分の座敷へ連れて行つて、これはわたしの従弟だと云つて次郎左衛門に引きあはせると、なんにも知らない次郎左衛門は近附のしるしだと云つて、わしに百兩づつみを惜氣もなく呉れた。

おすみ。

ほんにそんなお話を聴きました。お前はそのときにその百兩を受取らずに、歸つておいでなされたとやら。

榮之丞。

どうしてそれが受取れるものか。廓の習とは云ひながら、人をだますのを何とも思はぬ、冷い、酷い女のころが、私をつくづくおそろしくなつた。

おすみ。

それでおまへは八橋さんに愛想を盡したのでござりますか。

榮之丞。

さあ、愛想をつかしたと云ふでもないが……なるべく遠退いてゐるやうに、その後はせいぜい心がけてゐる。逢へばやつぱり未練が出るから、こゝしばらくは逢はずにゐて、たがひに忘れるのが二人のためだ。

おすみ。

お前がさう云ふころと知れたら、八橋さんはさぞ怨むことでござりませうに……。

榮之丞。

八橋に怨まれるは覺悟の上だ。もし次郎左衛門に怨まれたら、八橋もわしも命があるまい。

おすみ。

え。おまへはまだ知るまいが、あの次郎左衛門といふ男は、以前は野州の長脇差であつたとやら、年のころは三十前後の、見るから立派な男だが、あの鋭い眼のひかり、一度かうと思ひ込んだら、どんなおそろしいことでも仕兼ねまい。思ひ出してもぞつとする。

おすみ。

お。廓の水にしみてゐるとは云ひながら、あゝ云ふ男をだますとは……。八橋はよくくの大膽者と、わしも舌をまいてゐるのだ。いや、そんな話はあとにして、そろく夕飯の支度をしてくれぬか。

榮之丞。

ほんにうづかりしてゐました。すぐにこしらへて持つてまゐります。

おすみ。

(おすみは奥に入る。蛙の聲きこゆ。榮之丞は起つて縁さきに出る。)

榮之丞。

こゝへ来た當座は、蛙の聲もめづらしかつたが、耳に馴れると此頃はもううるさい。いやそんなことを云つてゐるうちに、水の谷の池に雁の鳴く夜もやがて來るであらう。

(榮之丞は縁の柱によりて諺ふ。)

諺「心弱しや白眞弓、ゆん手にあるは我子ぞと、思ひきりつゝ親心のやみ討に現なき、わ

が子を夢となしにけり。

(この謡のうちに、下のかたより佐野次郎左衛門、三十餘歳、出て來りて門に立つ。謡の文句の切れるを待ちて外より聲をかける。)

次郎左。ごめん下さりませ。

おすみ。(奥より出づ。)はい、はい。(庭に降りて木戸をあける。)どなたでござります。

次郎左。佐野の次郎左衛門がまわりましたと、榮之丞どのお傳へくださりませ。

おすみ。え。(ぎよつとする。)あの、おまへが佐野の……。

次郎左。はい。野州佐野の次郎左衛門と申せば、御主人は御存じの筈でござります。

(次郎左衛門は丁寧にいふ。それでもおすみは薄氣味悪く、そつと引返して兄のそばへゆく。榮之丞はすこし思案したるが、結局これへと眼で知らせる。おすみはおどくしながら門口へゆく。)

おすみ。どうぞお通りくださりませ。

次郎左。御めん下さりませ。(内に入る。)

榮之丞。ようこそおたづね下された。そこでは御挨拶がなりませぬ。先づこれへ。

(次郎左衛門は會釋して縁にあがる。)

次郎左。その後は御無沙汰をいたしました。きびしい残暑にも御障りはござりませぬか。

榮之丞。近頃はとんと八橋の方へも立寄りませぬので、手前こそ御無沙汰をいたして居りました。

次郎左。これ、おすみ。早くお茶の支度でもいたせ。

榮之丞。いや、おかまひ下さるな。これが妹御でござりますか。

次郎左。すみと申す不調法者、お見識り置きくださりませ。

初めましてお目にかゝります。

(次郎左衛門とおすみは會釋して、おすみは早々に奥に入る。)

次郎左。日が暮れてからだしぬけに伺ひましたは餘の儀でもござりませぬが、折入つてお前様に

たのみ申したい儀がござりまして……。

して、そのお頼みと仰せられますは……。

八橋を身うけの御相談でござります。

では、八橋を身請けなさるか。

御不承知でござりますか。

榮之丞。(あわて、打消す。)いえ、なに、廓を出ますれば當人も仕合せ、決して異存はござりませぬ。

次郎左。ところで、御相談と申すは身うけの金でござります。實を申せばこの次郎左衛門、佐野の身代を潰してしまひました。

榮之丞。

え。佐野の大盡と云はれたあなたが、身代を潰したとは……。

次郎左。

お話し申せば長いこと、こゝでくどくは申しませぬが、二年越しの廓通ひと、打ちつゞいた風雨やら洪水やら、色々の不仕合せがかさなりまして、野州佐野の在では少しは人にも知られた家を、もう滅茶滅茶にしてしまひました。(さびしく笑ふ。)それでもよそへ縁付いてをります妹や親類どもの計らひで、千兩の涙金を貰ひまして、おまへ様も御存じの下男治六、あれと二人で江戸へ出てまゐつたのでござります。しかしその千兩の金も相變らずの廓通ひで、もう半分ほどは遣ひすてしまひました。治六はしきりに心配いたしまして、その残つた金を元手になにか商賣でも始めると申しますが、それが、どうもなりませんぬので……。就てはその金みんな散つてしまはぬうちに、いつそ八橋を身請けいたしたいと考へて居りますが、表向きにわたくしから掛合ひますれば、身の代やら引祝ひやらで、どうしても千兩以上の金が要りませう。ところが、わたくしの懐中に残つてゐる金はもう五百兩ばかりで、どうにも仕様がござりませぬ。

次郎左。

(奥よりおすみは盆に二つの茶碗をのせて持ち來りて、ふたりの前に置く。)これは恐れ入ります。(茶碗をとりて飲む。)

次郎左。

(榮之丞はおすみに奥へゆけと眼で知らせる。おすみは再び奥に入る。)そこで苦しまぎれに思ひ付きましたは親許身請けのこと、お前様と八橋とは従弟同士とやら。

榮之丞。

(溢りながら)はい。

次郎左。

いや、たとひ血をひいた縁者でないにもせよ、お前様から八橋の親許へ相談して、親許身うけと云ふことにして下されたら、四百兩か五百兩で埒があきませうかと思はれますが……。

(榮之丞は黙つてかんがへてゐる。)

次郎左。

御迷惑でも折入つておねがひ申します。榮之丞どの、御不承知でござりますか。

榮之丞。

さあ。

次郎左。

こなたがまことの従弟であらうが無からうが、わたくしの方では飽までも従弟と見かけておたのみ申す。どうぞ背いてくださらぬか。

榮之丞
次郎左。

では、おもて向きはこの榮之丞が請出す體にして、八橋をわたせと云ふのでござるか。
佐野の大盡とも云はれた者が、女を請出す金につまつて、卑怯らしい親許身うけと、廓の
ものに笑はれるのも口惜しい。そこがわたしの苦しいところ。無事に廓を出るまでは、主
人や茶屋は勿論のこと、本人の八橋にも知らせぬやうに……。

榮之丞
次郎左。

そんなら八橋にも知らせずに……。
次郎左衛門が宿無し同様の身になつたと、廓にゐるあひだは知らせたくない。これが實生
榮之丞どのであつたら、たとひ宿無しでも乞食でも八橋は喜んで來ませうが、この次郎左
衛門が宿なしと知れたら、八橋は素直にまゐりますまい。それはわたくしもよく承知して
居ります。

榮之丞
次郎左。

(決心して。) いや、判りました。八橋の親許身請けはわたくしが屹と引請けました。
では、御承知くだされましたか。

榮之丞
次郎左。

これから阿部川町のかれが親許へまゐつて、篤と相談いたしませう。
早速の御承知ありがたうござります。榮之丞どの。この次郎左衛門といふ男は、よくく
無理なことをいふ手前勝手な人間でござりますな。

次郎左。

(次郎左衛門は笑ふ。榮之丞も餘儀なく笑ふ。)
斯うお話がすらくと纏まりましたれば、長居はお邪魔、もうお暇をいたしませう。では、
くれぐれも身うけのことを……。

榮之丞

承知いたしました。
よろしくおねがひ申します。

次郎左。

(次郎左衛門起ちあがる。奥よりおすみ出づ。)

おすみ。

もうお歸りでござりますか。

次郎左。

時ならぬ時分に出まして、お邪魔をいたしました。

次郎左。

(次郎左衛門は庭に降りる。廓のさわぎ唄きこゆい。)

榮之丞

こゝらでは廓の騒ぎが手に取るやうにきこえますな。

次郎左。

今夜もこれから廓でござりますか。

おすみ。

金のあるあひだは止められませぬ。これも因果でござりませう。はゝゝゝゝゝ。

おすみ。

(次郎左衛門は下のかたに去る。榮之丞はちつとあとを見送る。)

おすみ。

兄様。八橋さんはあの次郎左衛門どのに、すなほに請出されて行くでござりませうか。

榮之丞。忌と云うても行かねばなるまい。實生榮之丞を八橋の男と知つて、そのふところへ這入つて頼みに來た次郎左衛門。くどくも云ふやうだが、あの凄まじい眼のひかり……。

おすみ。

お。

榮之丞。

迂濶に逆らうたら八橋も、この榮之丞も殺さるゝわ。

おすみ。

え。

榮之丞。

これからすぐに廊へ行つて、八橋によく因果をふくめて置かねばなるまい。

おすみ。

そんならすぐに吉原へ……。

榮之丞。

お、羽織を出せ。

(おすみは不安らしく羽織を持ち來りて榮之丞に着せかける。榮之丞はいそいで身支度する。騒ぎ唄きこゆ。)

(II)

よし原兵庫屋の二階の名代座敷。平舞臺にて、正面に床の間、違ひ棚などあり。上のかたに塗骨の障子屋體あり。下の方にもおなじく障子の出入口ありて、障子の外は廊下の心なり。前の場とおなじ夜。座敷には燭臺を點しつられたり。

(下方入りの騒ぎ唄眼かきこゆ。下のかたの廊下より八橋の番頭新造掛橋と振袖新造浮橋のふたりは次郎左衛門の下男治六を無理に引張りて出づ。)

治六。

これ、これ、わしをどこへ連れてゆくのだ。

掛橋。

はて、まあ、おとなしく來なさんせ。

(ふたりは治六を座敷に連れ込む。)

治六。

さあ、わしをこゝへ連れて來てどうするのだ。

浮橋。

お前に少し聞きたいことがござんす。なんでも正直に云ひなんすかえ。

治六。

お、あらためて念を押さずとも、わしは生れついて正直の男だ。さあ、一から十まで何でも聞いたがよい。

掛橋。

そんならお前に聞きますが、きつと正直に云ひなんすかえ。

治六。

え、おなじやうに幾度も幾度もくどいことをいふ人達だ。佐野の治六は正直者と、近郷

近在は云ふもおろか、野州一圓に通つた男だ。あんまり疑つて貰ふまいぞ。それほど立派に云ひなんすからは、きつと正直に云ひなんし。おまへの旦那の次郎左衛門

さん、あのお人は今どうしてゐなさんすえ。

治六。はて、知れたことだ。日本橋馬喰町の宿屋に泊まつてゐて、今夜もこの二階に來てゐるのだ。

浮橋。それを聞くのではござんせぬ。おまへの旦那どのは今でも野州佐野のお本盡でござんすかえ。

治六。え。(おどろく。)

掛橋。それとももう二度とは佐野へ歸れぬ身の上でござんすかえ。

治六。え。

浮橋。さあ、はつきりと云ひなんし。

治六。そ、そんなことを一體誰が云つたのだ

掛橋。諸國の人の入込む廓でござんす。いくらお前たちが隠してゐても、次郎左衛門さんは佐野の身代をつぶして、夜逃げ同様に江戸へ出て來たといふ噂を、わたし達は聞いてゐる。

治六。え。(いよくあわてる。)

浮橋。なにも彼も隠さずに教へてくださんせ。

治六。いや、そんなことは嘘だ、うそだ。

掛橋。きつと嘘でござんすかえ。

治六。え。

浮橋。生れついての正直者と、自慢するほどのお前が、わたし達をだますのかえ。

治六。え。

掛橋。きのふ來た野州のお客に何も彼もみんな聞いてゐる。それでもお前は隠しなんすか。

治六。さあ。

浮橋。白状せぬと抓りんすよ。(抓る。)

治六。あ、堪忍してくれ、堪忍してくれ。

掛橋。いえ、いえ、堪忍はなりいせん。(おなじく抓る。)

治六。まあ、料簡してくれ。

浮橋。そんなら正直に云ひなんすか。

掛橋。さあ、白状しなんすか。

(二人は治六の手を取つて、小突く。治六は途方にくれる。)

治六。では、どうでもわしに云へといふのか。

浮橋。知れたこととござんす。

掛橋。さあ、云ひなんし。

浮橋。云ひなんし。

(ふたりは捨臺詞にて治六を責める。治六はいよく困る。)

治六。え、もうかうなつたら仕方がない。正直にいふは云ふが、かならず旦那どのに云つてはならぬぞよ。よいか。實はわしの旦那どのは……廊通ひやら色々の不仕合せやらで、佐野の身代もつぶしてしまつて、わしと唯つたふたりで江戸へ出て來たのだ。

掛橋。(呆れたやうに。)では、ほんたうでござんすかえ。

治六。だが、これは極内證のことだ。八橋どのに云つてはならぬぞ。又、わしがこんなことを吹聴したことを、決して旦那どのに告げてはならぬぞ。どつちに知れても大變だから、これはこゝだけのことにして置いてくれ。よいか。

(掛橋は浮橋と顔を見あはせてゐる。)

治六。かならず誰にも云つてくれるなよ。よいか。よいか。

(上のかたの障子をあけて遊女八橋、二十一二歳、出づ。)

八橋。治六さん。よく云つてくだんした。

治六。え。(おどろく。)やあ、そんなら花魁はそこに聴いてゐたのか。

八橋。掛橋さん、浮橋さん、御苦勞でござんした。治六さんの口からそれだけ聴けばもう澤山、

この上の詮議は要りませぬ。

治六。そんなら花魁と云ひあはせて、わしを拷問にかけたのか。こりやひどい目に逢はされた。(手拭にて汗をふく。)

(下のかたより禿八千代出づ。)

八千代。花魁え。あの榮之丞さんが見えなんした。

八橋。部屋は塞がつてゐるほどに、兎も角もこゝへ通しや。

八千代。あい、あい。(引返してゆく。)

浮橋。そんならわたしは治六さんを連れて……。

掛橋。ほ、ゆつくりとおしげりなさんせ。

浮橋。ほ、馬鹿らしい。治六さん。さあ、ござんせ。(手を取りて引立てる。)

治六。これでやうく窮命をゆるされたか。やれ、やれ。飛んだ目に逢つたものだ。

(治六は浮橋に連れられて出てゆく。)

掛橋。もし、花魁。次郎さんの此頃の様子がどうも腑に落ちぬと思つたので、カマをかけて拷問

したら、根が正直な治六さん、すなほに白状してしまひなした。

八橋。お前も知つてゐる通り、あんまり不實な榮之丞さんの仕方。その面當てに次郎さんを強請

んで、佐野へうけ出されて行かうと思つたが、身代をつぶして江戸へ出て、云はゞ宿無し

同様の身分になつては、たとひ向うから手をつけて頼んでも……。

掛橋。次郎さんに請出される氣はござんせぬか。

八橋。もとく色でも戀でもない次郎さん。佐野の大盡ならば知らぬこと、生れ故郷を立退いて

馬喰町の宿屋住居。わたしをどこへ引取つて行かうとするのやら。

掛橋。それを思へばうっかりと身うけの相談には乗れませぬな。

八橋。積つて見ても知れたことござんす。

(下のかたの奥より廊下傳ひに、榮之丞は禿八千代に袂をひかれて出づ。)

八千代。花魁はこゝに待つてゐなんす。さあ、お這入りなんし。(障子をあける。)

掛橋。(起つてゆく。)お、榮之丞さん。よくお出でなんした。

榮之丞。貧乏暇なしで無沙汰をしました。(内に入る。)

八橋。榮之丞さん。廊へ来る道をよく忘れずにゐなんしたね。

掛橋。はて、顔を見るとすぐにそのやうな……。もし、お前もうっかり立つてゐずと、花魁のそ

ばへ行きなさんせ。

(榮之丞の手を取りて、八橋のそばへ連れてゆく。下のかたの奥より浮橋出づ。)

浮橋。もし、掛橋さん。お部屋の方へ鳥渡來てください。

掛橋。あい、あい。そんなら花魁。榮之丞さんも仲よくしなさんせ。(禿に。)お前も來や。

八千代。あい、あい。

(浮橋と掛橋、八千代の三人は下のかたの奥に入る。)

八橋。さつきの文を見なんしたかえ。

榮之丞。いや、見る間も無しに急いで來た。

八橋。櫻のころから小半年も、碌々顔を見せなかつたお前が、今夜は何でそんなに急いで來なん

した。

榮之丞。さあ、その譯は……。いや、それよりもお前の文、あれは何のわけが書いてあつた。

八橋。さあ、そのわけは……。まあ、わたしよりもお前が先へ云ひなさんせ。

榮之丞。いや、まあお前から先に云へ。

八橋。いえ、お前から……。

榮之丞。いや、おまへから……。

八橋。はて、じれつたい。そんならわたしから云ひます。わたしが先刻遣つた文はおまへと縁を切らうが爲……。

榮之丞。え。

八橋。したが、その文をまだ讀まぬといふが勿怪の幸ひ、封のまゝで戻してくださいませ。

榮之丞。戻したくてもこゝには持つてゐぬ。して、この榮之丞と縁を切らうといふのは……。實生

の家を構はれて、おちぶれ果てた能役者、愛想のつきたも無理ではない。

八橋。たがひに起請をとりかはし、末の末までと約束しながら、この小半年は顔もみせず、文を遣つても返事はなく、あんまり不實なお前の仕方に、寧ろさつぱりと縁を切らうと、腹立ちまぎれに書いたのでござんす。

八橋。

え。
とは云ふものゝ、久振りでかうして逢つて見れば、やつぱりわたしに未練が出て……。

八橋。

え。
可愛いやうな、憎いやうな、自分にもなんだか判らなくなりんした。して、お前が今夜來なんしたは……。

榮之丞。

え。
さあ。實はお前を身うけの相談に來たのだ。

八橋。

え。(すり寄る。)そりやほんたうでござんすかえ。長の浪人をしてゐるお前が、わたしを請出すほどの金を、どこでどう工面して來なんした。

榮之丞。

その金は……。ある人から出してくれることになつた。

八橋。

それほど深切なお人があるなら、お前も今まで斯うしてはるまいに……。 (疑ふやうに。)

榮之丞。

なにを隠さう。その人は……。 (榮之丞は八橋にさゝやく。下の方より次郎左衛門、酒に酔ひたる體にて出で來り、障子のそとにて聞く。)

八橋。

え、そんなら佐野の次郎さんが……。なるほどわたしも一旦は、身請けのことを頼んだれど、佐野の身代をつぶしてしまつて、宿無し同様になつた人に、なんでこの身を任されよう。そんな話はもう止めてくださいな。

榮之丞。

と云つて、今更わしの口からは……。

八橋。

断れずばわたしから好いやうに断りまする。

次郎左。

いや、わざ／＼断るには及ばぬ。

次郎左。

(次郎左衛門は内に入る。二人はおどろく。)

二人。

八橋には詫をいひ、榮之丞どには禮を云はねばならぬ。

次郎左。

え。

先づ八橋に詫をいふ。花魁、どうぞ堪忍してくれ。お前に身うけを頼まれて、今の俺にはそれほどの力がないと、正直に譯をあかせば好いものを、見得を張つて安請合、つまりお前をだましたやうなものだ。さぞ腹も立つだらうが料簡してくれ。さてそれから榮之丞どの。次郎左衛門もよく／＼切羽つまればこそ、云はゞ戀仇のお前さんのところへ、今夜手をさげて頼みに行つたのを、なんと思つたか知らないが、あんまり頼み甲斐のない仕方。

榮之丞。

と恨むはこつちの愚癡かも知れぬが、男づくで頼まれたながら、すぐにこゝへ来て次郎左衛門が身代の棚おろしは、なんとお禮を云つて可いやら。

いや、さう云はれて甚だ迷惑。榮之丞が今夜こゝへまゐつたは、こなたに頼まれた身うけの相談。

次郎左。

なるほど、次郎左衛門、八橋が身請けのことをこなたに確かに頼みました。いや、頼んだに相違ねえ。(聲あらく。)しかし次郎左衛門が佐野の身代をつぶして、宿無し同様の身になつたと云ふことを、このよし原の見得の場所で、しかも八橋の聴く前で吹聴してくれと誰が頼んだ。

(次郎左衛門の聲が次第に高くなるほごに、新造掛橋と浮橋と禿八千代とはぬき足して出て來り、障子のそとにて窺ひある。)

八橋。

もし、次郎さん。お前のやうでもない。かういふ遊びの場所へ來て野暮に大きな聲をしな

次郎左。

花魁はまあ黙つてゐてくれ。おい、榮之丞どん。おまへと八橋とがほんたうの従弟同士であるか無いか、この次郎左衛門は初手からちやんと知つてゐる。それでもおれはお前を憎

いととは思はねえ。吹けば飛びさうな意氣地のねえ男を相手にして、喧嘩をするほどの俺でもねえと、今まで黙つて附合つてゐたのだ。堅氣な百姓の子にうまれながら、若えうちから長脇差のやうな眞似をして、盆の上で命の遣取り、人のふたりや三人は斬つたこともある次郎左衛門、お前のやうなひよろ／＼した青二才を、捻りつぶすのは造作もねえが、赤子の腕をねぢるやうであんまり大人氣ねえと思ふから、なんにも知らねえ顔をして、可愛がつてやれば附上り、よくも人の裏をかいて、くらやみの恥をあかるみへ遠慮會釋もなしに晒け出して、次郎左衛門といふ男の顔を見事につぶして呉んなすつたな。

榮之丞。

さう云はれてはいよ／＼迷惑。なんで手前がこなたの内證事を、うか／＼他人に洩しませうぞ。浪人こそすれ實生榮之丞、男と男が約束した上は……。

次郎左。

やかましい、黙りやあがれ。人なみに男と名乗るなら、さつきおれが頼みに行つた時に、なぜ男らしくきつぱり斷らねえ。おとなしさうな面をして請合ひながら、蔭へまはつて裏をかく。そんな卑怯な男があるか。さあ、男なら男らしく、こゝで俺の相手になれ。

榮之丞。

さりとは無體な。
え、なにが無體だ。(起ちかゝる。)

次郎左。

(掛橋、浮橋、八千代は障子をあけて駈け込む。)

掛橋。

あゝ、もし、次郎さん。

浮橋。

佐野の旦那。

掛橋。

まあ、まあ、静にしてくださいせ。

(三人は次郎左衛門を止める。)

八橋。

榮之丞さんと次郎さんが、いつまでも顔をあはせてゐては面倒。詳しい話はわたしがあとでするほどに、お前達は次郎さんを部屋へ連れて行つてくださんせ。

掛橋。

あい、あい。さあ、次郎さん。わたしたちと一緒に御部屋へござんせ。

次郎左。

思だ、思だ。おれはまだ榮之丞に云分があるのだ。部屋にある酒や肴をみんなこゝへ持つて來い。

浮橋。

お酒が飲みたければ、あちらへ行つてゆる／＼おあがりなさんせ。

八千代。

さあ、早うおいでなんし。(秋をひく。)

次郎左。

え、うるせえ。

(ふり拂へば、禿は倒れてわつと泣き出す。掛橋と浮橋は捨臺詞にて次郎左衛門をなだめて連れ行

かうとする。治六出て来りて窺ひぬたりしむ、この時、障子をあけておづ／＼進み入る。

治六。もし、旦那様。榮之丞さんに科はござりませぬ。佐野の御身代の潰れたことを、ついべらべらと饒舌りましたは、この治六めでござります。

次に、治六。貴様がそれをしやべつたのか。

治六。どうぞ御料簡くださりませ。

次郎左。馬鹿野郎。

(次郎左衛門は、つか／＼寄つて治六の襟髪をつかみ、扇にて打つ。掛橋と浮橋は止める。八橋も起ちあがりて治六を圍ふ。)

八橋。はて、まあ、ちつとお待ちなんし。掛橋さんと浮橋さんに云ひつけて、この治六さんを拷問させ、なにも彼も正直に白状させたは、みんなこの八橋の巧んだこと。榮之丞さんを恨むは筋違ひ、治六さんを叱るは氣の毒、科はみんなわたしにある。さあ、どうでも腹が立つならばその扇の骨の折れるまで、わたしを打つとも叩くとも氣の済むやうにしなさんせ。

次郎左。む。それとも何事も水に流して、料簡して遣つてくださんすか。もし、次郎さん。榮之丞さん

八橋。

をかばつたら、お前はいよく腹も立たうが、おまへの家來をわたしに何の遠慮も氣兼ねもない。さあ、治六さん。そんなにおど／＼してゐすと、旦那殿の前へ手をついてもう一度よくあやまりなさんせ。

治六。あやまつて済むことなら、一度はおろか、百度でも千度でもあやまります。もし、旦那様。どうぞ御料簡くださりませ。

榮之丞。治六どのが正直に名乗つて出たので、手前も面晴れと申すもの。それにつけても御家來の折檻はなにとぞ御勘辨下さるやう、手前も共々におねがひ申す。

八橋。次郎さん。まだ料簡はならぬと云ひなんすのかえ。(次郎左衛門のそばへゆく。)

次郎左。(思案して)む。そんなら折檻はゆるして遣る。その代りに今夜かぎり勘當するからさう思へ。

治六。え、御勘當……。

次郎左。お、ぶち殺しても料簡のならぬえ奴だが、八橋の取りなしで命だけは免してやる。憎い奴だが長年の馴染に十兩の涙金をくれて遣るから、これを持つて早く行け。(紙入れより十兩の金を出す。)

治六。でも、旦那様……。(寄らうとする。)

次郎左。え、うるせえ。(金を治六の顔にうち付ける。どこへでも勝手に行け。)

(治六は泣き伏す。八橋と榮之丞は顔をみあはせる。騒ぎ唄きこゆ。)

—幕—

第二幕

(1)

日本橋馬喰町の宿屋、佐野屋の店、二重屋體の下のかたに土間あり。軒には諸國御旅人宿佐野屋と記せる行燈をかけたなり。二重屋體の上のかたに帳場格子を置きて、壁には宿帳なごをかけたなり。宿屋の左右はやはり町家つゞきの心なり。八月十四日の午後。

(佐野屋の亭主甚兵衛、帳場にて帳面をつけてゐる。下女お竹は店さきに出て芒を買つてゐる。芒賣平吉はすゞきの荷をおろしてゐる。館屋の鳴物きこゆ。)

平吉。へい、ありがたうございます。一束十六文。(芒を出す。)

お竹。え、十六文……。随分高くなりましたね。

甚兵衛。(帳場より聲をかける。)なに、十六文だと……。待て、待て。(店さきへ出る。)おい、芒屋さん。

なんぼお月見の際物だと云つて、そこらの野つ原から唯折つて来た芒を、一把十六文とは……。あんまり冥利に外れたことをしないが可いぜ。

平吉。冗談云つちやあいけません。これでも市で仕入れて来て、もとのかゝつた代物です。ことは減法界に相場があがつてゐるので、賣りにくゝつて困ります。

甚兵衛。賣りにくければ遠慮なく負けるが可い。おれの家では芒一把が六文と先祖代々から相場がきまつてゐるのだ。

平吉。だつて、唯の六文ぢやあ元値が切れますから、せめて十二文に買つてください。

お竹。そんなことを云はないで、せめて十文ぐらゐに負けて置きなさいよ。

甚兵衛。それで忌なら止す分のことだ。あしたの晩までにはまだ大勢の芒賣が来るから、無理に賣つてくれと云やあしない。

平吉。さう云はれると困ります。ぢやあ、仕方がない。まだ口明けですから十文にまけて置きま

せう。

甚兵衛。やれ、やれ、十文に負けるといふのか。お竹がつまらない口を出したので、六文のすゝきを十文で買ふことになつてしまつた。なるだけ大束を擇つて、三把ばかり置いて行くが可い。
(甚兵衛は帳場より三十文の錢を持ち出して来る。このうちに下のかたより下男治六出て来りて見てゐる。)

治六。なるほど、江戸といふところは偉いところだ。わし等の在所へ行つたら、こんな世は一文でも錢を出すものはあるめえが、たつた一把で十文とは、まるで唯取るやうなものだ。
(あざ笑ふ。)そこがお江戸のありがたいところだ。野良で田の草を取つてゐるお前達に、江戸の際物の相場がわかつて埒るものか。(甚兵衛より錢をうけ取る。)あい、三把で三十文、お

平吉。廉いものでございます。世や、世……。呼びながら下のかたに去る。
お、治六さん、來なすつたか。まあ、こちらへ這入んなさるが可い。

治六。毎度お邪魔にあがります。(店に腰をかける。)

(お竹はすゝきを持ちて奥に入る。)

治六。旦那様はその後お變りはござりませんか。

甚兵衛。おまへの旦那に變りはない。しかし治六さん。旦那もこのごろは懐がよほど詰つて來たらしいよ。

治六。(考へる。)でも、まだ四五百兩はたしかに持つてゐられた筈だが……。どうして一月と経たないうちに……。

甚兵衛。お前が暇を出された頃から、いよく自棄になつたとみえて、一晩に四五兩づつも撒き散らしてゐるといふ噂だから、四百兩や五百兩は十日と持つまい。と云つて、今更意見を

治六。困つたものでござりますなあ。(嘆息をつく。)

甚兵衛。さうして、お前さんはこのごろ何うしてゐなさる。まだ奉公口は見付からないのかね。

治六。御存じの通り先月の末、吉原通ひのお供をして行つたときに、餘計なおしやべりをしたばかりに、旦那さまの御機嫌を損じ、長のお暇となりましたが、兒飼からお世話になつた旦那様をふりすて、今更ほかへ奉公しようとも思ひませぬ。

甚兵衛。この家へ置いてあげても可いが、それでは旦那に面あてらしく、却つてお詫の邪魔にもならうかと、わたしが近所の同商賣の家へ世話をして、まあ手傳ひ半分厄介になつてゐ

ることにしてあるが、お前もわかい身空で、いつまでもさうしてもゐられまいから、なんとか早く身の振方をつけたら何うだね。

治六。

御深切に色々ありがたうござりますが、唯今も申す通り、たとひ御勘當を受けましても、わたくしの方ではやつぱり旦那様を一生の御主人様と思つて居りますから、あすが日にどんなよい奉公口がござりましても、別の御主人を持つ氣はござりません。御勘當の赦りますまでは、いつまでもかうして辛抱して居ります心、どうぞお察しく下さい。

甚兵衛。

なるほどお前の氣性では、それも無理もないことだが、お前がそれほどに思つてゐる御主人も、今の分では行末どうなることやら。

(治六は黙つて眼をふいてゐる。甚兵衛も氣の毒さうに嘆息する。上のかたより次郎左衛門は宿の貸下駄をはき、ぬれ手拭をさげて出づ。)

甚兵衛。

お、お歸りなさいましたか。

次郎左。

髪結床へ行つたついでに、町の錢湯へ這入つて來ました。

(入口の土間に入りて下駄をぬぐ。治六はおづ／＼とあとへさがりて頭を下げる。次郎左衛門は見かへりもせず亭主に話しかける。)

次郎左。

芒賣の聲が大分きこえますな。

甚兵衛。

わたくしの家でも今買ひました。

次郎左。

あしたの十五夜は雨らしい。

甚兵衛。

(ひとり言のやうに云ひて、奥に入る。治六は顔をあげてそのあとをちつと見送る。)
旦那が今の口ぶりでは、あしたのお月見も屹と約束が出來てゐるに相違ないぜ。

治六。

そんなことでござりませうな。(また嘆息をつく。)

(下のかたより刀屋の頭七、風呂敷につゝみたる刀を持ち出て出づ。)

勘七。

今日は……。なんだかお天氣が陰つて來ました。

甚兵衛。

お、刀屋の番頭さんか。まあ、こつちへお上んなさい。

勘七。

ごめん下さい。(店に腰をかける。)早速ですが、こちらのお客の次郎左衛門さんといふ人は、

けふも内にゐますかえ。

甚兵衛。

丁度いま髪結床から歸つて來ましたよ。どうです、刀の賣口は……。

勘七。

折角お前さんの口入れですから、心あたりを四五軒聞きあはせてあげましたが、どうも御

縁がないのでねえ。いや、代物は決して悪いのぢやあない。(風呂敷より籠釣瓶の刀を出してみ

せる。作は名作、望み手さへあれば百兩が二百兩でも決して高い品ぢやあないが、なにぶんにも銘が面白くないのでねえ。(首をかしげる。)

甚兵衛。わたしには何にもわからないが、なんでも銘は村正だとか云ふことだが……。

勘七。その村正がいけないのだ。

治六。(思はずのぞく。)え、村正……。そんならもしや旦那様が……。

勘七。え、びつくりした。お前さんはどこの人だ。

治六。はい、眞平御めん下さいますし。

(治六は頭を下げる。勘七は刀を風呂敷につむ。甚兵衛は氣の毒さうに治六を見かへる。すゝき賣る聲遠くきこゆ。)

(II)

佐野屋の二階、次郎左衛門の座敷。平舞臺にて、上のかたに粗末なる床の間ありて、空の花瓶を置いてあり。床の間についで戸棚あり。下のかたには出入りの障子、その外は廊下にて、階子の

あがり口あり。

(次郎左衛門は古びたる角火鉢のまへに坐りて煙草をのんでゐる。火鉢のそばには古びたる薬籠と茶道具などあり。下女お竹は階子をあがりて出づ。)

お竹。御免くださいまし。(障子をあける。)あの、刀屋さんがまゐりました。

次郎左。お、刀屋が来た。すぐにこゝへ通してください。

お竹。はい、はい。(立去る。)

次郎左。宿の亭主にたのんで、籠釣瓶を刀屋へみせて貰ひに遣つたが、けふでもう三日目、いい買手が見付かつたかな。

(刀屋の番頭勘七は階子をあがりて出づ。)

勘七。こちらの御座敷でございますか。

次郎左。さあ、おつと這入つてください。

勘七。御免くださいまし。(座敷に入る。)初めまして、わたくしは日蔭町の刀屋の番頭勘七と申すものでございます。

次郎左。お忙がしいところを御苦勞でした。して、刀は好い買手がありましたか。

勘七。(頭をかく)さあ、それでございます。今も御亭主と話しましたことですが、作は土作、たしかに業物には相違ないのでございますが、なにぶんにも打手が面白くございませぬので……。(又もや風呂敷をあげて刀を出す)これは村正でございますな。

次郎左。いかにも作は村正、それは初めに断つてある筈だ。

勘七。御承知でもございませうが、なにぶんにも村正と申しますと、むかしから不祥な品と云ひ傳へられて居りますので……。

次郎左。村正は血をみねば納まらぬとか云ふ。實はわたしも若いときから喧嘩好きで、故郷の佐野にゐた時に、二三人の人を斬つたことがある。

勘七。(薄氣味悪さうに)へえ。

次郎左。では、その刀が村正の作であるによつて、買手がないと云はれるのか。

勘七。正直のところ、どこへまゐつても嫌はれますので……。

次郎左。それは御世話でござつた。

(刀をこれへ出せといふ。勘七はすゝみ寄つて刀をわたす。)

次郎左。これほどの名作を買手がいないとは……。いや、不祥の品とあれば是非がござらぬ。この村

正は身にもかへがたい秘藏の刀なれど、時の用には鼻を殺ぐといふ譬もあれば、思ひ切つて手放さうと思ひましたが、不祥の品と嫌はれて買手がなければ……。(かんがへる)いや、いや、どうしても金がある。惜いは山々なれど賣らねばならぬ。(勘七の前に刀をつき付ける。)

これほどの名作を誰も買はぬといふは不思議。こなたを疑ふではないが、ほんたうに方々を聞きあはせて下されたのか。

(迷惑する。)まつたく心當りの御屋敷を四五軒聞きあはせたのでございますが、値段は二

の次として何分にも打手が……。

(じれる)いや、それはわかつてゐる。世間に買手がいないならば、こなたの店で引取つては下さるまいか。

勘七。(考へる)それは手前の店でお引取り申してもよろしうございますが、くどくも申す通り、右から左に買手のつかない代物でございますから、手前の方でも當分は寝かして置くつもりでなければなりませんので……。

次郎左。それも判つた。當分は寝かして置かなければならないから、その金利を見積つて安く賣れといふのであらう。いや、それもよく判りました。して、幾らに引取つてくださるな。

勘七。(狡さうな眼をして相手を見る。)さあ、半年も一年も寝かして置くのを承知の上で、手前ども
でお引取り申すとなりますると、左様……。 (また考へる。) 先づ三十金ぐらゐのところでご
さいませうか。

次郎左。え、三十金……。三十兩……。たつた三十兩……。

勘七。御相談はとゞきませんか。

(次郎左衛門はだまつて大息をついてゐる。)

勘七。では、手前の一存で、もう十兩……。その上は逆も御相談にはなりません。

次郎左。四十兩……。たつた四十兩……。 (かんがへる。) いや、わたしはどうしても金がほしい。廉やす
ものだが四十兩でこの村正を手放しませう。

勘七。御手放しになりますか。

次郎左。(思ひ切つて。) 賣りませう。して、その金はいつ渡して下さる。

勘七。お急ぎでございませうか。

次郎左。大急ぎだ。今すぐにも渡して貰ひたい。

勘七。では、ほか様へ持つて出ます金を、お立替へ申して置きませう。(懐中の財布より四十兩をか
か

ぞへ出して、紙の上ののせて出す。) こゝに四十兩 一應おあらため下さいまし。

次郎左。おゝ。(あわてゝ掻きよせる。) たしかに受取りました。(金を數へてゐる。)

勘七。恐れ入りますが、念のために受取の一札をちよいとお認めくださいませ。

次郎左。承知しました。

(次郎左衛門は起つて床の間より硯箱を持ち來り、ふところより紙を出して受取の一札を書きかけ
て、ちつと考へてゐる。八つの鐘きこゆ。)

勘七。(待侘しげに。) あの、わたくしはこれから浅草の御屋敷へまゐらなければなりませんから、
どうぞお早く願ひます。なに、ほんの一筆でよろしうございます。

次郎左。(まだ考へてゐる。) いや、この一札は書きますまい。

勘七。え。

次郎左。折角ながらこの賣買ひは破談にします。

勘七。(おどろく。) へえ。では、破談にすると仰しやいますか。

次郎左。どうもこれは賣りたくない。

勘七。折角これまで御相談が運びましたのに、急に變換へと仰つやいますは……。やはり御値段

籠 釣 瓶

次郎左。が御意に入りませぬのですか。

いや、値段は兎も角も……。たとひこの刀を五十兩百兩に買つてやると云はれても、やはりこれは賣りたくない。(金を戻す。)お氣の毒だが破談にします。

(勘七は、えゝなんのことだと面をふくらせる。)

勘七。へえ、左様でございますか。もとく賣物買物でございますから、お前さんの方で賣らぬとあれば、わたくしの方で無理にといふ譯にもまゐりますまい。

次郎左。まことにお氣の毒だが、歸つてください。

勘七。歸るなど云つても歸らずにはゐられまん。おかげで、飛んだ暇つぶしをしました。

(勘七は不平らしい顔をして、碌々に挨拶もせず障子の外に出る。)

勘七。へん、馬鹿なことがあるものだ。このごろの百姓には油断がならねえ。

(勘七は早々に階子を降りてゆく。次郎左衛門は矢はりちつと考へてゐる。)

次郎左。この刀はめつたに賣られぬ。(刀をひきよせて抜いて見る。)千手院村正が腕の沓え……。(焼刃をちつと眺める。)

これで斬つたら水もたまらぬと云ひつたへて、籠釣瓶といふ銘を打つたる希代の業物。どうしてこれが手放されようぞ。切羽つまつてこの刀を金に換へようと思つ

たが、多寡が五十兩か八十兩、廓でばらくまき散らしたら、一日か二日でなんにも残らぬ。(さびしく笑ひながら、かたなを鞘に納める。)と云つて、こゝに幾らかの金がなければ、八橋の身請けどころか、顔を見ることがもう出来まい。もう一度あの刀屋をよび返して……。 (あわてゝ起つて入口の障子をあけて、また立停まる。)

いや、いや、この刀は手放されぬ。と云つて、八橋にももう逢はれぬ。刀を持つたるまゝにてべつたり坐る。たとひこの刀を賣つたところで、その金が無くなればやつぱり八橋には逢はれまい。刀も可愛い。(かたなを抱く。)

八橋も戀しい。(また起ち上りて階子のあがり口より下をのぞく。)

おゝ、刀屋はもう歸つたか。(刀を抱へたまゝにて内に入り、再び坐る。)

今の次郎左衛門が大事のものは、あの八橋と……。この籠釣瓶……。いつまでも二つをはなさぬ思案は……。 (眼のひかり次第に鋭くなる。)

この刀で八橋を殺して、この刀でおれが自害すれば……。女も……。刀も……。一緒にかゝへて死ぬる……。刀は名作、次郎左衛門の腕にもおぼえがある。しかし俺にあの八橋が思ひ切つて斬れるかな。

(次郎左衛門は再び刀をぬきてちつとながめる。治六はそろくど階子をあがりて出で、障子の外よりそつと聲をかける。)

治六。

旦那様。

次郎左。

(刀をかくす。)誰だ。

治六。

治六めでござります。

治六。

旦那様。

(次郎左衛門はかたなを鞘に納めて、黙つてゐる。治六はそつと障子をあける。)

治六。

(次郎左衛門は黙つてゐる。)

御立腹は重々御もつともでござりますが、このあひだの晩よし原でうか／＼おしやべりを致しましたは、わたくしが一生の仕損じでござります。どうか幾重にも御勘辨を願ひたう存じます。

(次郎左衛門は答へず、何かちつと考へてゐる。治六はおづ／＼と座敷の中へゐざり入る。)

治六。

もし、旦那様。おねがひでござります。どうぞ御料簡くださりますやうに……。

次郎左。

え、うるさい。黙つてゐる。(猶もちつとかんがへてゐる。)

(亭主甚兵衛も階子をあがり來りて窺ひのたりしが、この時すつと座敷に入る。)

甚兵衛。

佐野の旦那。治六さんもあんなに云つてゐますから、どうか御勘辨を願へますまいか。

次郎左。

(ふり向く)お、御亭主。こなたも治六の詫言に來なすつたか。(治六を見て。)三日にあげず尋ねて來て、なんの彼のとうるさい奴。もう打捨つて置いてください。

甚兵衛。

成程こなたは煩さからうが、治六さんの方では一生懸命。今もわたしが意見して、いつそほかの奉公口を探したらよからうと云つて聞かせましたが、たとひ御勘當を受けたにしても、わたくしの方ではやつぱり旦那様を、一生の御主人さまと思つてゐると……。あんまり可愛い志に、わたしも思はず涙がこぼれました。(眼をふく。)もし、旦那。くだいやうなれどわたしに免じて、今度のところだけは何うぞ料簡して遣つてくださいませ。馬喰町の旅籠屋仲間でも、膽煎と云はれる佐野屋の甚兵衛が、この通り手についておたのみ申しませ。これ、治六さん。もつと前へ出てよく御詫をしなさい。

治六。

眞平御めん下さいまし。

(ふたりを手をついて詫る。)

次郎左。

(思案して)御亭主までがそれほどに口をきいて下さるものを、いつまでむづかしく云つてもゐられますまい。よろしうございます、今度だけは堪忍して遣りませう。

甚兵衛。

では、堪忍して遣つてくださるか。さあ、さあ、治六さん。よくお禮を云ひなさい。わた

しもこれで安心した。

治六。はい、はい、ありがたうござりました。(更に次郎左衛門の前に出て再び手をつく。)旦那様、重
重ありがたうござりました。これからは屹と氣をつけまして、二度と粗相のないやうにい
たします。

甚兵衛。

まあ、まあ、これでよかつた、よかつた。では、旦那。とんだお邪魔をいたしました。治
六さん。さう決つたら善は急げだ。すぐにお前の宿へ歸つて、自分の荷物を取つて來な
るが可い。

治六。

はい、はい。
(治六はいそ／＼して出ようとすを、次郎左衛門は呼び止める。)

次郎左。

治六。待て、待て。

治六。

はい、はい。

次郎左。

おまへには少し用がある。

治六。

はい。

甚兵衛。

そんならお前はこゝにゐて、旦那の御用をきくがよからう。では、御めん下さいまし。

甚兵衛。

(甚兵衛は障子のそとへ出る。治六は追ひ來りてその袂をひき、無言にて手をあはせる。)

治六。

はい。

(甚兵衛は階子を降りてゆく。治六は見送りに、そつと座敷に歸る。日ぐらしの聲きこゆ。)

次郎左。

おゝ、庭の柳に日ぐらしが鳴く。さつき鳴つたのは八つであつたな。

治六。

はい。

朝夕はよほど詰つたといふが、それでも八月の日はまだ長いな。(肩をたたく。)

治六。

お肩が凝りますか。

次郎左。

すこし按摩を頼まうか。

治六。

はい、はい。

(治六は嬉しさに主人のうしろへ廻り、手拭を片襷にかけて肩をたたく。)

次郎左。

早速だが、治六。おまへに少し頼みたいことがある。大儀でも佐野まで行つて來てくれま
いか。

治六。

お國の方にどうぞ御用でござりますか。

次郎左。實は二三日前から毎晩悪い夢をみる。

治六。はい。

次郎左。どうもそれが氣になつてならぬ。叔父か妹か、又はほかの親類のうちに何か變つたことでもないかと、毎日心配してゐるのだ。

治六。新家の叔父御様も妹御様も、ふだんからあんなに御達者でござりますから、よもやそんなことはござりませぬ。

次郎左。とは思ふが、人は生身だ。いつ何時どんな病煩ひがないとも限らず、どんな災難に逢はぬとも云へない。おれがこれから手紙を書くから、あしたにも江戸を立つて、兎もかくも在所へ一度行つて見てくれ。親ゆづりの身代をつぶして二度と故郷へ足踏みはできない身の上だが、それでも肉身の叔父や妹のことは、かうしてゐても案じられる。

治六。ごもつともでござります。(眼をふく。)

次郎左。どうだ。行つてくれないか。

治六。はい、まゐります。だん／＼お話をうかどひますと、わたくしも何だか氣がかりになつてまゐりました。新家の叔父御様には、わたくしも子供のときから色々御世話になりました。

次郎左。新家の叔父はおまへを可愛がつてゐたな。(云ひながら茶を注がうとする。)

治六。(肩越しにのぞく。)お、お茶がもう出なくなりました。

(治六は按摩をやめて、土瓶の茶を入れかへる。)

治六。今度お國を出ますときにも叔父御様はわたくしを竊とお呼びなされました、これ治六よ、今度次郎左衛門が江戸へ出るについて、一緒にゆくものは自分の影法師と千兩の金と、そのほかには治六、われ一人だ。影法師はなんの役にも立たねえ。千兩の金は遣へばなくなる。遣ひ減りのしねえのはわればかりだ。どこが何處までも次郎左衛門の影身に添うて、どうぞ面倒をみて遣つてくれと、手を下げねえばかりにしてお頼みなされました。(眼をふく。)叔父御様の方でもそれほど、旦那様のことを心配しておいでなされるからは、お前様の方でも叔父御様のことを御心配なさるのは御もつともで、わたくしもよくお察し申してをります。さう云ふことなら明日と云はずに、これからすぐに支度をして、一刻も早く立ちませう。

次郎左。氣の早い奴だ。これからすぐに立つか。

治六。まだ日が高うござりますから、日一ぱいには二里や三里は踏み出されませぬ。急ぎの道中は

一と宿でも先へ越すのが勝でござりますから、これからすぐに宿へ戻りまして、旅拵へを
してまわります。

次郎左。そんなら急いで行つてくれ。おまへが支度をして来るあひだに、おれも手紙を
書いて置かうよ。

治六。では、すぐにまわります。へちかけて又戻つて来る。且那様。

次郎左。なんだ。

治六。先月御勘當を受けましたときに、頂戴いたしました十兩のお金は、まだ一文も遣はずに、
つかりと肌につけて居りました。胴巻より紙につみたる十兩を出す。斯うしてお詫がかなひ
ました上は、このまゝお返し申します。どうぞお納め下さいまし。

次郎左。一度おまへに遣つた金だ。返して貰ふには及ばないから、それを路用にして立つが可い。

治六。路用はゆきかへりで二分もあれば澤山でござります。道中をするわたくしよりも、江戸に
残つておいでなさるお前様の方が、なにかにつけて御不自由。このうちから二分だけを頂
きまして、あとはお返し申します。

次郎左。それほど云ふなら受取つて、おまへの歸つてくるまでは、宿の亭主にあづけて置かうよ。

治六。且那様。決してくどくは申しませぬが、わたくしがお國から歸つてまわりますまでは、ど
うぞよし原へ足踏みは……。

次郎左。(次郎左衛門の顔をみる。次郎左衛門もぢつとなつて首肯く。)

國許に變つたことがあるか無いか、それがはつきり知れるまでは、おれも當分慎んでゐる
ぞ。

治六。なにぶんお願ひ申します。では、又うかどひます。

(治六は會釋して階子を降りてゆく。)

次郎左。いよくかうと覺悟したら、國許の叔父や妹にせめて一筆書いてやりたさに、誰か使を
と思ふところへ、丁度治六がわびに來た。(硯の墨をする。) 彼奴はふだんから正直者。なん
にも知らずに書置を……。

次郎左。(お竹は芒を持ち出て、障子をあける。)

お竹。(おどろきて振向く。) お、芒を持つて來たのか。

床の間のお花を持つてまわりました。

(お竹は花活を持出して芒を活ける。次郎左衛門は手紙を書きはじめる。日ぐらしの聲。)

(三)

もとの店先。

(下男權作は店さきに水を打つてゐる。下女お辻は箒を持って立つ。)

お辻。

權作さん。水をまくのはお止しよ。

權作。

だつて、お前。掃いたあとへ水をまくのは天下一統のお定まりだ。

お辻。

仕様がなないねえ。

(權作はお辻の足もとへ水をまく。お辻は土間の方へ逃げてゆく。奥より甚兵衛出づ。)

甚兵衛。

やい、やい、馬鹿野郎。今にも降つて來さうな空を見ながら、水をまく奴があるものか。

眼をあいて上を見ろ。

權作。

はあ、降つて來るかね。

甚兵衛。

もうぼつ／＼遣つて來てゐるぢやあねえか。

權作。

(顔をなでる。)なるほど顔が些と冷てえやうだ。

お辻。

お前が強情だから叱られるんだよ。

甚兵衛。

早く臺所へ行つて、夕焚きの支度でもしろ。お辻も水を汲み込んでおけ。

二人。

あい、あい。

(ふたりは土間の奥に入る。)

甚兵衛。

あゝ、世話のやけた奴等だな。それにしても、あの治六どんは、いつの間にか歸つたやう

だが、宿へ荷物でも取りに行つたかな。あの男も忠義者だから、詫がかなつた時には手を

あはせて俺を拜んでゐた。いや、可愛い男だ。

(旅人ふたり出る。)

旅人甲。

馬喰町の佐野屋はこちらかね。

甚兵衛。

左様でございます。

旅人乙。

程ヶ谷の相模屋から差手紙を持って來ました。

甚兵衛。

はい、はい。これはお早いお着きでございます。おい、お竹や、お辻や。早くおすゝぎ

の水を持って來いよ。

二人。 あい、あい。

(お竹とお辻は盥を持つて出づ。)

二人。 お疲れでございませう、

(旅人三人、夫婦連れと供の男の體にて出づ。)

男。 佐野屋はこちらですか。

甚兵衛。

はい、はい。どうぞお這入り下さいませし。(店さきに立つて世話を焼く。) さあ、御家來さん御苦勞、その荷物はこちらへ受取りませう。これ、お竹、盥を早く持つて來い。なに、お座敷……。それは今おれが御案内する。なんでも可いから早くおすゝぎを汲んで來い。

(二組の旅人は草鞋をぬぎて足を洗ふ。甚兵衛は捨臺詞にて世辭を云つてゐる。下のかたより治六は旅支度にて出づ。)

治六。 御亭主さん。

これは入らつしやいませし。今日はどなたもお早いお着きでございます。おい、おい、なにをぼんやりしてゐるのだ。こゝにもおすゝぎの水が要るぞ。はい、はい、どうぞ先づお掛け下さいませし。

甚兵衛。

治六。

(呆れる。) いや、わたくしはお客ではござりませんよ。

甚兵衛。

え。なんだ、治六さんか。そんな風をしてゐるから、わたしはお泊りのお客様かと思つた。

(下女に。) これ、これ、お竹や。先客のおふたりさんは表二階の角のお座敷へ御案内申せ。

(治六に。) むゝ。さうして急にどこへ行くことになりました。(下女に。) これ、これ、お辻や。

あとのお三人さんは裏二階の八疊へ……可いか。わかつたか。治六に。) え、どこへ行きな

さるのだ。

治六。

旦那様のお使で、急にお國へお飛脚にまゐることになりました。

甚兵衛。

むゝ、お國へ行きなさるのか。道中は氣をつけて行きなさるが可い。

治六。

ありがとうございます。

(お竹とお辻は捨臺詞にて二組の旅人を奥へ案内してゆく。これと入れ違ひに次郎左衛門は奥より出づ。)

次郎左。

おゝ、治六。もう來たか。では、この手紙をたのんだぞ。

(手紙をわたせば、治六はうけ取る。)

治六。

たしかにおあづかり申しました。では、すぐに出立いたします。

籠釣瓶

次郎左。あんまり急いで夜道をするなよ。戸田の河原は物騒だぞ。

治六。はい。では、旦那様、御亭主さん。

甚兵衛。日中はまだ暑いから用心しなさい。

治六。色々ありがとうございました。

甚兵衛。あいにくに空模様が可怪くなつて来た。

治六。なに、大したこともござりませぬ。

(治六は足早に向うに去る。次郎左衛門はちつとあとを見送る。うすく雨の音きこゆ。)

—幕—

第三幕

(一)

よし原仲の町の引手茶屋、立花屋の店さき。二重屋にて、上のかたに階子のおがり口あり。軒さ

きに柳あり。店のまへに床几二脚を置く。下のかたは江戸町の遠見。八月十五日の朝。

(新造岩浪 かむろ小浪のふたりは床几に腰をかけて居睡りをしてゐる。下のかたより駕籠屋傳八 出づ。)

傳八。こつちのお客は早歸りだと云ふから、大門のあくのを待兼ねて来たが、お客はもう茶屋へ

歸つたのかしら。おい、おい。禿さん、新造衆。おゝ、おゝ。

(ゆり起されて、二人は飛び起きる。)

小浪。(大きな聲で)あい、あい。

傳八。え、頓狂な聲を出さず。お客はまだかえ。

岩浪。いゝえ、もうお茶屋に戻つてゐなんす。

(頭巾をかぶりたる客ひとり女中お清に送られて二階を降り来る。)

お清。岩浪さん。お客さんをおたのみ申しますよ。

岩浪。あい、あい。(眼をこすりながら)さあ、お送り申ませう。

お清。お駕籠さんも頼みますよ。

傳八。さあ、お出でなさいまし。

お清。

御機嫌よろしう。

(傳八は先に立ち、客は岩浪と小浪とに送られて下のかたに入る。)

お清。

坊主頭に頭巾をかぶつて、お醫者のやうな風をしてゐるが、きつと上野か淺草か、お寺さんに違ひないねえ。

(女房お藤、奥より出づ。)

お藤。

お客様はもうお歸りかえ。

お清。

はい。今お立ちになりました。(空をみる。) おかみさん。いゝ鹽梅にお天氣になりさうですね。

お藤。

さあ。まだなんだか覺束ないやうだが、今夜のお月見は降らしたくないもんだね。降つて來たら又引つ込めるとして、兎もかくも敷物を出して置いたらよからう。

お清。

あい、あい。(奥に入る。)

(江戸町のかたより寶生榮之丞出づ。あとより新造浮橋が追ひ來る。)

浮橋。

もし、榮之丞さん。お待ちなんし。けふは直すといふ約束ではござんせぬか。

榮之丞。

いや、ゆうべはさう云つたが、急に用事を思ひ出したから、今朝はこのまゝ歸るとしよう。

八橋にもよくさう云つてくれ。

浮橋。

いえ、いえ、花魁の知らない間に、うつかりお前を歸したら、あとでどのやうに叱られようも知れぬ。まあ、兎もかくも一度戻つてくださんせ。

榮之丞。

はて、わしは少し用がある。(上のかたへ行かうとする。)

浮橋。

(ひき戻す。用があるならその譯を花魁によく話してから歸りなさんせ。)

榮之丞。

あとで云へばわかることだ。

浮橋。

それではわたしの役目が濟まぬ。もう一度歸つてくださんせ。はて、情の強い。

(ふたりは争ひながら茶屋のまへに來る。)

お藤。

(出る。) 榮之丞様、もうお歸りでござりますか。今も聞いてゐれば花魁に斷りなしに歸るとやら。そんな悪いことをなされますな。まあ兎も角ももう一度兵庫屋へお歸りなされませ。

榮之丞。

こなたまでがそのやうに止めるのか。さりとは迷惑。わしはどうしても歸らねばならぬ譯があるのだ。

(このうちに女中お清とお染は毛氈を持ち來りて床几に敷く。)

お清。

榮之丞様も浮橋さんも……。

お染。

まあこゝへおかけなされませ。

(榮之丞は餘儀なく床几に腰をかける。)

お藤。

これは一體どうしたと云ふのでござります。なにか花魁と喧嘩でもなされたか。

榮之丞。

いや、決してそんなわけでもない。かうなれば何も彼も正直にいふが、八橋の客の次郎左衛門、あの男がゆうべから来てゐる。

お藤。

八橋さんの花魁にあのお客のあることは、おまへも疾うから御存じではござりませぬか。

お藤。

それを今更むづかしく……。

榮之丞。

別にむづかしく云ふのでないが、あの次郎左衛門は先月の末、わしに八橋の身うけを頼んだ。

お藤。

あれ、お前様に花魁の身うけを……。

榮之丞。

たのまれて受合つたが、肝心の八橋がどうしても不承知。次郎左衛門ももう佐野の身代をつぶして、馬喰町の宿屋住居。あるたけの金を遣つてしまつたら、乞食をするよりほかはないと、見切りをつけて取合はぬので、仲に立つたわしは迷惑。ゆうべも廊下で次郎左衛

お藤。

門にゆき逢うたら、なんにも云はずに怖い眼でぢろりと睨まれた。

お藤。

はて、臆病な。次郎さんがお前をどうしませうぞ。そんなことを云はずにもう一度戻つて

お藤。

くださいませ。

榮之丞。

忌だ、いやだ。どう考へてもあの次郎左衛門といふ男はおそろしい。今になにをするかも知れぬ。兎も角もわしは歸る。

お清。

(起ち上るをみなく支へる。そのうちにお清は江戸町の方を見る。)

榮之丞。

あれ、あれ、佐野のお大盡が掛橋さんに送られて……。

お清。

なに、次郎左衛門がこゝへ来る。顔をあはせては又面倒、奥にかくれて遣り過すとしてしようか。

お藤。

(榮之丞は早々に立花屋の奥に入る。下の方より次郎左衛門は、新造掛橋と禿八千代に送られて出づ。)

掛橋。

また細かい雨が降つて来たやうでござんすな。

次郎左。

寝足らぬ顔に冷たい雨がはら〜とかゝるのは心持のいゝものだ。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お藤。

もうお歸りでござりますか。

お清。まあ、おかけなされませ。

(次郎左衛門は床几にかける。)

掛橋。花魁はなにをしてゐることやら。浮橋さん。ちよいと見て来てくださんせ。

浮橋。あい、あい。(八千代に。)お前もおいで。

八千代。あい、あい。

(浮橋と八千代は去る。お清とお染は茶と煙草盆など持ち來る。)

お藤。お前たちは二階へ行つて、御酒の支度を……。

二人。はい、はい。

(お染は奥に入り、お清は二階にあがる。)

お藤。お大盡はお顔の色がよくないやうな。御氣分でも悪いのでござりますか。

次郎左。なに、ゆうべ些と飲み過ぎたせゐであらう。茶よりも櫻湯を一ぱい貰ひたい。

お藤。かしこまりました。(奥に入る。)

次郎左。八橋はまだ見えぬか。おれはもうすぐに歸ると云つてくれ。

掛橋。では、すぐに呼んで來ますほどに、それまで待つてゐておくんなんし。

次郎左。

(次郎左衛門うなづく。掛橋は下のかたに入る。)

あゝ、やつとほんたうの一人になつた。一旦は覺悟して來たものゝ、八橋の顔を見ると、張りつめてゐる氣が弛んで……。おまけに傍には大勢の女どもや太鼓持などがわやく云ふ。そのさうくしい中にゐて、ゆうべ一夜の俺のさびしさ。おなじ寂しい思ひをするなら、いつそ俺ひとりの方がよつぽど優しだ。

(二階よりお清降り來る。)

お清。どうぞお二階へお出でくださいまし。

次郎左。いや、八橋の來るまでこゝに待つてゐよう。これ、わたしがあづけて置いた刀を持つて來てくれ。

お清。はい、はい。(奥に入る。)

次郎左。治六めは今頃どこまで行つたか。なんにも知らずに……。へさびしく笑ふ。)どうかんがへても、八橋と籠釣瓶とこの次郎左衛門と、三つを死ぬまで結びつけて放すまいとするには、籠釣瓶で八橋を斬つて、その刀をかゝへて俺が死ぬ。それよりほかに仕様はない。しかしあの八橋の美しい顔を見ては……。いざといふ時におれの腕が鈍らねばいゝが……。ひと

思ひにすつぱりと……。それが思ふやうに斬れ、ば可いが……。え、おれはどうしてこんな弱い男になつたか。

お清。

(奥より刀を持ち来る。)お腰の物はこれでござりましたな。

次郎左。

お、これだ、これだ。(うけ取る。)八橋はなにをしてゐるか。わたしは少し歸りを急ぐから、氣の毒でももう一度催促して来てくれまいか。

お清。

はい、はい。

次郎左。

(苛々して。)早く、早く……。

お清。

はい、はい。

次郎左。

(お清は早々に下のかたの奥に入る。次郎左衛門は刀を手に持ちてながめる。)

さあ。籠釣瓶はこゝにある。(刀をすこし抜いてみる。)おれの腕で多寡がかほそい女ひとり、籠釣瓶の水もたまらず……。もうこの上は思ひ切りが肝心だ。む、思ひ切つて……。どうでも今日は過されぬ。

次郎左。

(次郎左衛門は刀を腰にさしながら、奥に向つて又あわたとしく呼ぶ。)

おい、おい。誰かゐないか。早く、早く……。 (手をたたく。)

お染。

(奥よりお染は徳利を持ちて出づ。)

次郎左。

はい、はい。お爛ならばもう出来ました。どうぞお二階へおあがり下さりませ。

お染。

いや、酒の催促ではない。おかみさんにたのんで置いた櫻湯を早く、早く……。

次郎左。

はい、はい。(奥に入る。)

次郎左。

酔ぎめのせぬか、それとも逆せて来たのか。むやみに喉が渴いてならぬ。

お藤。

(起つて奥へ行かうとするところへ、お藤は櫻湯の茶碗を盆にのせて出づ。)

次郎左。

どうもお待たせ申しました。

お藤。

(次郎左衛門は無言にて茶碗を引つたり、一息にぐつと飲む。)

次郎左。

もう一杯貰ひたい。

お藤。

はい、はい。(再び奥に入る。)

次郎左。

(再び床几にかへる。)え、八橋はまだみえぬか。よもや俺の料簡を覺つたわけでもあるまいに……。

(又もや床几を起つて下の方へゆく時、下のかたより按摩長悦の杖をついて出で、次郎左衛門に突きあたる。次郎左衛門は無言にて手あらく突き退くれば、長悦は床几のまへに倒れる。)

長悦。

誰だか知らないが、ひどいことをする。あ、痛。あ、痛。

(次郎左衛門は氣がついて長悦を抱きおこす。)

次郎左。

長悦か。堪忍しろ。

長悦。

(耳をかたむける。)さういふお前様は佐野のお大盡ではございませんか。

次郎左。

む、次郎左衛門だ。堪忍してくれ。

長悦。

どう致しまして……。はい、お早うございます。(挨拶する。)

次郎左。

(ふところより紙入れを出す。)こゝに遣ひ残りが些とばかりあるから、おまへに遣るぞ。

長悦。

はい、はい。ありがたうございます。(探つてみる。)や、これは紙入れぐるめ下すつたので

ございますか。

次郎左。

さうだ。早く持つて行け。

長悦。

旦那様のお紙入れでは定めて立派なものでございませうな。

次郎左。

え、なんでもいゝから早く行け。

長悦。

旦那様はもうお歸りでございますか。今晚はお月見でございますから、いづれ又、夕方からお出直しでございませうな。

次郎左。

え、うるさい。早く行けといふのに……。行け、行け。

(突き飛ばされて、長悦は又もや倒れんとして危く踏みとまる。)

長悦。

はい、はい。では、ごめん下さいまし。

(長悦は上のかたへ去る。次郎左衛門は苛々しながら、下のかたの奥を見る。)

次郎左。

お、来た、来た。八橋が来た。

(あわて、床几に腰をかける。奥よりお藤は再び櫻湯を持つて出づ。)

お藤。

どうも遅くなりました。

(次郎左衛門は茶碗を取らうとして、手がふるへる體にて思はず茶碗を取落せば、茶碗割れる。)

次郎左。

(怒鳴りつける。早く代りを持つて来い、持つて来い。)

お藤。

はい、はい。

(お藤はあきれて奥に入る。下のかたの奥より八橋は掛橋に手をひかれ、つゞいて浮橋と八千代、

お清も出づ。)

浮橋。

次郎さんがさつきからお待兼ねでござんす。

お清。

お早くお出でくださりませ。

八橋。

はて、せはしない。今行きます。

(茶屋のまへに來りて、八橋は床几にかけ、八千代はそばに腰をかけ、掛橋等は茶屋の店さきに腰をかける)

次郎左。

お、八橋。來てくれたか。

八橋。

お前はなぜ直して行きなさんせぬ。なにか氣に障つたことでもござんすのかえ。

次郎左。

いや、別にさういふわけでもないが……。忙がしうに。わしは用がある。用がある。それで歸るのだ。

八橋。

お前はもうこれぎり廊へ足踏みをしない氣ではござんせぬかえ。

次郎左。

(おごろく)な、なぜだ。

八橋。

ふだんから最辰にしてゐる太鼓持の新中に、お前はゆうべ何を遣りなさんした。わたしはみんな知つてゐますぞ。おまへが大事にしてゐた印籠を、あの太鼓持の手に渡して、これはおれの生形見だと……。

次郎左。

え。

八橋。

そんなことを云はんしたであらうが……。

次郎左。

は、は、は。それは酒の上の常談だ。あの新中め、ことしは四十二の厄年だとか云つて、ひどく氣にしてゐるから、いや、人間は老少不定、わかい俺の方が先へ死ぬかも知れない、これはまあ形見のつもりで貰つて置けと……。は、は、は。常談だ、常談だ。かならず氣にかけてくれるな。

八橋。

常談ならよいけれど、久しく馴染んだ次郎さんが、若しもこれぎりになるかと思ふと、わたしはなんだか寂しうてならぬ。

次郎左。

それほどに思つてくれるなら、いつかの身うけをなぜ断つた。

八橋。

それとこれとは譯が違ふ。お前はやつぱりいつまでもお客で通つて、面白く遊ばば可いではござんせぬか。

次郎左。

む。

お藤。

(櫻湯を持つて出る)花魁、お早うござります。(次郎左衛門に)今度はすこしお熱いかも知れませぬ。

次郎左。

よし、よし。(茶碗を取りて平氣で飲む)

お藤。

お熱くはござりませんでしたか。

籠釣瓶

次郎左。ぬるいか熱いか、夢中で飲んでしまった。

八橋。一服お吸ひなんし。
(云ひながら腰の刀にそつと手をかける時、八橋は煙草を吸ひつけて、次郎左衛門の前に出す。)

次郎左。(氣怯れして。)むむ、(煙管をうけ取りて喫む。)

お藤。さあ、御酒のお支度も出来て居ります。兎もかくもお二階へ……。

掛橋。そんなら花魁。

淨橋。お出でなんし。

八橋。次郎さん、お先へ行きますぞえ。

八千代。八橋は床几を起つ。次郎左衛門は刀をぬかうとして矢はり抜きかかれてゐる。

八千代。あゝ、あゝ。

(八橋は茶屋に這入りて二階へあがらうとする。次郎左衛門は幾たびか抜きかけようとして又躊躇する。)

お藤。さあ、旦那。お前様もすぐにおあとから。

次郎左。

おゝ、(抜きかけた刀をそつと納める。)どれ、迎ひ酒を一杯のまうか。
(次郎左衛門も二階へあがりゆく。皆々附いてゆく。)

(II)

吉原の裏田圃。正面には吉原の廓が近く見え、その裾には細き田川のながれありて、芒などの秋草生ひたり。

(雨の音きこゆ。下のかたより職人久太、六藏・徳松の三人走り出づ。)

久太。むやみに皆なが駈けて行くが、吉原に何かあつたのかしら。

六藏。朝つばらに火事でも始まつたかな。

徳松。まあ、なにしろ行つてみよう。

(上のかたより奴夫丑太郎は手拭をかぶり、尻を端折りて走り出づ。)

久太。おゝ、丑公ぢやあねえか。

六 藏。

廊がなんだかさうくしいやうだが、何かあつたかえ。

丑太郎。

いや、大變な騒ぎ。仲の町のちばな屋のお客で、佐野の次郎左衛門といふ男が、茶屋で花魁を斬つたのだ。

徳 松。

そりやあ大變だ。

久 太。

さうして斬られたのは。

三 人。

誰だ、誰だ。

丑 太。

大兵庫屋の八橋花魁だ。

(このうちに下の方より町人ふたり出づ。あとより榮之丞の妹おすみも足早に出づ。上のかたよりは按摩長悦出づ。)

もし吉原になにかあつたんですかえ。

町人一。

今もそれを云つてゐるところさ。大兵庫屋の八橋さんが次郎左衛門といふ客に斬られたのだ。

丑太郎。

(おもはず進み出づ。)もし、八橋さんがほんたうに斬られたのでござりますか。

おすみ。

立花屋まで客を送つて行つて、茶屋の階子をあがり切つたところを、次郎左衛門がうしろ

丑太郎。

から不意に斬付けたが、刀もよし、腕も利いてゐたとみえて、花魁は胴から眞二つ……。

おすみ。

みごとに胴斬にされてしまつたのだ。

長 悦。

(進み出る。)む、そんなら佐野の旦那が花魁を斬つて……。はて、おそろしいことをしたものだ。

丑太郎。

わたしはこれから淺草の親分のところまで行つて來なけりやあならぬえ。

久 太。

おれ達はまあ仲の町へ行つてみよう。

皆 々。

それが可い、それが可い。

丑太郎。

生憎にばら付いて來やあがつた。

長 悦。

(丑太郎は下の方へ、職人三人と町人ふたりは上の方へ、わかれくに走り去る。長悦とおすみはあとに残る。)

おすみ。

佐野の旦那がどうしてそんな氣になつたか。道理で、さつきの聲がひどく上ずつてゐると思つたが……。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

おすみ。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長 悦。

八橋さんを眞二つとは、聞いても悚然とするやうな。

長悦。

(聞きとがめる。) もし、もし、おまへさんは榮之丞様の妹御さまではございませんか。

おすみ。

おまへは時々わたしの方へも流して来る長悦さん。思ひも寄らないことが出来ましたな。

浅草の観音様へ朝まゐりに行つた戻り路に、この田圃へさしかゝると、大勢の人たちが駈けてゆくので、どうしたことかと思つてみましたら、八橋さんが斬られたとは……。

長悦。

あゝ、それでこの紙入れを……。(懐中より彼の紙入れを出す。)

おすみ。

大層みごとな紙入れでござりますな。

長悦。

いえ、なに。(再びふところに入れる。) お前さんのところの榮之丞様も、たしかあの八橋さん

とは深いお馴染でございましたな。

おすみ。

その兄様もゆうべから……。

長悦。

おゝ、さうだ。榮之丞様もゆうべ兵庫屋においでなされた筈。わたくしは廊下でお聲を聞き

きました。

おすみ。

よもやとは思へど、相手が次郎左衛門では……。

長悦。

え。

おすみ。

兄様にもどんな間違ひがあらうも知れぬ。わたしもこれから廊へ行きます。

長悦。

(長悦は探りながらにおすみの袂をとらへる。)

いや、いや。若いお女中がそんなところへ……。どんな傍杖を受けようも知れませぬ。お

止めなされませ、おやめなされませ。

おすみ。

でも、兄様に若しものことが……。

長悦。

いや、いや、あぶない。

おすみ。

えゝ、邪魔な。放してください。

(おすみは長悦を突き退けて、上の方へ走りゆく。雨の音きこゆ。)

(三)

もとの立花屋の店先。

(廊のわかい者、鶯のもの大勢は、思ひ／＼に棒または鶯口を持ちて次郎左衛門を取圍む。次郎左衛門は血刀を持ちてまん中に突つ立つ。雨の音きこゆ。)

籠釣瓶

次郎左。待て、待て。すこし云ふことがある。いかにも兵庫屋の八橋は、この次郎左衛門がたしかに殺した。ほかに邪魔する奴等は二三人に手を負はせた。しかし次郎左衛門は餘人に對して毛筋ほどの傷を付けようとも思はぬ。このかたなで尋常に切腹する。邪魔せず死なせてくれ。

大勢。ならねえ、ならねえ。ふん縛れ、ふん縛れ。

次郎左。これほどに譯を云つてきかせても、肯かすにおれを縛るといふか。よしそれならばおれの腕のつゞく限り、片端から斬りまくつて、勝手なところへ行つて勝手に死ぬ。迂濶に邪魔をして後悔するな。

大勢。それ、遣つちまへ、遣つちまへ。

(大勢は得物を振りかざして打つてかゝる。次郎左衛門は大勢を相手にして闘ひ、かれらを追ひて下のかたの奥に入る。茶屋の奥よりお藤は榮之丞の手をひいて出づ。)

お藤。もし、榮之丞様。相手はもう死物狂ひで、誰になにをしようも知れませぬ。この間に早くお逃げなされませ。

榮之丞。それにしても、八橋の死顔をひと目……。

お藤。はて、そんなことを云つてゐる場合ではござりませぬ。

(下のかたよりおすみ走り出づ。)

おすみ。お、兄さま。御怪我はござりませぬか。

榮之丞。お、妹。お前こそこんなところへ來てはあぶない。早く歸れ。

おすみ。おまへも一緒においでなされませ。

お藤。さあ、さあ、早う。

(この時、下のかたの奥より次郎左衛門は鷹の者銀次とたゝかひながら出づ。)

次郎左。お、榮之丞か。もうかうなつたら寧ろのこと。(榮之丞を目かけて飛びかゝる。)

銀次。え、どこへ行きあがるんだ。
(次郎左衛門は榮之丞に斬つてかゝる。榮之丞も抜きあはせて闘ふ。銀次もこれに絡むで、榮之丞は遂に一太刀斬られる。わかい者と鷹のもの大勢出で、次郎左衛門は闘ひながら上のかたに入る。おすみとお藤はかけ寄つて榮之丞を介抱する。)

おすみ。兄様。傷は浅うござりませぬ。

お藤。まあ、兎もかくもお這入りなされませ。

お藤。

（お清とお染は奥より怖々出づ。）
さあ、お前達も手を貸しておくれよ。

（お藤はふたりに指圖し、おすみも附添ひて、榮之丞を介抱しながら奥へ連れてゆく。上のかたより若いもの大勢出づ。）

若い者。

お、屋根へあがつた、屋根へあがつた。梯子を持つて来い。梯子を持つて来い。

（鴛のものは長梯子を持ち出づ。銀次も出づ。）

銀次。

素人の癖に屋根へあがつても、雨で瓦が滑るから逆も長くはあるけめえ。それにしても早く梯子をかける。

（鴛のものは茶屋の屋根に梯子をかけて、二三人はすぐに駈けあがる。）

大勢。

それ、逃すな（上をみて口々に叫ぶ。）あぶねえ、あぶねえ、氣をつける。

（鴛の者ひとり屋根より落ち来る。ついで次郎左衛門は鴛の者ひとり小脇にかゝりながら、長梯子をつたひて中途まで降り来るを、鴛のものは大勢寄りてその梯子を倒す。次郎左衛門は地に落ちて倒れるところを、大勢が寄合つておさへ付けようとする。次郎左衛門は跳ねかへしてまた起きようとするを、大勢は長梯子を倒しかけて梯子伏せにする。）

幕

楠

明治四十一年十月作。大正八年九月訂正。
大正十年一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——楠正儀(市川左團次) 楠正勝(市川蓮升) 和田正武(阪東壽三郎) 宇野光連、紀六郎左衛門(嵐吉三郎) 雄郎(市川猿之助) 雄六(市村龜藏) お村(市川松蔭) 伊賀の局(阪東秀調) 熊王丸(市川壽美藏) など。

登場人物——楠左馬頭正儀。楠河内太郎正勝。和田和泉守正武。宇野六郎光連。宇野熊王丸。紀六郎左衛門。村上小平太。湯淺五郎兵衛。三輪七郎。志貴新八郎。獵夫雉郎。同く雉六。妹お村。伊賀の局。ほかに侍女。天狗。家臣。宮奴など。

第一幕

(1)

河内の國、金剛山の麓、建水分神社の境内、正面に五重の塔あり。これに沿うて上手に枯れたる楠の大樹、幹に注連を張れり。うしろは木立深く、上手の奥に南木神社の棟遠くみゆ。舞臺の上下に

楠

は天を凌ぐ杉の大樹しげり合ひて、晝なほ闇きありさまなり。南朝の正平二十四年三月の末、未の刻。
(宮奴甲乙二人、熊手にて、楠の枯葉をか。上手より、楠の家來、湯淺五郎兵衛、烏帽子、直垂、草履にて出づ。)

五郎。

こりや、こりや、宮奴共。當御社の御神木について、なにか不思議ありとの訴へぢやが、不思議とは抑も如何やうのことであるぞ。

宮奴甲。

これは、これは、湯淺殿でござりましたか。早速のお出向き御苦勞に存じまする。

宮奴乙。

不思議とはかやうの次第、先づ御覽くださりませ。

五郎。

む。(楠の大樹に眼をつけろ。)や、御神木の楠が一夜のうちに凋みしは、不思議といふも餘りあり。今あらためて申すには及ばねど、當社の奥にあはせ祀れる南木神社は、楠判官正成公、湊川において御生害あつたるを、時の帝大いに悼ませたまひ、おん手づからその木像を刻ませられて、こゝに神として齋きまつり、南木大明神の號を降させたまふ。その御社の神木が、雨風の祟りもなく、斧を入れたるあともなきに、枝は傷み、葉は落ちて、おのづと立枯れに枯れんとするは、一定唯事ともおぼえぬぞ。

宮奴甲。

仰せの通り、これほど尊い御神木が仔細もなしに枯れるとは、なにとも合點がまゐりませぬ。

ぬ。

五郎。

左はいへ、見るところ未だまつたく枯れ盡したるにもあらず。枯れたる枝を斷ち、乾きたる根に培はゞ、ふたゞび生きぬとも限るまい。われはこれより直ちに歸城して、このおもむきを申立つるであらう。

宮奴乙。

わたくしどもに御咎めのないやうに、宜しくおとりなしを願ひまする。

五郎。

委細心得た。平生とても斯くのごとくに注連を張りまはし、みだりに立寄るを禁じたる御神木、ことに今は大事の時ぢや。何者たりともうかと手を觸るゝこと相成らぬぞ。

甲。乙。

かしこまりましてござりまする。

(五郎兵衛引返して上手に入る。)

宮奴甲。

この上は滅多なこととしてお咎めを受けてはならぬ。

宮奴乙。

掃除も先づこのくらゐにして、後の御沙汰を待つとせうか。

宮奴甲。

それがよい、それがよい。

(二人は上手の奥に入る。下手の杉木立のかけより獵夫雉郎。廿四五歳、筒袖、裁付、草鞋にて山刀をさし、鞆を背負ひ、弓をもちて出て來り、空にむかつて鳥笛をふく。妹お村、十七八歳、丸袖)

の着付、田舎娘のこしらへ、草履穿きにて、兄のあとを追ひ来る。

お村。

お、兄さん。又こゝへ来なされたか。

雉郎。

又こゝへ……。獵夫が鳥を追ひに出るのは常のことぢや。珍らしいもあるまい。

お村。

おまへは珍らしいもあるまいが、死んだ母さんが常々それを苦に病んでおられましたぞ。

もうよいほどに殺生を止めてくださらぬか。

(雉郎は又いつもの意見かと顔をもむけて、ありあふ切株に腰をかける。)

お村。

廣い世界に世渡りの術もいろ／＼ある。鳥や獸の命をとらいでも、兄妹三人の口すぎはならうに、あけても暮れても殺生ばかりして、かならず好くは報ひませぬぞ。ましてこゝは御社の境内、神々の御罰もおそろしいとは思はれぬか。

雉郎。

又してもいつもの愚癡か。なるほど殺生は悪からう。しかし俺たちの弓矢で取るのは、多寡が鳥や獸の命で、人の尊い命は取らぬぞ。申すもおそれ多いことぢやが、御領主の楠どのは弓矢を取つて何十年といふ間、あけても暮れても軍ばかりで、その度ごとに命をとらるゝ者は、何十人、何百人、なん千人ぢやと思ふ。それでも世には楠どのを、あつばれ仁義の名大將といふではないか。

お村。

いえ、いえ、それは天下のお爲。自分ひとりの爲とは事が違ひませう。

雉郎。

いや、おれの見るところでは、矢はり自分のためぢやと思ふ。もし天下の爲を思ふならばなぜ京方と和睦はなされぬぞ。和睦ができれば天下は太平、商人も百姓も安堵して、おのが生業もなると云ふものぢや。その曉にはこの雉郎も、生物商賣をやめにして商人にもならう、百姓にもならうが、何時家を焼かるゝか、なんどき命を取らるゝか、あすをも知れぬ亂世に、誰が安堵して渡世がならう。からだ一つを資本にして、野山を枕の獵夫渡世、これが一番氣樂であらうよ。

お村。

なるほど、それももつともぢやが、その太平はいつの事やら……。ほんに軍にはもう飽きました。

雉郎。

飽きた、あきた。軍には實にあきた。敵と味方が討つつ討たれつ、今のありさまで果てしても無くつゞいたら、武家はいふに及ばず、百姓も商人も飢え疲れ、果は日本の人種も盡きるであらうぞ。

お村。

聞けば聞くほどおそろしいことばかり、此世が暗の底へ沈んでゆくやうにも思はれます。一日も早う軍もやみ、おまへも殺生をやめて下されたら、嬉しいことでごさんせうに……。

雉郎。

近ごろ嗚呼がましい云分ぢやが、權どのと俺とは根くらべで、殿さまが殺生の軍をおやめなされたら、おれも殺生の渡世を止める。殿様がいつまでも弓矢の意地を張らるゝなら、俺もいつまでもこの弓矢と、自分ひとりで誓ひを立てた。なんと無理ではあるまいが……。

(お村は争ひかれて歎息す。下手の木かげより雉郎の弟雉六、おなじ扮装、弓を持ち出て出づ。)

雉六。

おゝ、兄貴……。妹もこゝにゐたか。

雉郎。

弟、けふの獲物はどうであつたな。

雉六。

朝から家を飛び出して、山の方から富田林、慈眼寺の森の邊まで、半日あまりも狩り暮したが、けふに限つて雀一羽、兎一匹見あたらぬといふは、不思議な日もあるものなう。

お村。

それもやつぱり神々様が、殺生をやめよといふ戒か。

雉郎。

えゝ、まだ云ふか。(起ちあがる。)これから二人が手わけをして、念のためにもう一度、そ

こらの森を獵つてみようか。

雉六。

このまゝ素手でも歸られまい。兎かうするうちに日が暮れたら、塙へ歸る鳥もあらう。

(兄弟のきかゝるを、お村は遮る。)

お村。

では、どうでも殺生を……。

雉六。

えゝ、商賣の邪魔するな。

雉郎。

さあ、来い、来い。

(兄弟は妹を突き退けて上手に入る。お村はあとを見送り、ちつと思ひに沈める體。塔のうしろより赤松の家來村上小平太、三十餘歳、毛皮買ひの旅商人にいでたちて窺ひ出づ。)

小平太。

これ、これ。

(お村答へず。小平太はすゝみ寄りて、再び呼ぶ。)

小平太。

これ、娘御。

お村。

(初めて心づく。)え、お前は……。

小平太。

いや、いや、かならず胡亂な者ではござらぬぞ。わしは毎年この里へ来る毛皮買の商人ぢや。それ、見覚えがござらうが……。

お村。

いえ、いえ、お前のやうなお人は……。

小平太。

はて、見忘れたら見忘れたでよい。實はこの御城内のさるお方から、敷皮の御註文をうけて來たのぢやが、お城の搦手へまはるには、どこをゆくのが近道であらうな。

お村。

このお城は正成公が、もろこしの八陣になぞらへてお作りなされた堅固の繩張とやらで、

小平太。これから先の山路は蜘蛛十文字、土地不案内の旅のお人は、かならず迷うでござんせうぞ。さればとて行かねば済まぬことぢや。兎もかくも教へてくだされ。

お村。先づこの森を右にみて、一町ばかりは河づたひ、それからだん／＼に爪先あがり、曲り曲りの角々には、大きな杉の立木がある。それを目じるしに左へ左へと登るが近道。もし一度ふみ違へたら、又もとの道に戻りませうぞ。(向うを指さして教ふ。)

小平太。これは忝けない。では、その通りに登るとしませう。

お村。よく氣をつけて行きなされたがよい。

小平太。いろ／＼有難うござつた。

(挨拶して、小平太はゆきかゝる。向うより楠の小姓熊王丸、十六歳、童水干、大口袴、草履にて出で、花道にて小平太とゆき合ひ、小平太は顔をそむけて足早に去る。熊王丸はあとを顧みて不審の體なりしが、やがて舞臺に來りて上手へゆきかゝる。)

お村。お、熊王殿。けふもお詣りでござりますか。

熊王。お、お村か。殿御名代として當社へ、日々まゐるが某しの役目ぢや。正成公の荒御魂を齋きまつれる南木神社は、楠のお家の守護神も同様、一日たりとも御拜を怠るなど、かね

お村。あ、の……鳥渡お待ちくださりませ。

(熊王無言にて立ちまゐる。お村恥かしげに、あらためて一禮する。)

お村。おめでたう存じます。

熊王。なに、めでたいとは……。 (考へる) お、元服の儀か。

お村。はい。

熊王。誰が云ふともなく洩れきこえて、最早そち達の耳にも入つたか。いかにも熊王、和田和泉守殿の烏帽子兒と相成つて、今宵元服せよとの御沙汰ぢや。

お村。御元服遊ばしたら、これまでとは違うて立派なお武士様、さだめて御出世もなされませう。

お村。憚りながら、わたくしも御祝儀申上げます。

熊王。元服がそれほど目出たいか。世はさま／＼、人の心はさま／＼ぢや。よそ目には目出たい

とも、羨ましとも見ゆるであらうなう。(嘆息する。)

(お村は合點がゆかね體にて口を噤む。雨の音きこゆ。お村は空を見あげる。)

お村。お、いつの間にか雨が降つてまゐりました。

楠

熊王。

また降りかゝる花の雨、蓑笠持たぬは不覺であつた。

お村。

いえ、お案じなされますな。わたくしが宿へ一走りして、すぐに持つてまゐりませう。先づそれまでは……。

(うしろの塔を指させば、熊王うなづきて、塔の縁にあがる。)

熊王。

そちもこゝへと申したけれど、男女が袖をならべて、おなじ軒端の雨やどりは、人の見る目も憚りあり。濡れぬうちに早う歸れ。雨はやがて止むであらう。蓑笠は持參に及ばぬぞ。

お村。

賤の女子の古蓑笠、お氣にめさぬは知れてはあれど、たとひ一晌半時でも、お身に着けてくだされましたら、蓑も笠もその持主も、嬉しいことごとざりませうに……。では、これでおわかれ申します。

(お村はこゝろ残して去る。熊王は再び空をみる。)

熊王。

こりや。生憎の雨であるな。(あたりを視て、彼の楠に眼をつける。)や、楠が一夜に枯れたは……。非情の草木も千年を経れば、たましひを宿すと聞く。ましてこれは神木とあがむる楠、いはれなくして枯れもすまい。はてなう。

(II)

任吉の濱邊。正面は海原にて、岸には松林あり。

(赤松の侍 大將宇野六郎光連、三十八九歳、大童 鎧、手負の體にて長刀を杖にし、松の根に腰うち掛けたり。金鼓のひびき遠近にきこゆ。)

六郎。

敵は小勢といひ、且は平場の軍。十に八九は勝利と思ひのほか、又しても楠が計略に陥つて、斯くはさんぐの不覺を取つたるよ。こゝは六郎の死ぬべきところぞ。あはれ好き敵もまゐれよかし。引組んで刺し違へんものを……。それも今はかなはぬか。

(松の木かげより熊王丸出づ。)

六郎。

おのれは誰そ。
(熊王無言にて平伏す。)

六郎。

おゝ、熊王か。よろこそ參つたれ。父のこゝろさしを受けついで、足利どのへ二代の忠勤

を相勵め。かたきは楠正儀ぞ。忘るゝな。

(熊王うなづく。六郎はこゝろよげに打笑む。)

六郎。さすがは我子ぞ。最期の誓をたがへず、かたき正儀の首ひつ提げて、將軍の實檢にそなへよ。

(熊王泣いてうなづく。下手より楠の軍兵數人出づ。)

軍兵。

敵の大將、それ。

(打つてかゝる。熊王、小刀をぬきて防ぎ戦ふ。軍兵はかなはずして逃げ去る。そのあひだに六郎は心しづかに鎧をぬぎ、あはや腹を切らんとす。熊王おどろきて走り寄り、その手にすがり止む。)

六郎。

え、未練な奴。宇野六郎が最期の邪魔するな。

(熊王すがりて放さず。六郎いらつて熊王を引つ掴み、うしろの松の木かけへ投げ入れ、我とわが腹につき立つる。楠左馬頭正儀、引立烏帽子、鎧にて馬にまたがり、楠の嫡子正勝、大童、鎧。三輪七郎、烏帽子、鎧。軍兵大勢附添ひ出で、この體をみて正儀は七郎をみかへれば、七郎は心得て下手に來り、六郎の前にひざまづく。)

七郎。

御生害いさぎよく見申した。して、誰殿の御内、何人に候ふか。主人左馬頭うけたまはら

んとの事にござりまする。

六郎。なに、左馬頭とや。(正儀を見かへる。)おん身の矢先に射縮められて、かやうに相果つるそれがしは、赤松太夫の判官殿御内にて、いさゝか人にも知られたる宇野六郎光連候ふ。いで、首取られよ、楠どの。

正儀。さては豫て聞き及ぶ宇野六郎どの候ふか。勇士の覺悟かくこそありたけれ。仰せにしたがひて正儀、和殿の首を受取り申すぞ。

正勝。仰せ置かるゝことあらば、それがし承はりて兎もかくも計らひ申さんに……。

六郎。(頭を掉る。)いや、いや、生きて還らぬは豫ての覺悟ぞ。申し置くべきこと些とも無し。いで、いで。(刀を引きまはして倒る。)

正勝。惜しき武士。あつばれ最期ぞ。

七郎。若殿の初陣に目ざましき勝軍、御祝儀申上げまする。

正儀。まことに今日は太郎の初陣、老先ながき若者がこれより度々の合戦に猶いかばかりの罪をか作るべき。思へばわれも十六歳の初陣より今に至るまで廿餘年、山にたゝかひ野に戦ひ、あたら幾萬人の血を流しつることぞ。近きころ彼の藥師寺がよめる歌に「取るも憂し取ら

ねば人の數ならず、捨つべきものは弓矢なりけり」弓矢を捨つるも本意ならねど、弓矢をとるも樂しからず。誰か袋に弓を藏めて、天下太平のはかりごとをめぐらす者ぞ。

(正儀嘆息す。闇中に舞臺の光景一轉。)

(三)

熊王。

もとの南木神社境内。塔の扉をあけて熊王走り出づ。

父上、父上。(呼びながら追はんとして、又立ちどまる。) や、父上はおはさぬ……。楠どのも在さぬ……。敵も味方も……。 (あたりを見まはして。) む、こゝは住吉の戰場ならず、貝鐘太鼓ときこえしは、梢にさわぐ夕風か。雨の晴間を待つうちに、われにもあらで假寝の夢に入りしは父のおもかげ、その勇ましき最期のありさま。夢か……。夢ともおぼえぬまでに、まざくしうも見えつるは……。討つべきかたきを討たずして、唯いたづらに日を送るおのが心の身を責めて、うつゝともなく苦むか。但しは父上尊靈の假に姿をあらはして、

わが腑甲斐なきを叱らせたまふか。數ふれば七年このかた、夜となく晝となく、夢となくうつゝとなく、わが身を焦がす修羅の火焰の、いつかは消えん、いつかは絶えん。さりとは口惜しや、あさましや。父上は心猛くおはしませしに、われは何とてかくまでに心弱きぞ。かたきは楠、わが目の前にあり。いでや……。 (勇んで起ち上りしがまた思ひかへしつ。) さりとて世になさけある楠どの。ふところに刃を抱く我とも知らず、年頃日ごろ御目をかけられ、熊王、熊王と召したまふ。その恩人に刃をむけて、胸をや突かん、首をや搔かん、われとわが手も定まらず。(ちつと思案して。) いくたびか思ひなほして又迷ふは、女子にも劣りし心弱さよ。

(熊王は分別にまどひて立つ。時の鐘きこゆ。)

熊王。

おゝ、けふも最早や申の刻、空しくこゝに時を移すも詮なし。かたきの父とは申しながら、楠正成はあつばれの名將、いで参拜して歸らうか。雨も幸ひに小歇みとなつた。

(熊王は力なげに足を運び、上手の奥に入る。下手より以前の村上小平太は疲れたる體にて出て來り、あたりを屹と見まはして立つ。)

小平太。

おゝ、こゝは正しく舊の道ぞ。千劍赤坂の城々へ通ふべき麓の路は、かの八陣になぞらへ

楠

て、楠が作り設けしと、里の女子の物語もいつはりならず。城は目の前にみえながら、仰ぎて進むと思ふ間に、めぐり／＼て再び舊の路に復るは、さすがに楠の繩張、いしくも巧んだる要害な。(塔の縁に腰をおろす。) 彌生も末とはいひながら、山里の春はまだ寒きに、先刻よりの俄雨にて、肩も裾も直濡れとなつた。(袖や袂をしぼりつ。) さるにても、日が暮れてはいよく、おぼつかなし。一旦里へ引返して、然るべき案内者をたのむとせうか。
(梢にて鳥の羽音さわがしきに、小平太は空をみる。)

小平太。

おゝ、鳥も塙へ歸る時刻。どれ、急がうか。

(小平太は起たんとする時、矢一筋飛び來つて、かたへの楠に立つ。小平太おどろきて見かへる時、二の矢飛び來つて、その胸に立つ。小平太苦みて倒る。向うより以前の雉郎は弓をもちて走り出づ。これと同時に東の揚幕より雉六もおなじ、弓を持ちて走り出づ。雙方舞臺にかけ來りて、倒れたる小平太を見ておどろく。)

雉郎。

や、人ぢや。

雉六。

(兄弟あわて、小平太をか、へ起し、耳に口をよせて呼ぶ。)

雉郎。

これ、旅のお人。粗相ぢや、あやまちぢや。赦してください。

雉六。

これ、心をたしかに持たつしやれ。

雉郎。

しつかりさつしやれ、なう。

(かはる／＼に呼び活ければ、小平太、苦痛の體にて僅かにうなづく。上手の奥より熊王出づ。)

熊王。

そち達は雉郎兄弟、このありさまは何としたのぢや。

雉郎。

小鳥を射ようと兄弟が切つて放した矢は狂うて、思ひの外なるこの珍事に、これから何う

してよからうやら、途方にくれて居ります。

熊王。

なにさま不慮の災ぢやが、今更あわて、何とならうぞ。幸ひこゝに金創の妙薬を所持して

たれば、矢疵を洗うて手當をくはへん。そち達は早う里へまゐつて、番又は編板のたぐひ

を持ち來り、手負をはこぶ用意をせよ。

雉六。

かしこまりました。では、些との間この手負の御介抱をねがひます。

熊王。

よい、よい。早うゆけ。

(兄弟は急ぎて下手に入る。熊王は左右を見まはして、小平太の耳に口をよせる。)

熊王。

小平太、小平太。

楠

小平太。 おゝ、熊王殿ではござりませぬか。

熊王。 七年このかた相見ざりし小平太、なにゆゑに斯くは姿を變へ、こゝらへまゐりしぞ。

小平太。 赤松殿より大事のお使……。

(云ひかけて弱るを、熊王は介抱する。)

熊王。 むゝ、その使は誰が許へ……。こりや心を強うして確と云へ。

小平太。 楠どのへ……。

熊王。 なに、楠どのへ……。して、その用事のおもむきは……。

小平太。 和睦……。 (云ひかけてうつとりとなる。)

熊王。 や、和睦……。足利どのと楠殿と和睦……。しかと左様か。

小平太。 むゝ。 (首肯きたるのみにて、弱りて倒る。)

熊王。 こりや、弱るな。傷は浅いぞ。こゝろを確かに持て。こりや小平太、小平太。

(呼べども返答なきに、熊王は嘆息す。)

熊王。 獵矢なれども急所の痛手、もはや救ふに途もないか。赤松太夫の判官どのの御内にて、村上

小平太ともあるべき者が、田夫野人の雀弓にかゝりて、かゝる最期を遂ぐるとは、測りし

られぬ人の運命。この小平太ばかりでなく、わが身の果も何となることぞ。父のかたきを報ひんと、素性をつゝみて仇に仕へ、唯いたづらに月日を送るうちに、俄に病みて死失するか、或はかゝる不慮の最期をとぐるか。こゝろざしを果さずして命畢らば、われは遂に不孝の子たるべし。今更ならねど情はなさけ、仇は仇、先づ楠どのを撃つて仇を報ひ、われも其場に自害して情に答へん。楠の枯れたるは楠殿のほろぶる兆ぞ。さるにても心得ぬはこの密使、心得ぬは和睦の沙汰よ。

(下手より雉郎、雉六は番を持ち、お村もついて走り出づ。)

雉郎。 さぞお待ち兼ねでござりましたらう。

雉六。 たゞ慌てまするばかりで、つい／＼遅うなりました。

熊王。 おゝ、兄弟、遅うても早うても同じことぢや。かれは手當を待たずして、已にむなしく相

成つたぞ。

兄弟。 え。

お村。 では、もう療治はとゞきませぬか。

熊王。 これもたがひの不運ぢや、是非もあるまい。

楠

お村。

兄さん、殺生の祟りはこの通りぢや。今といふ今、目が覺めたでござんせう。こんな大事を仕出して、この末なんとなる事か。(泣く。)

雉郎。

今更泣いても喚いても返らぬことぢや。ひとを殺して逃げかくる、雉郎でない。多寡がやまぢや。命にかゝはることもあるまい。

雉六。

これから立派に名乗つて出て、兄弟の中でどつちか一人が御法通りになればよいのぢや。(上手より湯淺五郎兵衛案内して、和田和泉守正武、三十七八歳、烏帽子、直垂、家來二人を引き連れて出づ。)

正武。

熊王か。お、和泉守殿でござりましたか。

熊王。

御神木はかくの通りにござりまする。や、まだその上に何者か幹の只中に矢を立てたわ。神木の俄に枯れたる趣、早くも城内へきこえ渡りて、これぞ楠家滅亡の兆なんど不祥のことばをなす者多ければ、兎も角もその實否を見とゞけに向うたるところ、木のおのづからに枯れたるのみか、あまつさへ幹の眞只中へ矢を射かけしは、なにさま仔細ありげにも見らるゝぞ。あるひは當家を怨める者あつて、ひそかに楠の根を枯らし、呪ひの矢など射

かけてたるにはあらざるか。きつと吟味せねば相成るまい。
(雉郎と雉六はかくと聞くより進み出づ。)

いえ、いえ、矢を射かけましたはわたくし共のあやまちで、呪ひの矢などは存じも寄らぬこととござりまする。

小鳥を射る矢があやまつて御神木を傷け、あはせて人を殺しましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

雉郎。

なに、人をも殺めたと申すか。

雉六。

それ。

五郎。

(見かへれば、家來二人に心得て小平太の死骸をひき起す。)

正武。

いづこの何者かを知るべき證據はなきか。懷中をあらため視よ。

家來。

はあ。(小平太の懷中を探る。) 胴卷のほかには何物もござりませぬ。

正武。

さりながら其奴の面體、よのつねの商人百姓とも思はれず。(思案して。)こゝろみに襟を裂きてみよ。

家來。

はあ。

(家來は小平太の上衣の襟を裂けば、一通の密書あらはる。)

家來。このやうな物がござりました。

正武。(手に取りて。) さてこそ案のごとくなれ。(先づ上書をよみてかんがへる。)

熊王。

して、その書状は……。

(差覗かんとすれば、正武あわてゝ密書をかくす。)

五郎。

又この獵夫兩人は、いかが取計ひませうや。

正武。

むむ。(考へる。) このまゝに差置かば味方の勇氣を挫く基ぞ。一々に引縛つて城内へひけ。

お村。

では、どうあつても御赦免はかなひませぬか。

熊王。

かれらに悪心なきことはそれがしが證人、なにとぞ格別の御沙汰を以て……。

正武。

え、大罪人ぢや。それ、引立てい。

(熊王も是非なく控へる。家來どもは寄つて雉郎兄弟を引立てる。お村は泣き伏す。)

幕

第二幕

(一)

おなじく河内の國、赤坂の城中。二重屋體にて、上手の床には鎧を入れし唐櫃、弓矢などを置き、ついで菊水の紋をつけたる襖、前づらには簾をおろす。庭の櫻は今や満開なり。

(下手の垣のかけより和田和泉守正武、湯淺五郎兵衛、ついで家來二人は雉郎、雉六を引立て出づ。)

正武。

頭の殿やおはす。正武まゐつて候ふぞ。

正儀。

泉州、まゐられたか。それ、簾をあげい。

家來。

はあ。

(家來二人は簾をまきあげる。楠左馬頭正儀、四十五六歳、引立烏帽子、直垂にて、敷皮の上に乗す。その傍には燈臺あり。家來は簾を巻きはりて手をつけば、正儀は「あちらへゆけ」と頷にて知らず。家來は一禮して奥に入る。)

楠

正儀。

(正武にむかひて。) しゃ、しゃ。

(正武は會釋して縁にあがり、相對して坐す。)

正武。

夜中の推參は餘の儀にあらず、これに引き据ゑたる水分村の獵夫、雉郎雉六と申す奴。不審の筋あつて斯くは縛めたるが、わたくしの成敗もいかどかと存じて、大將の御前へ引立て申した。

正儀。

して不審の筋といふは。

五郎。

おそれ多くも御神木の楠へ、呪ひの矢を射申したのでござる。

正儀。

む、委細のおもむきは熊王歸つて物語りしが、楠を枯したるは彼等の仕業にあらず、楠を射たるもまた當座のあやまちで、かれらに科はないと聞いたぞ。

正武。

さりながら、今や北朝時を得て、南朝のいきほひ日に日にちゞまる折柄、神木の楠がいはれ無くして枯れたりなると、不吉の風説きこえ渡らば、左らでも衰へたる味方の勇氣いよいよ挫けて、思ひのほかなる大事とも相成るべきか。たとひ過失ともあれ、一人は神木を射たる當の曲者、また一人は人を殺めたる罪人、所詮赦すべき者ともおぼえねば、一々に首撃つて、一方にはお家の法をたゞし、一方には味方の勇氣を勵まし候へ。

雉六。

(雉六はかくと聞くより頭をあげる。)

いや、そりや無道ぢや、無道の詮議ぢや。身にあやまちのあればこそ、先刻よりお慈悲を願うてゐるに、楠を枯らしたの、呪うたのと、なき名を負はして成敗せうとは、あまりの無道、あまりの無體ぢや。

正武。

え、黙れ、だまれ。雀を退ひ、兎を狩るおのれらに、武士の心がわからうか。おのれ等すでに過失ありと知りながら、無道といひ、無體と叫ぶはなんの故ぞ。あやまちあればこそ成敗もすれ、たゞ尋常に罪に服せ。

雉六。

忌ぢや、忌ぢや。最前から諄くもいふ通り、われくの罪は多寡が過失ぢや。あやまちで命取らるゝ法はあるまい。なう、殿。楠の御家法はそのやうに無慈悲なものか。

(又叫ぶを、正儀は徐かに見かへる。)

正儀。

騒がしや、若者。しづかに理非は申されぬか。楠の家法はおのれがいふ如き、無道のものでなきこと勿論ぢや。和泉守が云ふはほかに分別あつてのことぞ、かならず無慈悲とのみ恨むなよ。

(おだやかに云ひ聞かすれば、雉郎は初めて顔をあげる。)

楠